

# 史跡・名勝 嵐山

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告  
二〇一三―一七

史跡・名勝  
嵐山

2015年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人  
京都市埋蔵文化財研究所



# 史跡・名勝 嵐山

2015年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、建物改修及び新築工事に伴う史跡・名勝 嵐山の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

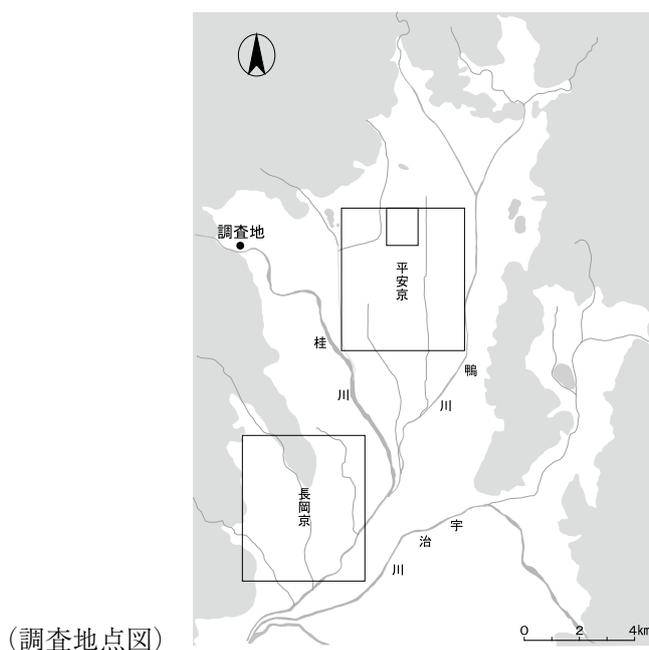
末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成27年3月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
所 長 井 上 満 郎

# 例 言

- 1 遺 跡 名 史跡・名勝 嵐山
- 2 調査所在地 京都市右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町12番地の1ほか
- 3 委 託 者 森トラスト株式会社
- 4 調査期間 2012年12月10日～2013年1月24日（1区）  
2013年6月21日～2013年8月20日（2～5区）  
2013年7月12日、12月17～19日（立会調査）
- 5 調査面積 288.6㎡（1～5区）
- 6 調査担当者 1区：小松武彦、2～5区：近藤奈央、立会調査：内田好昭・布川豊治
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「大覚寺」「嵐山」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 調査区ごとに通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。なお、調査区をまたいで検出した同一遺構については、1区で付けた番号を採用した。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 近藤奈央
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。



# 目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	5
3. 周辺の調査	9
4. 遺 構	20
(1) 遺構の概要	20
(2) 1・3～5区の遺構	21
(3) 2区の遺構	32
(4) 立会調査	40
5. 遺 物	42
(1) 遺物の概要	42
(2) 土器類	43
(3) 瓦類	49
(4) 石製品	55
(5) ガラス製品	56
(6) 金属製品	56
(7) 壁土	57
(8) 動物遺体	57
6. ま と め	58

# 図 版 目 次

図版1	遺構	1	1区第1面全景（西から）
		2	1区第2面全景（西から）
図版2	遺構	1	1区土坑30（西から）
		2	1区溝38（西から）
図版3	遺構	1	2区第2面全景（南東から）
		2	2区第3面北半 溝6・整地3下層（南西から）
図版4	遺構	1	3区第1面全景（南から）
		2	3区第2面南半全景（南東から）
		3	3区集石7（北から）

- 図版5 遺構 1 4区第1面全景(北から)  
 2 4区第2面全景(北から)  
 3 4区溝38全景(北東から)
- 図版6 遺構 1 5区第1面全景(北から)  
 2 5区第2面全景(北から)  
 3 5区溝38断面(東から)
- 図版7 遺構 1 1区溝状遺構27(西から)  
 2 1区溝32(東から)  
 3 1区土坑25・29・30断面(東から)  
 4 2区土坑1・溝2(南から)  
 5 2区整地3上層遺物出土状況(北西から)  
 6 2区土坑5(北東から)  
 7 4区集石2(南西から)  
 8 4区大堰川旧北岸(南東から)
- 図版8 遺物 出土土器
- 図版9 遺物 出土瓦
- 図版10 遺物 出土瓦・埴・石製品

## 挿 図 目 次

図1	調査位置図(1:2,500)	1
図2	1区調査前全景(南から)	2
図3	2区調査前全景(北西から)	2
図4	1区重機搬入風景(北西から)	2
図5	3区重機掘削風景(北東から)	2
図6	1区写真撮影風景(北東から)	2
図7	4区作業風景(北から)	2
図8	2区東半コンクリート製池跡全景(南西から)	2
図9	2区溝6土嚢養生風景(南西から)	2
図10	調査区位置図(1:1,000)	3
図11	調査区詳細配置図(1:300)	4
図12	周辺の調査位置図(1:5,000)	10

図13	1区中央セクション断面図（1：50）	22
図14	3区西壁断面図（1：50）	23
図15	3区西壁断面（東から）	23
図16	4区東壁断面図（1：50）	24
図17	5区西壁断面図（1：50）	25
図18	1・3～5区第1面平面図（1：150）	26
図19	1区溝状遺構27実測図（1：40）	27
図20	1区溝32実測図（1：40）	28
図21	4区集石2実測図（1：40）	29
図22	1・3～5区第2面平面図（1：150）	30
図23	3区集石7実測図（1：40）	31
図24	2区北壁・南壁断面図（1：50）	33
図25	2区第1面平面図（1：100）	34
図26	2区土坑1・溝2実測図（1：40）	35
図27	2区第2面平面図（1：100）	36
図28	2区土坑5断面図（1：40）	37
図29	2区整地4断面図（1：40）	37
図30	2区整地3・溝6断面図（1：40）	37
図31	2区第3面平面図（1：100）	38
図32	2区溝6断面（西から）	39
図33	立会No.1地点確認の柵全景（南東から）	40
図34	立会No.2地点の立会風景（南西から）	40
図35	立会No.4地点の配管作業風景（東から）	40
図36	立会地点位置図（1：300）	41
図37	平安時代の土器実測図（1：4）	43
図38	2区溝6・整地3上層出土土器実測図（1：4）	44
図39	2区整地4・中央、3区土坑6・北半出土土器実測図（1：4）	45
図40	2区土坑5出土土器実測図（1：4）	46
図41	1区土坑21・25出土土器実測図（1：4）	48
図42	出土瓦拓影及び実測図（1：4）	50
図43	出土瓦・埴拓影及び実測図（1：4）	52
図44	出土埴拓影及び実測図（1：4）	53
図45	胎土に混ぜ込まれた土器片	54
図46	出土石製品・ガラス製品実測図（1：4）	55
図47	出土銭貨拓影・金属製品実測図（1：2）	56

図48	3区整地1出土壁土	57
図49	2区整地3下層出土巻貝	57
図50	12世紀から14世紀前半遺構配置図（1：500）	59

## 表 目 次

表1	嵯峨嵐山略年表	6
表2	周辺の調査一覧表	11
表3	遺構概要表	20
表4	遺物概要表	42

## 付 表 目 次

付表1	土器類観察表	61
付表2	瓦類観察表	64
付表3	その他の遺物観察表	66

# 史跡・名勝 嵐山

## 1. 調査経過 (図1～11)

調査地は、京都市右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町地内に位置する。史跡・名勝嵐山の指定範囲にあり、鎌倉時代後期は亀山殿の敷地内、室町時代は天龍寺塔頭が多寶院及びその南に建てられていた龍門亭跡、江戸時代中期には絵図や寺伝によると天龍寺塔頭の三秀院があったとされる。今回、ホテル嵐亭跡地内に残る古建築のリノベーション及び建物の新築に伴って、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「市文化財保護課」という）の指導の下、発掘調査を行うこととなった。

調査区は、新築される建物範囲及び植栽の移植場所に5箇所を設定した。既存建物入口南側の調査区は、東西約11m、南北約9.5mに設定し、1区とした。旧中庭には、東西約8.6m、南北約16mのL字形を呈する2区を設けた。1区北側の既存建物入口に東西約4m、南北約15mの逆L字形で3区を設定した。1区の南側に東西約5.5m、南北約9mに設定した調査区を4区とした。さらに1区の西側に東西約2m、南北約5.5mの5区を設けた。いずれの調査区も、灯籠や井戸、景石などの構造物を避けて設定しているため、歪な形となった。各調査区の調査面積は、1区は91㎡、

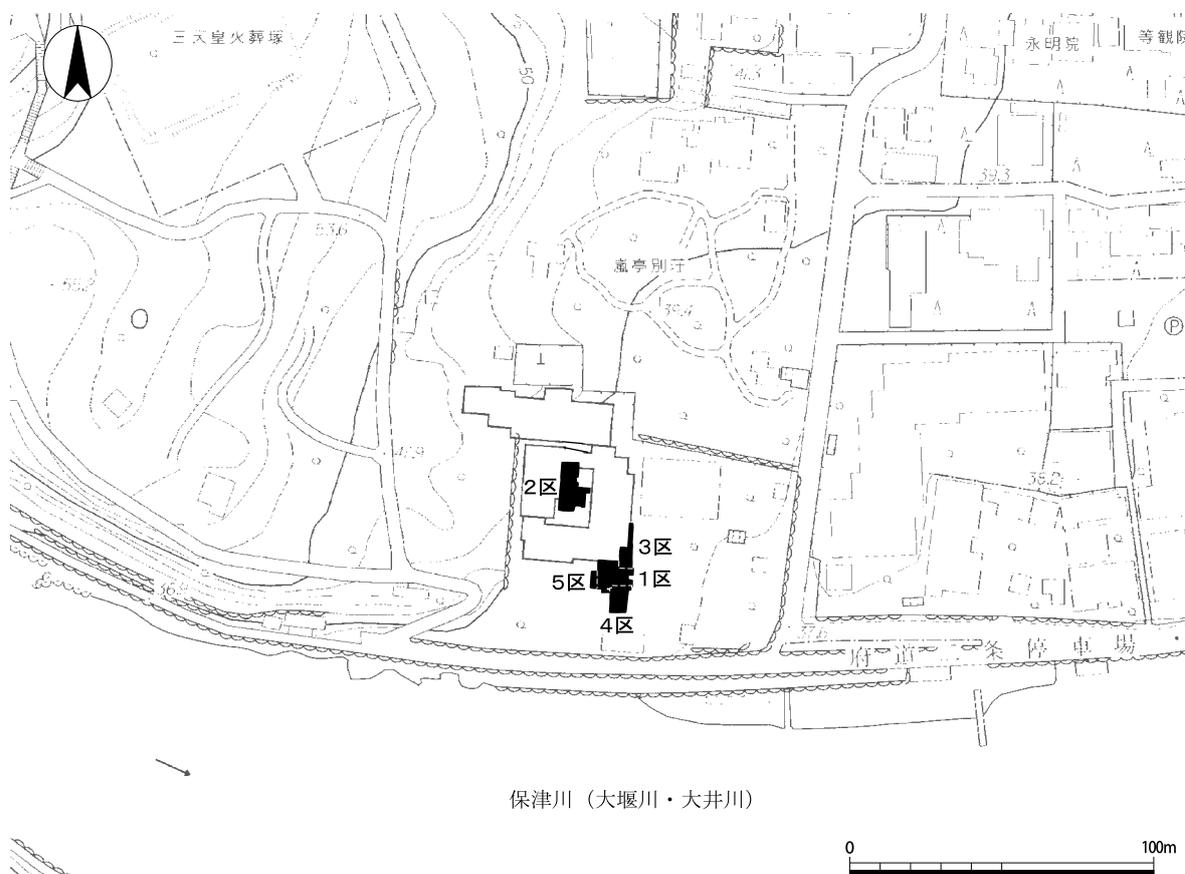


図1 調査位置図 (1:2,500)



図2 1区調査前全景（南から）



図3 2区調査前全景（北西から）



図4 1区重機搬入風景（北西から）



図5 3区重機掘削風景（北東から）



図6 1区写真撮影風景（北東から）



図7 4区作業風景（北から）



図8 2区東半コンクリート製池跡全景（南西から）



図9 2区溝6土嚢養生風景（南西から）

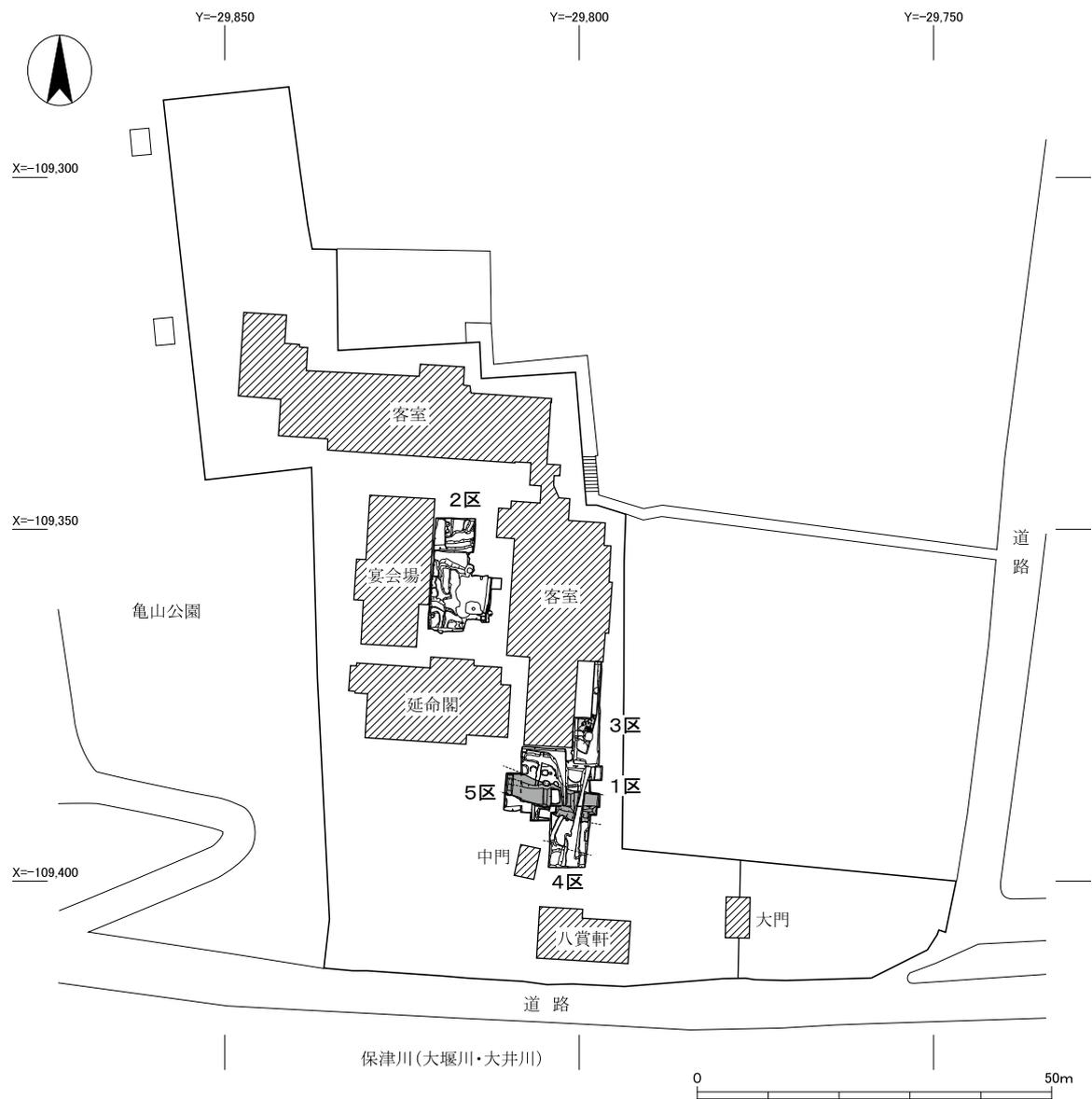


図10 調査区位置図（1：1,000）

2区は104㎡、3区は33.4㎡、4区は48.8㎡、5区は11.4㎡で、総計288.6㎡となった。

2区の調査については、旧中庭に敷設されていた土間タタキ直下の遺構残存状況を事前に確認するため、2013年6月11日に解体に立ち会った。建築設計及び解体作業との兼ね合いから、調査は1区を2012年12月10日から、2区を2013年6月21日から、3区を7月22日から、4・5区を8月5日から、順次調査区を設定して重機掘削を開始した。攪乱整理及び遺構検出を行った後、各面毎に京都府・市文化財保護課の視察を受け、その都度遺構掘り下げなどについての確認を行った。基本的には記録保存であったが、2区で検出した鎌倉時代後期の東西溝（溝6）については、建築工事の設計変更によって、保存されることになり、土嚢と砂を使用して保護を行い、埋め戻した。その他、3区集石7についても、土嚢を積んで遺構を保護した。1区は2013年1月24日、2区は8月8日、3～5区は8月20日に調査をすべて終了した。

また、2013年7月と12月に污水管探索や配管工事に伴って4箇所で行った。



図11 調査区詳細配置図 (1 : 300)

## 2. 位置と環境（表1）

調査地は、亀岡盆地より保津峡を流れてくる保津川の川幅が広がり、大堰川または大井川と呼ばれ、渡月橋以東で桂川となるまでの間の北岸に位置する<sup>1)</sup>。西には亀山があり、その山裾部分の中位・下位段丘上に立地する。標高は40.00m付近である。調査地東側から渡月橋へ至る道路周辺の土地は、現況でも標高値が35.00m付近と非常に低くなっている。この川沿いの道路から40～50m北へ行くと、38.00mと標高が急に高くなる段差があり、これは旧地形の段丘崖が残存しているところである。低い部分は大堰川の谷底・氾濫平野がその段差まであった名残で、この氾濫原はここから東北東に向かって、有栖川中流域をも含めた広い範囲に及んでいた。渡月橋より南側の地域についても、所々に自然堤防が形成されていたが、大半は氾濫平野及び緩扇状地であった。これまでの調査で、渡月橋周辺から東の範囲で旧河道が多数確認されており、大堰川・桂川左・右両岸は古来より氾濫地帯であったことが知られている。天龍寺伽藍やそれに関連する塔頭などが建ち並ぶ調査地の北から北東地域は、段丘上で高燥な土地である。このような条件の良い土地こそが、寺院や別業、荘園が営まれた場所であった。

嵯峨・嵐山の大規模な開発は、秦氏による葛野大堰築造がその端緒である。大同二年（807）には大堰が修造されたという。また、天長元年（824）には、防葛野川使を設置し、承和三年（836）には道昌による堤の修築が行われている。堰を造ることによって、農業用水を確保することに成功したが、その目的以上にいかに大堰川の治水が重要課題であったということがわかる。その一方で、風光明媚な景勝地または閑静な別荘地としても早い時期から開かれた。その先駆けとなったのは、延暦十四年から二十三年（795～804）の間に、年に1～3回の割合（最初の頃の行幸は隔年）で大堰離宮に通った、桓武天皇の行幸であろう。この離宮の位置は、発掘調査成果から渡月橋北西付近に造営されていたと考えられている<sup>2)</sup>。平城・嵯峨天皇も1・2度であるが、行幸している。平安京の二条大路から広隆寺南門前に至る二条大路末道などの道路は、行幸に伴って西へと整えられていった。道路の延伸は、往来を促し、平安京から近くて静かな場所として注目を集める端緒を作ったとみられる。嵯峨天皇の嵯峨山荘（大覚寺北一帯）、源融の棲霞観（現在の清凉寺）、有智子内親王の嵯峨西荘（二尊院南東付近）などの離宮や別荘が多く営まれた。また、嵯峨天皇皇后の橋嘉智子の御願寺として檀林寺が承和三年（836）頃に造営され、承和九年（842）に大井寺には役人を配置して本格的に建立が進められた。平安時代前期の様相を知るものとして、「山城国葛野郡班田図」<sup>3)</sup>がある。天長五年（828）の内容を基礎としているといわれる絵図で、地域全体に条里制が施行されたことを示している。条里プランの6里分、計216坪について記載されている。野や山、川が全体の半分を占めていたが、家や田も拡がっており、約4割が開拓されていた<sup>4)</sup>。棲霞寺（棲霞観）や檀林寺も描かれ、条里制地割の基準になったとみられる路との位置関係が明らかである。この路は、現在の長辻通であるが、鎌倉時代には朱雀大路、室町時代には出釈迦大路と呼ばれ、嵯峨嵐山の条里制地割の中心軸であり、主要道路であった。平安時代中期になると、別業の多くが道場や寺院に代わっていった。棲霞観が棲霞寺となり清凉寺へ、嵯峨山荘が嵯峨離宮そして大覚寺へと

表1 嵯峨嵐山略年表

年号	西暦	主な出来事	文献
天平年間	729～749年	葛井寺(法輪寺)の建立。	『源平盛衰記』
延暦十三年	794年	平安京遷都。葛野・愛宕両郡の今年の田租を免除。	『類聚国史』
延暦十四～二十三年	795～804年	桓武天皇、大堰離宮に度々行幸。	『日本紀略』
大同二年	807年	葛野川の大堰を修造する。	『日本後紀』
弘仁五年	814年	嵯峨天皇、嵯峨山荘に行幸。	『日本後紀』
天長元年	824年	防葛野川使を置く。	『類聚国史』
天長六年	829年	道昌僧都、葛井寺を法輪寺と改名。	『源平盛衰記』
承和元年	834年	嵯峨上皇、嵯峨新院に遷る。	『続日本後紀』
承和年間	834～848年	嵯峨天皇皇后の橘嘉智子が嵯峨荘内に檀林寺を造立。	
承和三年	836年	道昌、大堰川を修築。	『大師弟子伝』
		造檀林寺使の設置。	『続日本後紀』
承和九年	842年	造大井寺使の設置。	『続日本後紀』
承和十四年	847年	仁明天皇が遊獵し、源常の山荘(現嵯峨野高校北付近)を観る。	『続日本後紀』
		有智子内親王が嵯峨西荘で薨去。	『続日本後紀』
貞観十二年	870年	葛野郡観空寺を定額寺とする。	『日本三代実録』
貞観十六年	874年	法輪寺が山腹を開き、堂宇を改修する。	『源平盛衰記』
貞観十八年	876年	淳和天皇皇后(太皇太后正子)の請で、嵯峨院を大覚寺とする。	『日本三代実録』
元慶四年	880年	清和上皇、水尾山寺から源融の山荘棲霞観に渡る。	『日本三代実録』
元慶六年	882年	葛野郡嵯峨野での放鷹・狩猟を禁じられる。	『日本三代実録』
寛平八年	896年	棲霞観に阿弥陀堂を建立し、棲霞寺と号す。	
延長六年	928年	檀林寺が焼亡し、金堂・講堂が焼失。	
寛和二年	986年	円融法皇、大井川で三船の遊びを催す。	『楽記』
永久元年	1113年	棲霞寺(元は棲霞観、後に清凉寺となる)で釈迦堂を供養。	『長秋記』
12世紀末		化野に火葬墓などが造られ、葬送の地となる。	
健保六年	1218年	嵯峨釈迦堂・阿弥陀堂などが焼亡。	『仁和寺日記』
貞応元年	1222年	清凉寺、再建供養。	『百鍊抄』
建長七年	1255年	亀山殿の完成。後嵯峨上皇の遷移。	『百鍊抄』
建武二年	1335年	夢窓疎石を臨川寺開山とする。	『臨川寺文書』
暦応二年	1339年	天龍寺創建。	
興国二年	1341年	光厳上皇、暦応寺を天龍寺と改名。	『天龍寺造営記録』
康永元年	1342年	足利直義、天龍寺船を元に派遣。	『天龍寺造営記録』
康永二年	1343年	天龍寺仏殿完成。光厳上皇が上梁銘を書く。	『夢窓国師語録』
康永三年	1344年	後醍醐天皇の霊廟完成。	『園太暦』
貞和元年	1345年	天龍寺を供養する。	
貞和二年	1346年	夢窓国師、天龍寺十境を選定。	
14世紀中葉		天龍寺門前町が発展。	
延文三年	1358年	天龍寺焼亡。	『園太暦』
康安元年	1361年	臨川寺焼亡。	『柳原家記録』
貞治六年	1367年	天龍寺焼亡。	『太平記』
永和四年	1378年	臨川寺焼亡。	『花營三代記』
康暦二年	1380年	天龍寺で火災。開山以来の公文を焼失。	『空花日工集』
明德三年	1392年	後亀山天皇遷京。大覚寺に入る。	『続神皇正統記』
文安四年	1447年	天龍寺焼亡。	『東寺執行日記』
長祿二年	1458年	清凉寺焼亡。	『師郷記』
応仁二年	1468年	東軍が仁和寺を焼き、天龍寺、臨川寺などが炎上。	『碧山目録』
永正二年	1505年	香西元長が嵯峨城(嵐山城)に退く。	『二水記』
文化十二年	1815年	天龍寺、火災で被災。	
元治元年	1864年	禁門の変、敗退した長州兵が天龍寺に逃げ込み、薩摩軍によって砲撃、全焼。	
明治九年	1876年	天龍寺は臨濟宗天龍寺派大本山となる。	
明治十年	1877年	上知令により、天龍寺は嵐山53町歩、亀山全山、嵯峨の平坦地約4km四方の境内を収公。	
昭和二年	1927年	「史跡・名勝嵐山」の名称で国指定される。	

変遷した。平安時代後期になると、末法思想の浸透と愛宕信仰が重なり、浄土宗系の寺院である化野念仏寺や清涼寺、二尊院などが隆盛を誇り、奥嵯峨が墓域として成立していく。建永二年（1207）に作成されたと伝わる「嵯峨舎那院御領絵図」<sup>5)</sup>は、保津川と小倉山、その東側の土地を描いたものであるが、ほとんど建物のない、田畑に囲まれた状態を示す。幽境の土地を表すためか、その当時存在していた寺院なども描かれていない。のどかな風景が広がっていたことがわかる。鎌倉時代中頃の建長七年（1255）、後嵯峨上皇が亀山殿を造営する。このころ大堰川に面した土地に、寝殿や棧敷殿などの饗宴施設が立ち並んでいたという<sup>6)</sup>。その後、子の亀山法皇の離宮となった。この亀山殿の造営は、条里制に基づく地割が残っていた地域に、新しい地割を導入したことにより、整然と区画された街区を拡大させることになった。

一方、渡月橋南側の状況は、天平年中（729～749）に葛井寺（現在の法輪寺）が建立された。承和年間（834～848）に道昌が、堰を修築する際に橋（現在の渡月橋より西へ約120mの場所）を架けており、開墾は北岸と同時期の平安時代前期とみられる。しかし、平安時代の土地利用についての実態は不明である。鎌倉時代からは田畑として開拓されていたことが明らかとなっている。

室町時代前期の禅宗寺院の建立期になると、後醍醐天皇の皇子世良親王の遺志によって、臨川寺が夢窓国師を開山として造られ、亀山殿は足利尊氏を開基として天龍寺となった。天龍寺は暦応二年（1339）創建の臨濟宗天龍寺派大本山である。康永二年（1343）に竣工し、開堂法会は貞和元年（1345）に行われた。これに先立つ康永元年（1342）には、造営資金を得る為、天龍寺船を元へ渡航させた。康永三年（1344）には、後醍醐天皇の霊廟が完成した。天龍寺創建後、夢窓国師によって詩を賦され、天龍寺十境<sup>7)</sup>が編まれた。この時以降、天龍寺界限は門前町として発展を遂げる。ところが、中世の天龍寺及び臨川寺は度々火災に見舞われる。さらに応仁・文明の乱で荒廃するが、天龍寺は天正十三年（1585）の豊臣秀吉の寄進により、度重なる被災から本格的に復興した。臨川寺も室町時代末期には堂舎が再建され復興する。天龍寺は文化十二年（1815）の火災と元治元年（1864）の禁門の変の火災でも大部分が焼失した。明治以降は廃仏毀釈と上知令による土地の減少が続く。その後、次第に復興事業が軌道に乗り始め、明治32年（1899）には法堂、大方丈、庫裡、大正13年（1924）には小方丈、昭和9年（1934）には多宝殿などが再建され、現在に至っている。上知された土地は払い下げられ、資産家の別荘や別宅が営まれ、遊興の客目当ての旅館や茶屋、土産物屋などが軒を連ねた<sup>8)</sup>。現在でもその景観は受け継がれている。

調査地の土地利用をみると、鎌倉時代後期には『山城国嵯峨亀山殿近辺屋敷地指図』<sup>9)</sup>によれば亀山殿の敷地であったことがわかる。天龍寺期は『山城国臨川寺領大井郷界畔絵図』<sup>10)</sup>・『応永鈞命絵図』<sup>11)</sup>によれば、多宝院と天龍寺十境に詠まれた龍門亭の境界付近の敷地に位置する。また『天龍寺境内絵図』<sup>12)</sup>や天龍寺塔頭である三秀院の寺伝から、江戸時代中期頃にこの地に移転したとされている。しかし、三秀院は禁門の変で被災し、明治9年に養清軒と合併して東へ移った。三秀院移転前の明治2年、西側には政府の土木御役所（筏改所）が設置され、史料によれば明治18年頃まで筏改所が存在していた。このころに、敷地は調査地の現況に近いL字形となっている。この後間もなく、旗亭「八賞軒」という旅館になっていたが<sup>14)</sup>、明治32年（1899）に川崎重工の創始者であった

川崎正蔵が別邸とするため、土地を購入し、延命閣という大堰川を望む棧敷を建設した。明治43年(1910)には、嵯峨遊園株式会社が後を引き継いで旅館とし、大堰川北岸の埋め立てによって敷地が南へ拡張したところに、「八賞軒」(前述の建物とは異なる建物)と呼ばれる茅葺屋根の庵風建物を建てた。その後は、次々と所有者が替わり、近年はホテルとして営業されていた。近代和風建築である延命閣及び八賞軒は現存している。このように、調査地は鎌倉時代後期から続く、景勝地という立地に則した開発の歴史を持っていることがわかる。

#### 註

- 1) 行政名は「桂川」であるが、嵯峨嵐山の歴史を述べるにあたり、「保津川」、「大堰川」、「大井川」の名称が一般的に使用され、認知されているため、「桂川」は渡月橋以東でのみ使用する。
- 2) 『京都嵯峨野の遺跡－広域立会調査による遺跡調査報告－』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1997年
- 3) 東京大学史料編纂所編『日本荘園絵図聚影 二 近畿一』財団法人東京大学出版会、1992年
- 4) 『京都の歴史1 平安の新京』学藝書林、1970年
- 5) 註2に同じ。
- 6) 川上 貢「亀山殿の考察」『日本中世住宅の研究〔新訂〕』中央公論美術出版、2002年
- 7) 天龍寺十境とは、普明閣、絶唱谿、霊庇廟、曹源池、拈華嶺、渡月橋、三級巖、万松洞、龍門亭、亀頂塔である。貞和二年(1346)に天龍寺周辺の美しい景観の中から選定された10箇所の名勝である。それぞれに七言絶句が賦されている。
- 8) 小林善仁「近代初頭における天龍寺境内地の景観とその変化」『佛教大学 歴史学部論集』第2号、2012年
- 9) 註2に同じ。
- 10) 註2に同じ。
- 11) 付録「応永鈞命絵図」『嵯峨誌 平成版』財団法人嵯峨教育振興会、1998年
- 12) 京都府立総合資料館『天龍寺文書』1368
- 13) 註7に同じ。
- 14) 小川 功「嵯峨・嵐山の観光先駆者」『跡見学園女子マネジメント学部紀要』第10号、2010年
- 15) 『嵯峨誌 平成版』財団法人嵯峨教育振興会、1998年

### 3. 周辺の調査（図12、表2）

平成元年から始まった広域立会調査での遺構確認は、その後の発掘・試掘調査の指針を示し、多くの調査成果に連なるものである。断片的ではあるが、嵯峨嵐山地域の古代から続く土地利用の一端が明らかになり、これをまとめた報告書は地下に埋もれた歴史を知る上で重要な文献となっている<sup>1)</sup>。史跡・名勝嵐山及び嵯峨遺跡などでは、この立会調査を含めると、60件を超える調査を行っており、各時代の様相が明らかになりつつある。以下に、その概要をまとめる。

**縄文時代から奈良時代** 29地点で縄文時代中期末から後期初頭の土器、39地点で縄文時代後期の土器や石錘、30地点で縄文土器が見つかっている。弥生時代中期の土器とみられる小片が、22地点から出土した。縄文時代から弥生時代の遺物が確認されていることから、周辺に集落などが営まれた可能性がある。古墳が東方の広沢池周辺に営まれているが、この周辺では、遺物・遺構ともに検出していない。奈良時代後半の土器や瓦は、29地点の鎌倉時代の溝からまとまって出土した。この溝の下層に北東から南西方向の溝があり、もとはこの溝の遺物であったとみられる。対岸には、奈良時代後期に造られた葛井寺（法輪寺）があったことから、関連施設の存在が指摘されている<sup>2)</sup>。

**平安時代** 平安時代前期の遺構は、現在の渡月橋北西部及びJR嵯峨野線と長辻通が交差した南西部に集中して見つかっている。遺構としては、30地点検出の庭園遺構がある。拳大の石を敷き詰めた洲浜や景石の抜取穴、池跡が検出された。池跡は東西約37m、南北約8m、最深部で約2.2mと規模の大きなものである。出土遺物には、二彩陶器壺・蓋、風字硯、緑釉陶器水注・鉄鉢・壺・盤、「旨」銘軒平瓦などがある。緑釉陶器鉄鉢などは仏具であり、寺院関係の施設に伴う庭園であったことを窺わせる。また、官窯で作られた銘入り瓦が出土したことから、国家が関わる建物の可能性もある。24地点のNo.7では東西方向の溝が確認され、29地点で検出した溝や30地点の池に続くこととみられることから、排水溝の可能性が考えられる。24地点の渡月橋北西詰では、平安時代前期の土器や瓦が出土しており、桓武天皇の大堰離宮推定地に比定されている。JR嵯峨野線周辺では、11地点No.61で平安時代前期の東西方向の溝、5地点No.29で平安時代前期の瓦が出土した。22地点では、平安時代前期の溝や土坑から「大井寺」銘軒平瓦などの瓦が多量に発見された。これらは、檀林寺跡推定地となっており、11地点検出の東西溝は、幅3.1m以上、深さ0.95mを測る溝で、檀林寺北限の可能性が指摘されている<sup>3)</sup>。「大井寺」銘軒平瓦は、65地点よりさらに東に位置する嵐山谷ヶ辻子町遺跡の東西方向の溝からも、多量の平安時代前期瓦とともに出土している<sup>4)</sup>。銘入り瓦は数点の出土であったが、それまで大井寺の存在は知られていたものの、跡地や規模が不明であっただけに、大井寺跡ではないかと考えられている。一方、「大井寺」銘軒平瓦は天龍寺境内（15地点のNo.14・17）からも数点出土しており、大井寺だけではなく嵯峨地域の寺院に広く供給されていたと考えられている<sup>5)</sup>。22地点出土の瓦は供給された側である檀林寺に使用されていた瓦と考えることができ、檀林寺跡が従来の推定より東側の長辻通沿いで、JR嵯峨野線南側から22地点を含む一帯にあったといえよう。22地点の溝は11地点の溝と比べると、規模が小さいため敷地内区画溝であったとみられる。また、11地点の溝の延長が、14地点No.19の平安時代後期の東西溝、14地点No.

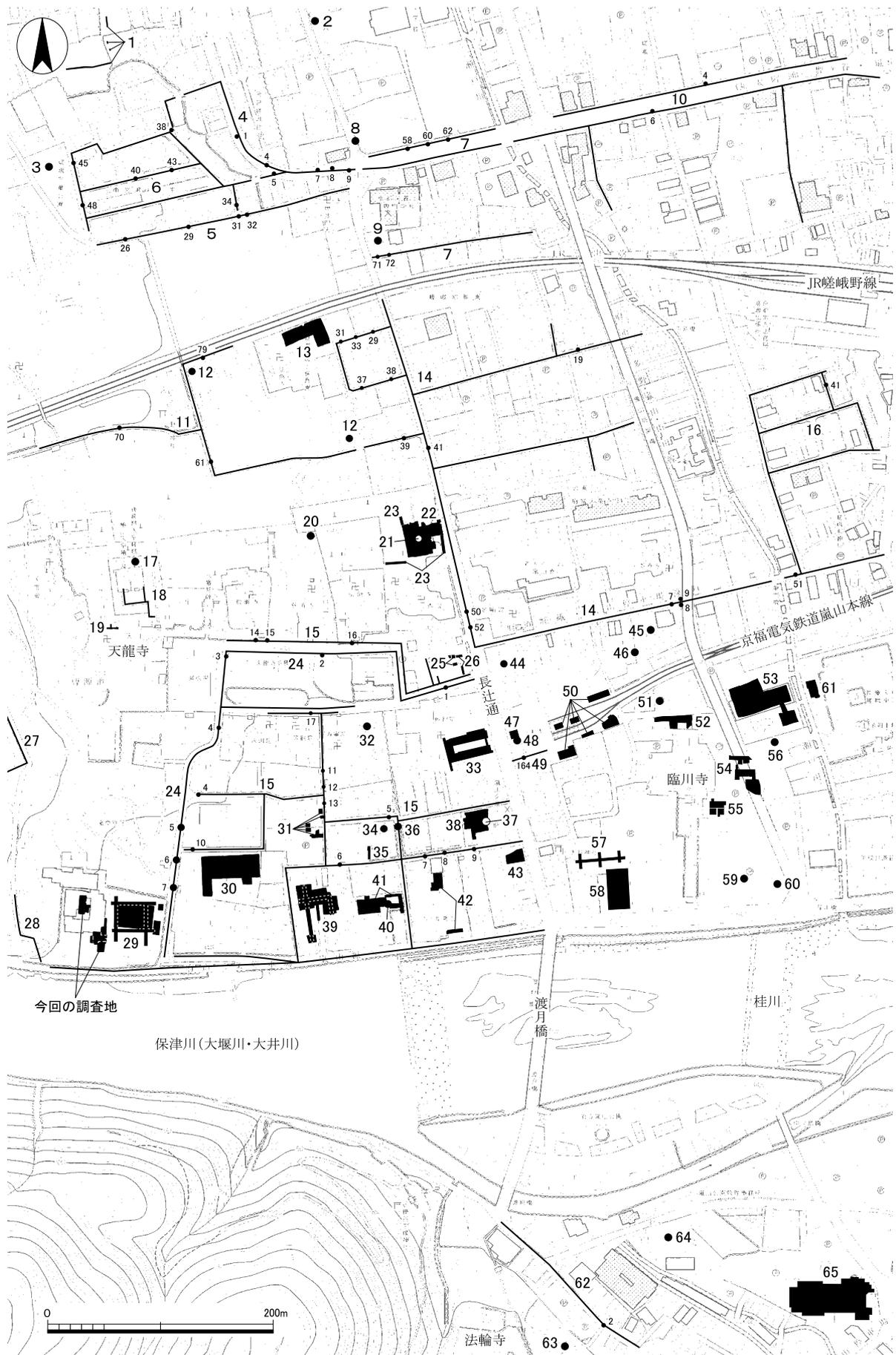


図12 周辺の調査位置図 (1 : 5,000)

表2 周辺の調査一覧表

地点	遺跡名	調査方法	調査機関	調査年度	主な遺構	主な遺物	備考	文献
1	嵯峨遺跡	試掘	市保護課	H23	1区：中世の礎石、池跡、江戸の耕土、2・3区：未検出、4区：GL-0.15~0.45mまで中世遺物包含層	1区：中世の土器・瓦	No.64 14世紀に池周辺での土地利用が始まる。池は湧水を利用した溜池か。	40
2	嵯峨遺跡	立会	市埋文	H20	GL-0.25m以下地山	—	U Z 262	32
3	嵯峨遺跡	立会	市埋文	H24	GL-0.4m以下地山	—	U Z 085	45
4	嵯峨遺跡	広域立会	市埋文	H 4	平安後期・鎌倉・室町前期の遺物包含層、No.1・4・5・7：室町前期以降の路面、No.8：時期不明の柱穴、No.9：時期不明の南北溝	—	野々宮北地区7-23	14
5	嵯峨遺跡	広域立会	市埋文	H 4	No.26：室町前期以前の東西溝、No.31・32：平安後期の土坑	No.29：平安後期の土器、平安前期の瓦	野々宮北地区7-26・27	14
6	嵯峨遺跡	広域立会	市埋文	H 5	No.34：室町前期の井戸、No.38：平安前期の遺物包含層、No.40：室町前期の南北溝、No.43：鎌倉以前の柱穴、No.45：鎌倉の土坑、No.48：室町前期の柱穴	No.45：鎌倉の土器	野々宮北地区7-28 鎌倉・室町の柱穴底には根石が残存。	14
7	嵯峨遺跡	広域立会	市埋文	H 3	No.58：平安の井戸、No.60：平安中～後期の南北溝、No.62：平安前期の遺物包含層、No.71・72：室町前期の南北溝	No.60：平安中～後期の土器、No.62：平安前期の土器、室町前・後期の土器	野々宮北地区7-30 No.71・72のどちらかの溝は9地点の落込みと繋がるか。No.58の井戸は方形横棧組で縦板が残る。	14
8	嵯峨遺跡	立会	市埋文	H20	BM+0.13mで中世～近世の落込み	中世～近世の瓦	U Z 318 幅2.2m以上、深さ0.73mで南北溝か。	34
9	嵯峨遺跡	立会	市埋文	H24	GL-0.27mで時期不明の土坑、その南で時期不明の柱穴・落込み、BM-0.03mで室町の落込み	室町の瓦、江戸の土器	U Z 010 室町の落込み底に埴敷きがある。	45
10	嵯峨遺跡	広域立会	市埋文	H 3	No.4：室町中期の井戸、No.6：江戸の溝	—	鹿王院地区7-31	14
11	史跡・名勝嵐山、檀林寺跡、嵯峨遺跡	広域立会	市埋文	H 7	No.61：平安前期の東西溝、No.70：平安後期の南北溝、No.79：鎌倉～室町の土坑	平安前期の土器・瓦、鎌倉～室町の土器・瓦	No.61の溝は空堀で葛野郡条里とあつていとみられ、檀林寺北限または西限の区画溝か。鎌倉～室町の遺構は西禅寺・浄金剛院・六僧坊関連か。	12
12	史跡・名勝嵐山、檀林寺跡、嵯峨遺跡	試掘	市保護課	H18	1区：焼土層・土坑、2区：現代盛土直下で地山	—	No.85	26
13	史跡・名勝嵐山、檀林寺跡、嵯峨遺跡	発掘	市埋文	S 52	江戸の土坑	平安・室町の瓦	平安の瓦は檀林寺、室町の瓦や埴は天龍寺関係とみられる。	36
14	史跡・名勝嵐山、檀林寺跡、嵯峨遺跡	広域立会	市埋文	H 3	No.7：平安前～中期の東西溝、No.8：室町中期の東西溝、No.9：室町前期の東西溝、No.19：平安後期の東西溝、No.29：室町中期の南北溝、No.31・37・50・52：江戸の南北溝、No.33・39：室町後期の南北溝、No.38：室町の南北溝、No.41：平安後期の東西溝	平安～桃山の土器	天龍寺地区7-36～38 No.29の溝はNo.38・39と繋がる。 No.7・19は平行するとみられる。 No.8の溝はNo.9より新しい。	14
15	史跡・特別名勝天龍寺庭園、史跡・名勝嵐山、嵯峨遺跡	広域立会	市埋文	H 3	No.4・5：室町の井戸、No.6：江戸の南北溝、No.7：室町前期の南北溝、No.8：鎌倉の井戸、No.9：室町の井戸、No.10：室町後期の石列、No.11：鎌倉の南北溝、No.13：室町後期の東西溝、No.14：平安の土坑、No.15・16：室町前期の南北石組溝、No.17：鎌倉の土坑	平安前期～江戸の土器・瓦	No.6～9付近では平安前期の遺物が集中して出土。「大井寺」銘の軒平瓦出土。焼け瓦は天龍寺の火災時のもの。	10
16	嵯峨遺跡	広域立会	市埋文	H 2・3	No.41：室町後期の柱穴、No.51：室町後期の南北溝	—	鹿王院地区8-71 No.41の柱穴は根石残存。	14
17	史跡・名勝嵐山、後嵯峨天皇陵	立会	宮内庁陵墓課	S 48	江戸の土坑	平安・室町・江戸の瓦、室町の土器	—	2
18	史跡・名勝嵐山、後嵯峨天皇陵・亀山天皇陵	発掘	宮内庁陵墓課	S 51	時期不明の石垣状遺構・集石	中世の土器・瓦	—	5

地点	遺跡名	調査方法	調査機関	調査年度	主な遺構	主な遺物	備考	文献
19	史跡・特別名勝天龍寺庭園、史跡・名勝嵐山、嵯峨遺跡	試掘	市保護課	H23	GL-0.1～0.2mで近世の遺構面、GL-0.4mで中世の遺構面、石積みをもつ基壇状遺構	江戸前期の土器、江戸後期の瓦	No.65 礎石は旧書院のもの。幕末の被災面および火災処理土坑を伴う。基壇状遺構は桃山時代以前か。	40
20	史跡・名勝嵐山、嵯峨遺跡	立会	市埋文	H21	GL-0.85～-1.13mに室町遺物包含層	室町の土器・瓦、江戸の土器・瓦	U Z 161	34
21	史跡・名勝嵐山、嵯峨遺跡	試掘	市保護課	H22	調査区西端丘陵部：GL-0.6mで室町後期の整地面、GL-0.9mで室町前期の整地面	—	No.14 発掘調査(22地点)へ移行。	40
22	史跡・名勝嵐山、嵯峨遺跡	発掘	市埋文	H23・24	平安の溝・土坑、鎌倉～室町の堀・柱穴・布掘基礎・堀・土坑など、桃山の井戸・堀、江戸の石列・池・土坑など	縄文土器、弥生中期土器、平安前の土器・瓦、鎌倉～室町の土器・瓦、桃山～江戸の土器など	檀林寺推定地に近く、「大井寺」銘瓦出土のため、檀林寺または大井寺関連の建物寺域か。室町の堀は15世紀に掘削と埋没を繰り返し、応仁の乱に関係するもの。絵図に描かれた区画溝は敷地境、描かれなかった溝は小区画、敷地内のものか。	39
23	史跡・名勝嵐山、嵯峨遺跡	立会	市埋文	H24	GL-0.2mで平安～中世の落込み、GL-0.6mで平安～中世の遺物包含層、GL-0.97mで中世の落込み、GL-0.15mで室町の落込み、GL-0.94mで平安の遺物包含層、-1m以下地山	平安の瓦、中世の土器・瓦	U Z 268	34
24	史跡・特別名勝天龍寺庭園、史跡・名勝嵐山、嵯峨遺跡	広域立会		H 3	No.1：室町の土坑、No.2：平安の土坑、No.3・4：室町後期の土坑、No.5：室町後期の石垣状石組、No.6：室町後期の東西溝、No.7：平安前期の東西溝	平安前期～江戸の土器・瓦	No.4の土坑出土の焼け瓦は火災に伴う。	10
25	史跡・特別名勝天龍寺庭園、嵯峨遺跡	試掘	市保護課	H10	勅使門正面：土壇、大方丈西方：焼土面	—	No.50 勅使門正面土壇は江戸後期に築造か。再度試掘調査(26地点)。	15
26	史跡・特別名勝天龍寺庭園、嵯峨遺跡	試掘	市埋文	H16	1区：土壇上面-0.6m以下は室町の盛土、地山面で室町の土坑、2区：土壇上面-1.2m以下室町の盛土、地山面で溝	平安・室町・江戸の土器・瓦	土壇は室町に築造。盛土に破片の大きい遺物や炭が含まれていたことから、寺側から土を提供されたか。2区検出の溝は土壇以前の旧区画の築地痕跡か。平安の瓦が多量に出土したのは檀林寺跡が近いためか。	25
27	史跡・名勝嵐山、後嵯峨天皇以下三方火葬塚	立会	宮内庁陵墓課	S 57	—	中世～近世の瓦	火葬地南東部は盛土(瓦片含む)によって構成。	7
28	史跡・名勝嵐山、嵯峨遺跡	立会	市埋文	H22	GL-0.3m以下岩盤	—	U Z 361	41
29	史跡・名勝嵐山、嵯峨遺跡	試掘	市埋文	H16	室町～江戸の柱穴・礎石・土坑など	平安の土器・瓦、室町の土器・瓦、江戸の土器・瓦	東区南端で大堰川旧北岸を検出。発掘調査に移行。	19
		発掘			平安の柱穴・溝・土坑、鎌倉の建物・溝・庭園遺構、室町の堀・溝・土坑など、江戸時代の建物・堀・井戸・石組土坑など	縄文中期末～後期初の土器、奈良後半～平安中期の土器・瓦、平安後期～室町の土器・瓦、江戸以降の土器・瓦・石製品		
30	史跡・名勝嵐山、嵯峨遺跡	発掘	市埋文	S 63・H 1	平安前期の庭園遺構、室町の溝	縄文土器、平安前期の土器・瓦、室町の土器	平安前期に山荘や別業が営まれていたことが判明。須恵器瓶子が多量に出土していることから、寺院に付属する施設か。	9
31	史跡・名勝嵐山、嵯峨遺跡	発掘	市埋文	H16	1・3・5区：室町の溝、2区：室町の土坑、4区：室町の柱穴・土坑	縄文土器、平安前期の土器、室町の土器・瓦	15世紀後半代の遺構が集中的に検出。防御的な施設。3時期重複しそれに平行する2条の溝は境界線の重複を思わせる。絵図に描かれた「神主家」の西限か。	22
32	史跡・名勝嵐山、嵯峨遺跡	立会	市埋文	H24	GL-0.2mまで現代盛土	—	U Z 117	45

地点	遺跡名	調査方法	調査機関	調査年度	主な遺構	主な遺物	備考	文献
33	史跡・名勝嵐山、嵯峨遺跡	発掘	市埋文	H24	室町後期の建物・柱穴・溝・土坑など、江戸の井戸・溝など、江戸末～近代の溝・路面・土坑	平安の土器・瓦、鎌倉～室町の土器・瓦、桃山～江戸の土器・瓦・石製品・金属製品	室町後期整地層に2時期あり、下層に正方位の天龍寺中心軸、上層にそれ以後のものが伴い、上層のものは葛野郡条里に沿う。いずれも応仁の乱後の復興か。	43
34	史跡・名勝嵐山、嵯峨遺跡	試掘	市保護課	H13	GL-1.88mまで現代盛土、以下地山	—	No.58	18
35	史跡・名勝嵐山、嵯峨遺跡	試掘	市保護課	H12	室町の柵列・土坑・焼土面	室町の土器・瓦	No.63 土師器皿の廃棄土坑。焼土面は応仁・文明の乱のものか。	16
36	史跡・名勝嵐山、嵯峨遺跡	発掘	市埋文	H14	1・3区：時期不明の柱穴、2区：中世の暗渠溝、4区：遺構未検出	室町の土器・瓦・石製品、近世初頭の瓦	暗渠は近世初頭の廃絶。旧路面または区画溝。	17
37	史跡・名勝嵐山、嵯峨遺跡	試掘	市保護課	H3	GL-0.7mでL字に曲がる溝を検出	—	No.9	13
38	史跡・名勝嵐山、嵯峨遺跡	発掘	市埋文	H4	鎌倉の濠、室町の濠・地業など、江戸の溝など	平安の土器・石帯、鎌倉の土器、室町の土器・瓦・石製品・金属製品、江戸の土器など	生活雑器が多く、絵図の書き込みから在家の門前町の萌芽的形態か。	11
39	史跡・名勝嵐山、嵯峨遺跡	試掘	市埋文	H16	縄文・平安～鎌倉・室町の遺物包含層	縄文土器、平安前期の土器・瓦、平安～鎌倉の土器、室町の土器・瓦、江戸時代後期以降の土器・瓦・銭貨など	亀山殿および天龍寺期の遺構を検出。調査地中程の段差は大堰川旧河岸段丘か。発掘調査に移行。	21
		発掘	1区：江戸末～近代の礎石列・溝・竈など、2区：鎌倉後期の掘り込み地業・土坑など、室町前期の土壇・柱穴・整地層・溝など、室町後期の柱穴・溝・土坑、江戸の礎石		縄文後期の土器・石製品、平安の土器、鎌倉～室町の土器・瓦・土製品・銭貨など、江戸の土器・瓦・金属製品など	鎌倉後期の掘り込み地業は亀山殿の棧敷殿に関係する。室町前期の溝など一連の遺構は霊応廟関連の遺構。1区の遺構は三軒家または三軒茶屋か。		
40	史跡・名勝嵐山、嵯峨遺跡	試掘	市保護課	H19	敷地東辺付近はGL-0.6mで中世面、北辺東半は大部分が攪乱	—	No.80 試掘・発掘調査(41地点)に移行。	29
41	史跡・名勝嵐山、嵯峨遺跡	試掘	市埋文	H17	鎌倉の柱列、室町の溝、江戸の石列など	室町の土器・瓦、江戸の土器	発掘調査に移行。検出した遺構は発掘調査時に再度検出。	28
		発掘	H18	鎌倉の柱列、室町の堀・整地層・土坑、江戸以降の柱列・石列・溝・石室・土坑など	平安の土器、鎌倉の土器、室町の土器・瓦・金属製品、江戸前期の土器など	鎌倉時代の柱列は亀山殿のものか。室町の堀は応仁・文明の乱の際に焼けた建物の瓦で埋められた、天龍寺東限の区画か。江戸以降は宅地。		
42	史跡・名勝嵐山、嵯峨遺跡	試掘	市埋文	H18	1区：室町後期の溝状集石遺構・柱穴・土坑、2区：室町の柱列・土坑	平安～江戸の土器・瓦など	推定…鎌倉：芹川殿跡、室町：天龍寺領または在家。出土瓦の量から板葺き屋根を想定。溝状集石遺構は塀などの地業か。旧渡月橋東側の川への突出部分は2区整地層と関連か。	31
43	史跡・名勝嵐山、嵯峨遺跡	発掘	関西文化財調査会	H2	室町後期：石垣・石組遺構	室町の土器・瓦	天龍寺南限を区画していた石垣か。	未報告
44	臨川寺境内、嵯峨遺跡	立会	市埋文	H20	BM-0.05m以下地山	—	U Z 427	34
45	臨川寺境内、嵯峨遺跡	立会	市埋文	H18	GL-0.5mで江戸末の土坑・江戸後期の落込み、GL-0.85m以下地山、GL-0.4mで江戸以降の東西溝、室町中～後期の落込み、GL-0.8m以下地山	室町中～後期の土器、江戸後期の土器・瓦、江戸末の土器	U Z 096	27
46	臨川寺境内、嵯峨遺跡	立会	市埋文	H24	GL-0.4mで時期不明の遺物包含層	時期不明の土器・瓦	U Z 135	45
47	史跡・名勝嵐山、臨川寺境内、嵯峨遺跡	発掘	市埋文	H24	鎌倉後期の溝、室町の溝	平安の土器・瓦、室町の土器・瓦、江戸の土器・瓦・鉄製品	鎌倉の朱雀大路および室町の出釈迦大路の東側溝。現天龍寺東限が踏襲されているならば約30mで幅10丈。	42
48	史跡・名勝嵐山、臨川寺境内、嵯峨遺跡	試掘	市保護課	H15	GL-0.25mで西下りの溝状遺構	—	No.10 溝状遺構は中世の濠か。	20

地点	遺跡名	調査方法	調査機関	調査年度	主な遺構	主な遺物	備考	文献
49	史跡・名勝嵐山、臨川寺境内、嵯峨遺跡	広域立会	市埋文	H2	No.164：室町中期の南北溝	平安の瓦、室町の土器	天龍寺地区13-10	14
50	史跡・名勝嵐山、臨川寺境内、嵯峨遺跡	確認	市埋文	H23・24	1区：幕末以降の土坑、2区：中世の土坑、3～6区：近世以前の遺構未検出	平安前期の土器、室町の土器・瓦	推定…臨川寺。2区検出の土坑は臨川寺伽藍北限推定ライン上にあり。北西隅に該当か。	38
51	史跡・名勝嵐山、臨川寺境内、嵯峨遺跡	立会	市埋文	H22	GL-0.25mで平安の遺物包含層、GL-0.74m以下地山	平安の土器	UZ152	37
52	史跡・名勝嵐山、臨川寺境内、嵯峨遺跡	発掘	京都市	S51	室町の焼失建物跡・雨落溝	室町の土器・瓦・石製品	臨川寺三会院の建物跡。創建後まもなく焼失し再建されなかった。遺物の出土地点から置かれていた場所がわかる。	4
53	史跡・名勝嵐山、臨川寺境内、嵯峨遺跡	発掘	市埋文	S51・52	平安～鎌倉の溝、室町の土坑・溝など、安土桃山～江戸の土坑・溝・墓、江戸後期以降の墓・溝	平安～江戸の土器・瓦など	臨川寺創建とみられる瓦や埴が多量に出土。永和年間焼失の建物痕跡か。室町の溝状遺構は臨川寺の何らかの区画溝。桃山以降は墓域か。	6
54	史跡・名勝嵐山、臨川寺境内、嵯峨遺跡	発掘	京都市	S44	室町～江戸の庭園跡	鎌倉～江戸の土器・瓦	臨川寺三会院の庭園、池跡、護岸の石組・庭石の一部を検出。	1
55	史跡・名勝嵐山、臨川寺境内、嵯峨遺跡	発掘	京都市	S49	室町の柱穴・溝	室町の瓦	瓦の堆積状況から南側に建物跡を想定。	3
56	史跡・名勝嵐山、臨川寺境内、嵯峨遺跡	試掘	市埋文	S61	GL-1.05mで室町後期の遺物包含層	室町後期の土器	—	8
57	史跡・名勝嵐山、臨川寺境内、嵯峨遺跡	確認	市埋文	H21	平安前期の遺物包含層、室町の整地層、時期不明の礎石・土坑	平安前期の土器・土製品、室町の土器・瓦、江戸の土器・瓦	—	未報告
58	史跡・名勝嵐山、臨川寺境内、嵯峨遺跡	発掘	京都市	S50	平安後期の柱穴、室町の石組溝(暗渠)	平安後期の土器、室町の瓦	石組溝は屈曲していたり、渡り石のような石の置き方をしている部分があることから、臨川寺創建時の庭園跡の可能性あり。	4
59	史跡・名勝嵐山、臨川寺境内、嵯峨遺跡	試掘	市保護課	H23	GL-0.35mで基盤層、上面で中世～近世の柱穴	—	No.19	44
60	史跡・名勝嵐山、臨川寺境内、嵯峨遺跡	試掘	市保護課	H4	GL-0.4mで室町の遺物包含層、GL-0.7mで柱穴群を検出	室町の瓦	No.39	13
61	長慶天皇陵	立会	宮内庁陵墓課	H20	GL-0.2mで時期不明の流路跡	古墳の須恵器、鎌倉～室町の瓦、中世の土器	—	35
62	史跡・名勝嵐山	広域立会	市埋文	H5	No.2：時期不明の土坑	—	嵐山北地区13-12	14
63	史跡・名勝嵐山	試掘	市保護課	H16	中世～近世の造成痕跡、中世以後の東西溝状遺構	中世～近世の土器	No.96 造成痕跡は平坦地を造るためのもの。溝状遺構は宅地区画か。	23
64	史跡・名勝嵐山	試掘	市保護課	H16	—	—	No.98	23
65	史跡・名勝嵐山	試掘	市埋文	H19	室町前半～近代の溝・土坑・流路など	鎌倉～室町の土器	中世に入って本格的な耕地開発が行われた。発掘調査に移行。	33
		発掘		H21	鎌倉～室町の田・畦畔・溝・土坑、室町末の川・土坑、江戸の土坑	平安の土器、鎌倉～室町の土器・瓦、江戸前期・後期の土器・銭貨など	氾濫原を鎌倉時代に耕作地として開発。一部棚田状にし室町時代まで営む。室町末期に大規模な洪水で大被害。土地の安定した江戸前期から再度耕作地へ。	30

※ 地点17・18・61は嵯峨遺跡の範囲でもあるが一覧表には記入していない。

※ 調査機関の「市埋文」は財団法人京都市埋蔵文化財研究所、「市保護課」は京都市文化財保護課を指す。

7の平安時代前期から中期の東西溝と平行しているとされ、いずれも葛野郡条里の方位と同じであり、その間の距離から120m四方の地割が行われたと推定されている<sup>6)</sup>。その他、臨川寺境内の57地点でも平安時代前期の遺物包含層を検出しており、別業などが造られていた可能性がある。

平安時代中期・後期になると、遺物包含層を含めてこの地域一帯に遺構が確認されている。4地点では平安時代後期の遺物包含層、5地点No.31・32では平安時代後期の土坑、7地点No.60では平安時代中期から後期の南北溝、11地点No.70では平安時代後期の南北溝、14地点No.41では平安時代後期の東西溝、22地点では平安時代中期の溝・土坑、29地点では平安時代後期以前の溝、58地点では平安時代後期の柱穴などがある。このように、立会調査による確認が中心のため、建物や宅地規模など不明な点が多い。大堰川右岸の62地点では、平安時代中期の遺物が出土しているが、二次堆積土中で摩耗が著しい。上流の渡月橋付近にこの時期の遺構の存在が窺われる。

**鎌倉時代** 鎌倉時代の遺構や遺物は、JR嵯峨野線周辺の嵯峨地域全体で検出されている。鎌倉時代前期の遺構として、亀山殿造営時に埋め立てられた南北溝がある(29地点)。幅2.5～3m、深さ1.5～1.7mを測り、防御用の堀の可能性はある。次の亀山殿が築かれた鎌倉時代後期になると、建物や池跡、整地層(29地点)、掘り込み地業や溝、土坑(39地点)、南北方向の溝(47地点)が確認されている。29地点の池跡には汀に景石が据えられ、その北側には小礫を使った整地が行われた。池の北西には2間×2間の建物跡が検出されており、池を臨む位置に四阿風建物が建てられた亀山殿の南庭であったと推定されている<sup>7)</sup>。39地点の掘り込み地業は、旧地形の段差上面で検出された大規模な基礎工事痕跡である。大堰川に面した位置に、寝殿と同形式の棧敷殿を建てたという記述<sup>8)</sup>があり、その記述に書かれた位置と時期が検出した遺構に相当すると考えられている。天龍寺東築地塀関連の遺構として、25地点の土壇下層で確認された旧区画の築地痕とみられる東西方向の溝2条が検出されている。また、47地点で検出した南北溝は、長辻通を挟んだ現在の天龍寺東築地塀が旧位置を留めていると仮定して測ると約30mとなり、路の規模が10丈と想定できる。長辻通は平安京内と同じ大路規模で道路を造っていた可能性がある。38地点では東西方向の濠を検出した。断面逆台形の濠で、方位は北で西へ11～12°である。生活雑器が多く、柱穴(室町時代のものも含む)が多く検出されていることから、民家が立ち並んでおり、門前町の萌芽的状况を表していると考えられている<sup>10)</sup>。39地点の地業単位や溝などの方向は、北で西へ6～10°で振れている。鎌倉時代後期の溝や濠などの方向は、北で西へ7°前後に傾いていることから、この時期の建物や溝は亀山殿を基準として造られていたと考えられる。しかし、主要幹線道路であった朱雀大路(現在の長辻通に相当)に面した敷地では、依然として葛野郡条里の古い方位がそのまま踏襲されていた。

対岸の62地点では、鎌倉時代の土坑、溝、畦畔、田が検出されており、室町時代にかけて耕作地であったことが判明した。

**室町時代** 天龍寺創建と臨川寺創建、及びその周辺に造られた塔頭や門前町の発展する時期に相当する。22地点では、室町時代後期の南北方向の堀や東西方向の堀、L字に曲がる堀などが平行または直交していた。南北方向の堀は長辻通に平行で、東西堀は直交している。宅地または子院などの敷地内区画とみられ、土坑や塀跡、根石を敷く柱穴などが検出された。29地点では、北東から南

西方向の溝を検出し、防御用の堀とされている。ここでは、高さ1.5mの大堰川旧北岸の段差が確認された。その他、江戸時代まで踏襲された堀跡がある。31地点では、室町時代後期の南北方向の石組溝や東西方向の濠など大規模な区画や造り変えが行われた溝（3時期分）があり、焼土及び焼瓦が出土している。2条の平行した濠やその他の濠の位置から、「神主家」の西限だったのではないかと推定されている<sup>11)</sup>。33地点では、室町時代後期の建物跡、石列、溝、整地層などが検出された。正方位の方位をもつものが多い。35地点では、室町時代の南北方向の柵列や焼土面が見つまっている。38地点では、濠跡や地業跡が検出された。地業は、仏堂などの基壇を想定させるような頑丈な造りである。39地点では、室町時代前期のものとして、土壇及び整地層とその東側に溝と平行した柵が検出された。柵の一番北側の柱穴は直径約2.4m、短径約1.8m、深さ約1.2mを測る。太い柱が建てられていたこと、また西側の土壇が神社の殿社の基壇に相当すると考えられたことから、鳥居の跡と推定されている<sup>12)</sup>。これらの遺構は、『山城国臨川寺領大井郷界畔絵図』<sup>13)</sup>から天龍寺の霊庇廟跡と考えられている。41地点では、天龍寺東限の溝とみられる焼瓦で埋められた南北方向の石組溝がある。42地点では、東西方向の溝状集石遺構があり、堀などの基礎と考えられている。43地点では東西方向の石垣を検出し、2時期あることが確認されている。また、石垣の北側に石組遺構と集石遺構が並べて造られており、石垣と時期を同じくする礎石や景石の根固石とみられている。この石垣については、天龍寺塔頭の南限であった可能性が指摘されている。以上は、天龍寺関係の遺構である。天龍寺は創建後、応仁・文明の乱のときも含めて度々火災にあっており、火災処理の痕跡はその事実を示し、またその後復興が進んでいたことを示す資料である。また、乱に備えて造られたことから、濠や石組の溝は規模が大きい。その他に、4地点No.1・4・5・7では室町時代前期以降の路面、7地点No.71・72では平行する2本の南北溝（出釈迦大路の東西両側溝とみられる）、10地点No.4では室町時代中期の井戸、15地点No.4・5では室町時代の井戸、同No.7では室町時代前期の南北溝などが検出された。天龍寺期には、ほぼ正方位の遺構が多数造られている。

臨川寺境内の50地点では、臨川寺伽藍の北限推定ライン上に乗る土坑状の遺構を検出し、北西隅部ではないかと推定されている。52地点では、三會院の建物跡（3間×5間の南北棟）が検出された。焼失以前の位置とみられる建物の隅で、各器種の土器がまとまって出土しており、創建後まもなく焼失し、焼け落ちたままの状態で見捨てられていたとみられる。大理石製袈裟留具の破片や硯、天目茶椀、青磁椀などの寺院関連の遺物が大量に出土した。53地点では何らかの区画溝、54地点では三會院の庭園跡が検出された。この庭園は夢想国師作といわれ、『都名所図絵』<sup>14)</sup>にも描かれたものである。護岸の石組や景石、汀の跡などが検出された。また、58地点では屈曲した石組溝に渡り石のような石の置き方をした部分があったりするなど、庭園の構成物とみられる遺構が検出されている。

対岸62地点では、鎌倉時代から営まれた耕作地の痕跡を確認した。これらは室町時代末に北西から南東方向の流路跡によって壊されており、洪水にみまわれたことが判明した。

**安土桃山時代以降** 10地点No.6では、江戸時代以降の南北方向の溝、15地点No.6や14地点No.50

などで江戸時代の南北溝、17地点で土坑、19地点では幕末の被災面及び火災処理土坑、22地点では安土桃山時代の東西堀や井戸、江戸時代前期の池跡や集石、土坑などが検出された。29地点では、江戸時代前期や後期の建物跡などがある。江戸時代前期の建物は、柱位置の掘り込み地業が版築をして造られていたことから、土蔵や土壁作りの長屋、楼閣などの基礎と考えられている<sup>15)</sup>。後期の建物は礎石立ちで、禁門の変の焼土の広がり<sup>16)</sup>が部分的に残っていたことから、三秀院の建物跡とみられる。33地点では、江戸時代の井戸や溝、江戸時代末から近代の溝や路面、土坑を検出した。41地点では、江戸時代以降の柱列や石列、溝、石室などがあり、宅地化した様子が窺える。39地点では溝や石列、竈などが検出され、三軒家という茶屋跡であったとされている。ここでも、禁門の変で類焼したとみられる焼土層が確認された。

臨川寺境内では、江戸時代末の土坑などが44地点などで検出された。53地点は安土桃山時代以降、墓域となる。一方、対岸の62地点では、室町時代末期に洪水被害にあい、土地が安定したことにより、江戸時代前期から再度耕作地となる。

その他、28地点では亀山が岩石を基盤としており、今回調査を行った2区の地山相当層に含まれていた角礫が亀山由来であることがわかる。

このように、桂川北岸は縄文時代から断続的に生活痕跡が残され、平安時代前期以降になると部分開発から、計画に基づいた大規模開発へと移行し、天龍寺期になってさらに進む。門前町はこれらの造営に伴って、繁栄していく。桂川南岸は、このような北を支える経済基盤的存在として発展・発達していったとみられる。

前述のように、遺構の方位については、時代ごとに異なっており、まとめることができる。古くは条里制に基づく北で西へ16°振れるもの、鎌倉時代造営の亀山殿に則った北で西へ7°前後振れるもの、室町時代の天龍寺造立に関わるほぼ正方位のもの、江戸時代に入ってから北で東に5～8°振れるものの4段階に分類できる。しかし、葛野郡条里の施工基準であった長辻通は、その後も嵯峨嵐山地域の中心となる道路であったことから、通に面した地割にその影響を与え続けることになったとみられる。

#### 註

- 1) 『京都嵯峨野の遺跡－広域立会調査による遺跡調査報告－』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1997年
- 2) 『史跡・名勝 嵐山』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004－7 財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2004年
- 3) 『平成7年度 財団法人京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1997年
- 4) 註1に同じ。
- 5) 網 伸也「造瓦体制の変革期としての仁明朝」『仁明朝史の研究－承和転換期とその周辺－』財団法人古代学協会、2011年
- 6) 註1に同じ。
- 7) 註2に同じ。

- 8) 川上 貢「附 亀山殿の棧敷殿について」『日本中世住宅の研究〔新訂〕』中央公論美術出版、2002年
- 9) 『史跡・名勝 嵐山』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004 - 11 財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2005年
- 10) 『平成4年度 財団法人京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1995年
- 11) 『京都市内遺跡発掘調査概報 平成16年度』京都市文化市民局、2005年
- 12) 註9に同じ。
- 13) 註6に同じ。
- 14) 『新修京都叢書』第6巻 臨川書店、1976年
- 15) 註2に同じ。
- 16) 註9に同じ。

文献(表2 周辺の調査一覧表)

- 1 牛川善幸「臨川寺庭園の調査」『奈良国立文化財研究所年報1970』 1970年
- 2 倉内鳳州ほか「後嵯峨天皇陵貯水槽拡張工事箇所の調査」『書陵部紀要』第26号、1975年
- 3 江谷 寛『臨川寺庭園遺跡発掘調査概要』 1975年
- 4 江谷 寛「臨川寺旧境内」『佛教芸術』115号、1977年
- 5 笠野 毅「後嵯峨天皇陵・亀山天皇陵排水管設置箇所の事前調査」『書陵部紀要』第28号、1977年
- 6 『臨川寺旧境内発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告Ⅳ、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1978年
- 7 小畑 実ほか「後嵯峨天皇以下三方火葬塚外構柵改修工事箇所の調査」『書陵部紀要』第35号、1984年
- 8 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局、1987年
- 9 『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1993年
- 10 『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1995年
- 11 『平成4年度 財団法人京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1995年
- 12 『平成7年度 財団法人京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1997年
- 13 『京都市内遺跡試掘調査概報 平成4年度』京都市文化観光局、1997年
- 14 『京都嵯峨野の遺跡 - 広域立会調査による遺跡調査報告 -』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1997年
- 15 『京都市内遺跡試掘調査報告 平成10年度』京都市文化市民局、1999年
- 16 『京都市内遺跡試掘調査概報 平成12年度』京都市文化市民局、2001年
- 17 『史跡・名勝 嵐山』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002 - 10 財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2002年
- 18 『京都市内遺跡試掘調査概報 平成13年度』京都市文化市民局、2002年
- 19 『史跡・名勝 嵐山』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004 - 7 財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2004年
- 20 『京都市内遺跡試掘調査概報 平成15年度』京都市文化市民局、2004年
- 21 『史跡・名勝 嵐山』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004 - 11 財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2005年

- 22 『京都市内遺跡発掘調査概報 平成16年度』京都市文化市民局、2005年
- 23 『京都市内遺跡試掘調査概報 平成16年度』京都市文化市民局、2005年
- 24 『史跡・名勝 嵐山』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-9 財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2006年
- 25 『平成16年度 財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2006年
- 26 『京都市内遺跡試掘調査報告 平成18年度』京都市文化市民局、2007年
- 27 『京都市内遺跡立会調査報告 平成18年度』京都市文化市民局、2007年
- 28 『平成17年度 財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2008年
- 29 『京都市内遺跡試掘調査報告 平成19年度』京都市文化市民局、2008年
- 30 『史跡・名勝 嵐山』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-14、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2009年
- 31 『平成18年度 財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2009年
- 32 『京都市内遺跡立会調査報告 平成20年度』京都市文化市民局、2009年
- 33 『平成19年度 財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2010年
- 34 『京都市内遺跡立会調査報告 平成21年度』京都市文化市民局、2010年
- 35 有馬 伸「長慶天皇 嵯峨東陵嵯峨部事務所改築工事に伴う立会調査」『書陵部紀要』第61号、2010年
- 36 『昭和52年度 京都市埋蔵文化財調査概報』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2011年
- 37 『京都市内遺跡立会調査報告 平成22年度』京都市文化市民局、2011年
- 38 『史跡・名勝 嵐山』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2012-1、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2012年
- 39 『史跡・名勝 嵐山』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2012-3、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2012年
- 40 『京都市内遺跡試掘調査報告 平成23年度』京都市文化市民局、2012年
- 41 『京都市内遺跡立会調査報告 平成23年度』京都市文化市民局、2012年
- 42 『史跡・名勝 嵐山』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2012-16、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2013年
- 43 『史跡・名勝 嵐山』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2012-22、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2013年
- 44 『京都市内遺跡試掘調査報告 平成24年度』京都市文化市民局、2013年
- 45 『京都市内遺跡立会調査報告 平成24年度』京都市文化市民局、2013年

## 4. 遺 構

### (1) 遺構の概要 (表3)

1区で検出した遺構の時期は、室町時代と江戸時代である。室町時代のものは東西方向の溝38や土坑29・30、江戸時代中期頃のもの南北方向の溝32、江戸時代後期以降のものは土坑21・25、整地1、東西方向の溝状遺構27、石敷面22がある。

2区では、鎌倉時代後期に造られた東西方向の溝6及び整地3下層、この溝の上面を覆っていた整地3上層、室町時代の整地層である整地4、江戸時代前期の土坑5、江戸時代後期の土坑1、溝2を検出した。

1区北隣接地である3区では、室町時代の整地8・9、土坑6、整地8上面に造られた集石7、室町時代後期の土坑4、江戸時代末から明治時代初頭の整地1を検出した。整地1は、途中攪乱があるため続かないが、南の1区北半へと広がっていた。

1区南隣接地の4区では、1区検出の室町時代の溝38南肩部、江戸時代中期頃の集石2を検出した。

1区西側の5区では、室町時代の溝38の続きを検出し、さらに西へ延びていることを確認した。その他に、4区南端で明治時代に埋め立てられた大堰川旧北岸を確認し、この北岸と1・4・5区で検出した溝38が並行して造られていたことがわかった。

いずれの調査区においても、配管やコンクリート造建物の掘形、調査区の上面を覆っていた鉄筋入りコンクリートタタキなどの影響により、深いところで地表下0.8mまで攪乱されていたため、遺構の残存率は低い。また、2区東半にはコンクリート製池跡がほぼ完形で埋められていた(図8)。中世遺構面より深く本体及び基礎が入っていたことから、これを撤去しての調査は断念した。2区東の一部を、東西約1.3m、南北約1.5mで掘り上げ、地表下約0.1mに客室棟の付帯コンクリートが

表3 遺構概要表

遺構面	時 代	遺 構	備 考
第3面	鎌倉時代後期	2区：溝6、整地3下層	整地3上層が溝6・整地3下層を覆う。
第2面	鎌倉時代末 ～室町時代	1区：土坑29・30 1・4・5区：溝38 2区：整地3上層・整地4 3区：整地8・9、土坑6、集石7	1区土坑30は土坑29下層。 3区土坑6・集石7は整地8上面で検出。
	室町時代後期	3区：土坑4	
	江戸時代前期	2区：土坑5	
第1面	江戸時代中期頃	1区：溝32 4区：集石2	
	江戸時代後期以降	1区：土坑21・25、溝状遺構27、石敷面22 1・3区：整地1 2区：土坑1、溝2 4区：大堰川旧北岸	4区大堰川旧北岸は明治時代に埋め立てられたが、この旧地形は中世まで遡るとみられる。

入っていることを確認した。2区南の築山直下についてもコンクリート基礎や配管があり、遺構が残っていないことがわかったので、調査を行っていない。

調査区が離れているため、各調査区の同時期面の標高値をまとめる。江戸時代末から明治時代初頭の整地層（整地1）上面標高値及びそれに準じる面の標高値は、1～5区で39.50mとほぼ高さがそろっていた。また、3区中世遺構検出標高値は39.20mであり、2区同値の39.50mよりも0.3m低い位置にあった。5区溝38南肩口地山相当層の標高値は39.30mであることから、少々の削平は考えられるものの、2区と3区の距離を考慮すると、自然勾配によるものと推測できる。なお、1区溝38北肩口地山相当層の標高値は39.40m、4区溝38の同値は39.20mであった。このように、標高値は時期別にみると矛盾がないことがわかる。

今回は亀山の山裾に近い部分を調査したことから、地山相当層の堆積状態についても詳細な観察を行った。2区北壁（図24）では、中央付近から東・西にそれぞれ落ち込む堆積を確認した。南北方向の断面観察ができなかったが、鎌倉時代末から室町時代の整地層が北から南へ下がる段差を埋めていることから、地山相当層も傾斜を持っていたものとみられる。尾根状の微高地周辺に、崩れた山土が徐々に堆積していったとみられ、いずれの層にも亀山の岩盤に由来する角礫（径1～15cm）が多く含まれていた。中には長さ60cmの礫も含まれていた。それらの堆積土の色調は、黄褐色系を呈していた。また、山裾から少し離れた4区の地山相当層は、大堰川側に堤防状の層（図16の19層）とその北側に同じような堤防状の層（同17層）があり、その間の小さな窪地が自然堆積土（同13～16層）で埋まっていた。19層を除く地山相当層は、径1～10cmの礫を包含するが、2区検出の礫よりも明らかに小さく、同15層のように、礫を含まない微砂層があり、河川堆積由来とみられる層である。これらのことから、山に近い部分では、山からの崩落土によって地山が形成され、川に近い部分の特に上面については、川からの土砂によって地山が形成されたと考えられる。

以下では、1・3～5区の第1面・第2面、2区の第1面・第2面・第3面で検出した主な遺構について報告する。なお、1・3～5区は調査区が互いに接しており、同一遺構の続きを確認したため記述を一括して記す。

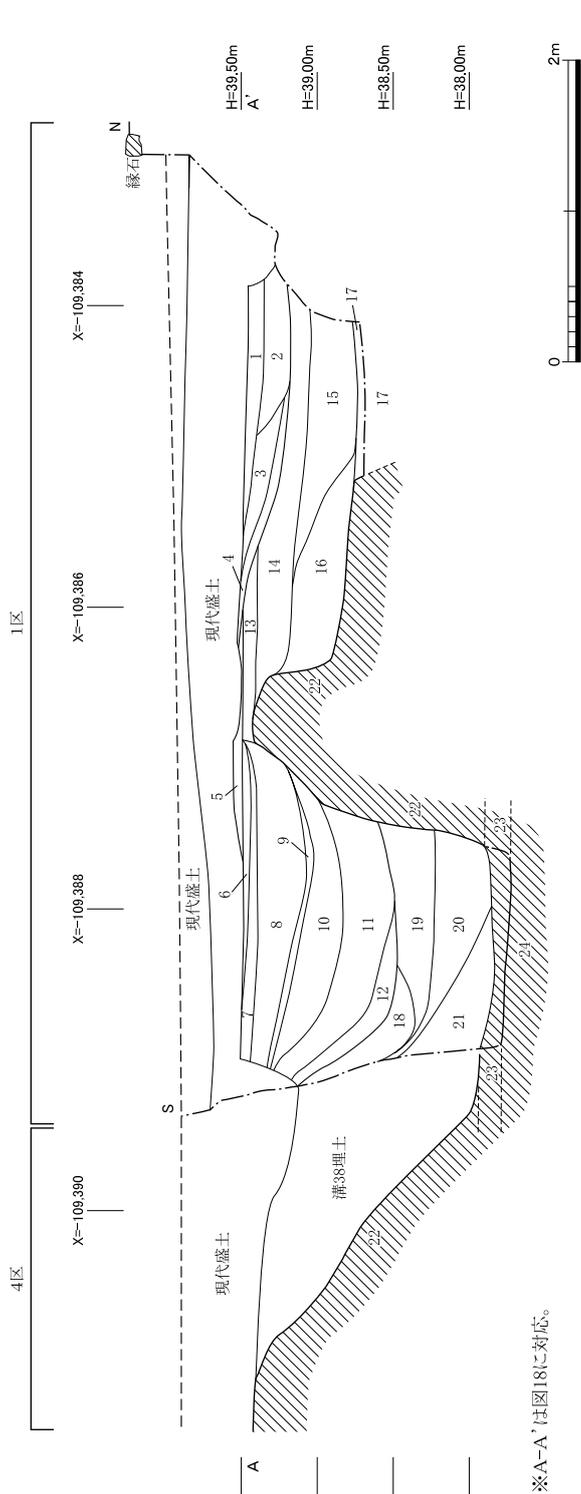
## （2）1・3～5区の遺構（図13～23、図版1・2・4～7）

### 1）基本層序（図13～17）

調査区によって層序が異なるため、それぞれの残りが良い部分を代表させて層序関係を述べる。

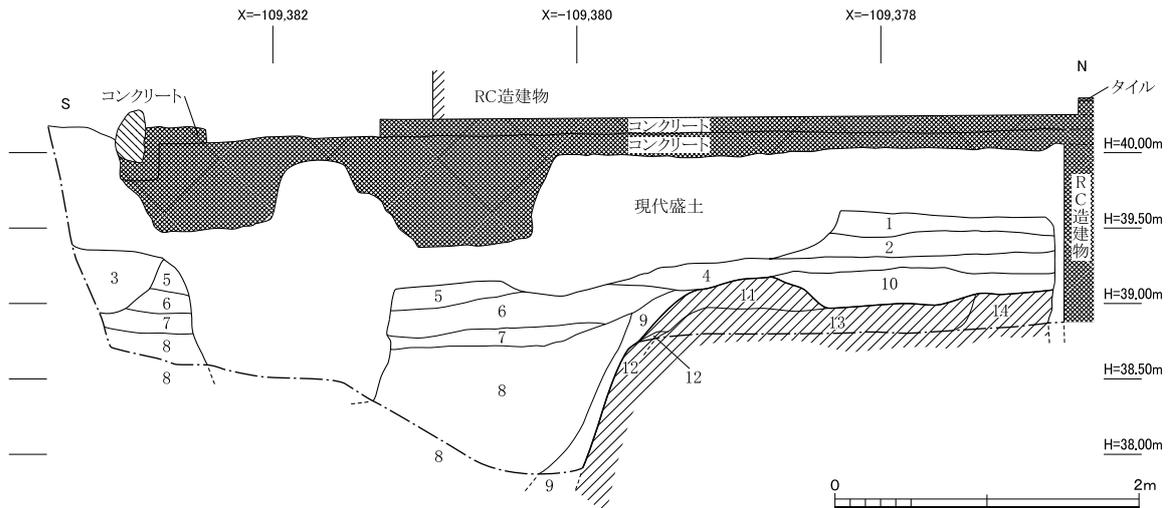
1区の基本層序（図13）は、現地表から0.4mまでが現代盛土、0.45mまでが江戸時代末から明治時代初頭の整地層（整地1、5層）、0.5mまでが江戸時代前期から中期の整地層（13層）、地山相当層（22層）である。遺構面は、13層上面を第1面（江戸時代中期以降）、22層上面を第2面（室町時代）として調査を行った。

3区の基本層序（図14・15）は、コンクリート造建物直下の現地表から0.5mまでが建物造成時の盛土及び整地層、0.7mまでが江戸時代末から明治時代初頭の整地層（整地1、1層）、0.8mまで



- |   |                                     |  |   |
|---|-------------------------------------|--|---|
| <p>1 2.5Y5/3 黄褐色泥砂 瓦少量含</p> <p>2 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 瓦・炭含</p> <p>3 2.5Y4/6 オリーブ褐色砂泥</p> <p>4 2.5Y3/1 黒褐色砂泥 炭層</p> <p>5 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 径0.5～2cmの焼土含[江戸時代末～明治時代初頭:整地1]</p> <p>6 10YR4/6 褐色泥砂 径2～5cmの礫含、径10cmの礫少量含</p> <p>7 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥</p> <p>8 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 径1～3cmの礫・炭含</p> <p>9 7.5YR2/2 黒褐色砂泥 炭層</p> <p>10 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂 粗砂混じり、径2～5cmの礫・炭少量含</p> <p>11 2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂</p> <p>12 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂礫 粗砂混じり</p> | <p>明治時代:土坑25</p> <p>江戸時代後期:土坑21</p> | <p>13 2.5Y6/4 にぶい黄褐色細砂[江戸時代前期～江戸時代中期:整地層]</p> <p>14 10YR5/6 黄褐色砂泥 瓦・埴少量含</p> <p>15 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 径2～5cmの礫含</p> <p>16 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 径3～5cmの礫含、径10cmの礫少量含</p> <p>17 10YR4/4 褐色砂泥[室町時代:土坑30]</p> <p>18 10YR4/2 灰黄褐色粗砂 径5～15cmの礫含</p> <p>19 2.5Y4/4 オリーブ褐色粗砂</p> <p>20 2.5Y4/1 オリーブ褐色砂泥</p> <p>21 10YR4/2 灰黄褐色粗砂 径5～15cmの礫含</p> <p>22 10YR5/6 黄褐色泥砂</p> <p>23 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥</p> <p>24 2.5Y4/6 オリーブ褐色粘質土</p> | <p>室町時代:土坑29</p> <p>室町時代:溝38</p> <p>地山相当層</p> |
|---|-------------------------------------|--|---|

図13 1区中央セクション断面図 (1:50)



- 1 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土 径0.5~3cmの焼土多量含、径0.5~3cmの炭少量含、焼け瓦含[江戸時代末~明治時代初頭:整地1]
- 2 2.5Y6/4 にぶい黄色細砂 径0.5~2cmの礫含[江戸時代前期~中期:整地層]
- 3 10YR4/4 褐色砂質土、粘性あり 径1~2cmの礫・土師器含[室町時代後期~安土桃山時代:土坑4]
- 4 10YR4/4 褐色砂質土 径1~2cmの礫・土師器少量含[室町時代:整地層]
- 5 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土、粘性あり 径5~15cmの礫含
- 6 10YR3/4 暗褐色砂質土 径1~2cmの礫含
- 7 10YR4/4 褐色微砂 径3~5cmの礫含
- 8 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土混礫(径5~20cm、礫主体層) 径5~20cmの瓦・埴含
- 9 10YR4/6 褐色微砂 径1~2cmの礫含[室町時代:土坑6肩口崩落土?]
- 10 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土 径1~5cmの礫含、径1~2cmの土師器・径3~5cmの瓦少量含[中世:整地8]
- 11 2.5Y5/6 黄褐色シルト(ブロック状) 径1~5cmの礫含
- 12 10YR7/6 明黄褐色砂質土混礫(径0.5~30cm)
- 13 10YR5/6 黄褐色砂質土混礫(径1~10cm)
- 14 10YR6/6 明黄褐色砂質土混礫(径3~15cm)

図14 3区西壁断面図(1:50)

が江戸時代前期から中期の整地層(2層)、0.9mまでが室町時代整地層(4層)、1.1mまでが中世の整地層(整地8、10層)である。1層の整地層は焼土主体であり、橙色~赤色を呈し、焼瓦小片を包含していた(図15)。遺構面は江戸時代末から明治時代初頭の整地層を検出した面を第1面(1層上面)とし、中世遺構を検出した面を第2面(10層上面)として調査を行った。

4区の基本層序(図16)は、地表下約0.6mまで現代盛土、それ以下地山相当層(17層)である。遺構の確認ができた北半部では、地表下0.35mまでが現代盛土、0.4mまでが江戸時代後期の整地層(3層)、0.65m以下は地山相当層となり、室町時代後期の溝38は地山相当層を切り込む。遺構面は江戸時代中期の集石遺構を検出した面を第1面(5層上面)とし、中世遺構を検出した面を第2面(地山相当層の17層上面)として調査を行った。なお、検出した大堰川旧北岸は明治時代以前の旧地形であることから、第2面平面図にも掲載している。概要は第1面で述べる。

5区の基本層序(図17)は、現地表下0.4mまでが現代盛土、0.45mまでが江戸時代末から明治



図15 3区西壁断面(東から)

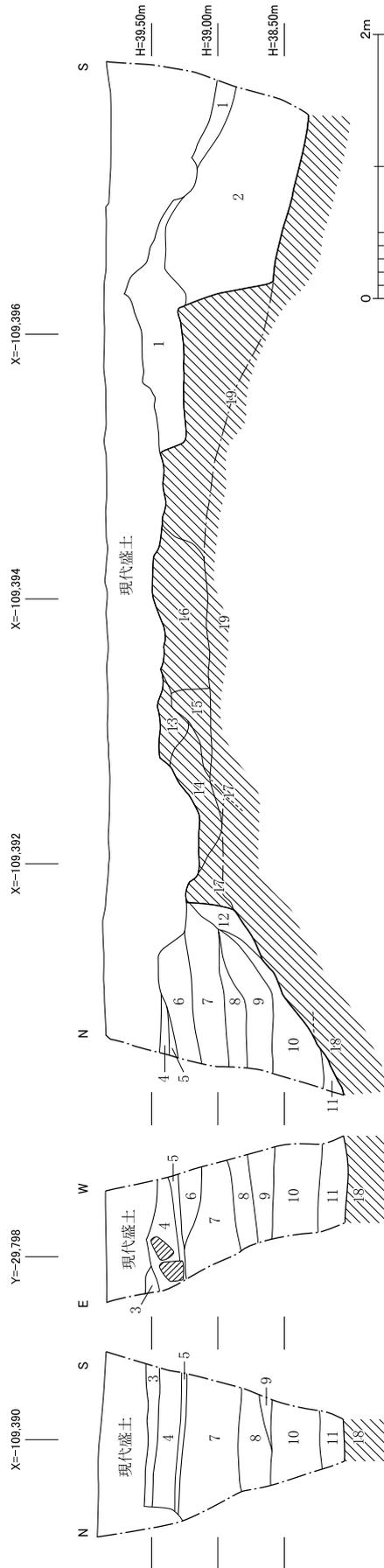


図16 4区東壁断面図 (1:50)

- |  |                 |  |              |
|--|-----------------|--|--------------|
| <p>1 2.5Y8/8 黄色シルト(径1~5cmのプロック)混2.5Y7/4浅黄色シルト[明治時代:大堰川旧北岸埋土]</p> <p>2 10YR5/6 黄褐色砂質土混礫(径5~10cm)[明治時代:大堰川旧北岸埋土]</p> <p>3 2.5Y4/6 オリーブ褐色微砂 径1~5cmの礫少量含[江戸時代後期頃:敷地層]</p> <p>4 10YR5/4 黄褐色砂質土 径10~30cmの礫少量含[江戸時代中期:集石2]</p> <p>5 10YR5/8 黄褐色細砂、粘性あり[江戸時代中期:集石2]</p> <p>6 2.5Y4/6 オリーブ褐色微砂 径1~10cmの礫含[中世~近世:包含層]</p> <p>7 10YR4/6 褐色微砂 径1~3cmの礫含</p> <p>8 10YR5/6 黄褐色砂質土 径3~10cmの礫少量含</p> <p>9 2.5Y4/6 オリーブ褐色砂質土、粘性あり 径1~10cmの礫少量含</p> <p>10 10YR4/6 褐色砂質土、粘性あり 径1~3cmの礫・径1cmの土師器少量含</p> <p>11 10YR4/3 黄褐色粘質土 径0.5~5cmの10YR7/8黄褐色礫少量含</p> | <p>室町時代:溝38</p> | <p>12 10YR5/4 黄褐色砂質土、粘性あり 径1~2cmの礫含[室町時代:溝38肩口崩落土?]</p> <p>13 10YR4/6 褐色微砂 径3~10cmの礫含</p> <p>14 2.5Y4/6 オリーブ褐色微砂 径1~10cmの礫少量含</p> <p>15 10YR4/4 褐色微砂</p> <p>16 10YR4/4 褐色砂質土 径0.5~1cmの礫・径1cmの2.5Y7/6明黄褐色シルトブロック含</p> <p>17 10YR4/6 褐色砂質土、粘性あり 径5~10cmの礫含</p> <p>18 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土 径1~2cmの礫少量含</p> <p>19 10YR4/6 黄褐色砂質土混礫(径1~20cm)</p> | <p>地山相当層</p> |
|--|-----------------|--|--------------|

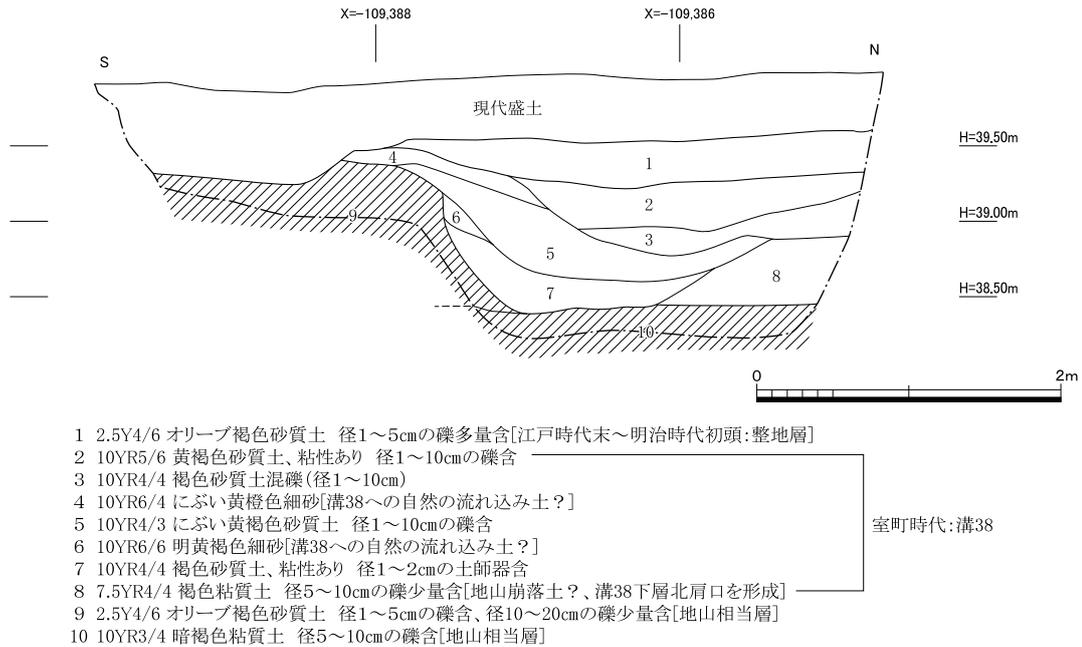


図17 5区西壁断面図(1:50)

時代初頭の整地層(1層)、0.5m以下が地山相当層(9層)である。中世の溝38は地山相当層を切り込み、埋没後1層に覆われる。

## 2) 第1面(江戸時代中期以降)の遺構(図18)

1区西半及び3区北半、4・5区では遺構をほとんど検出できなかった。1区では、中央に江戸時代末から明治時代初頭の整地層(整地1)や石敷面(石敷面22)、同南東で江戸時代後期の溝状遺構(溝状遺構27)、同中央で明治時代と江戸時代後期の土坑(土坑21・25)、同北東で江戸時代中期の溝(溝32)を検出した。柱穴(深さ0.1~0.5m)を数基検出したが、建物や柵などには復元できなかった。3区中央では、江戸時代末から明治時代初頭の整地層を検出した。3区北半はコンクリート造建築物の掘形で壊され、東から南にかけては既存配管や鉄柱基礎を取り除くことができなかったため、調査を行っていない。4区北東で江戸時代中期の集石遺構(集石2)、同南半で大堰川旧北岸を検出した。調査区北西から中央にかけて、江戸時代前期から中期頃の整地層が部分的に残っていた。遺構が少ないのは、1区同様、遺構密度が低いとみられる。なお、4区中央部は既存配管があったため、その下の調査は行っていない。5区では全面に江戸時代末から明治時代初頭の整地層とみられる層を検出したが、1区検出の整地1とは異なり、焼土を含まない。

大堰川旧北岸(図18、図版7-8) 4区南半で検出した。ほぼ東西方向、西で北へ約19°振れている。東端では1段、西端では2段に川側へ急激に落ち込む。検出したのは東西約5m、南北約4m、最深部は約2mで、さらに南へ下がる。黄褐色砂質土混礫(図16の2層)で一気に埋め立てられていた。2層直下の地山相当層である19層との間に、腐植土や河川堆積土などは確認できなかった。このことから、旧北岸一帯の土が削り取った後、一気に埋め立てられた可能性があり、腐植土などが混ざる余地がなかったとみられる。2層の時期は、調査地から渡月橋にかけての大堰川

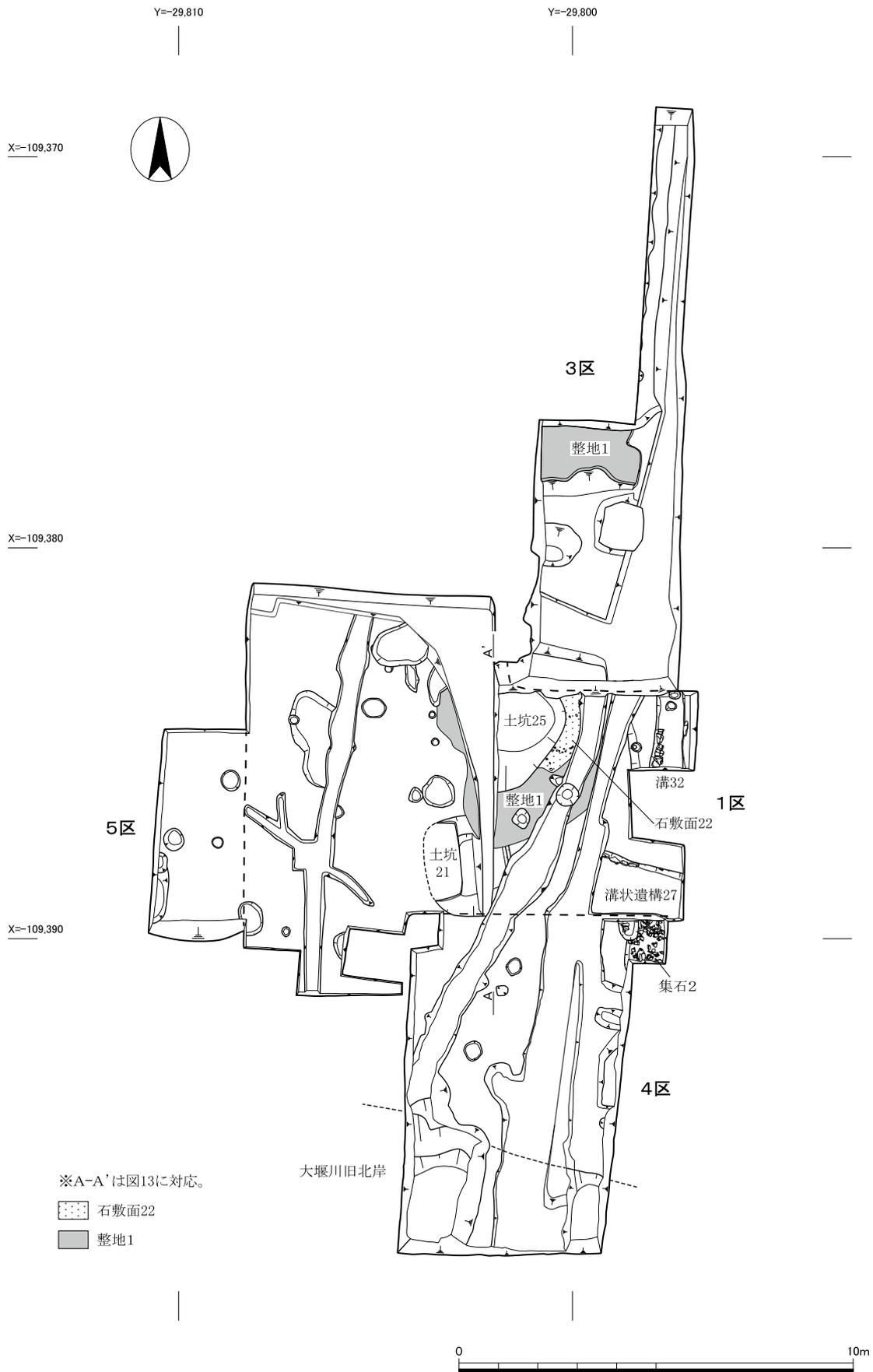


図18 1・3～5区第1面平面図（1：150）

左岸が、大規模な河川改修工事によって埋められた明治時代後期と考えられる。正確には、延命閣が造られた明治32年（1899）から、八賞軒が造られた明治43年（1910）までの11年間である<sup>1)</sup>。

**土坑25**（図18、図版7-3） 1区中央北半で検出した。整地1及び石敷面22に切り込む。西側は配管直下に当たったため、掘り下げを行っていない。東西1.7m以上、南北2.6m以上の楕円形土坑である。3区南では、現代攪乱があったため検出できていない。深さは約0.4m、断面形態は皿状を呈する。埋土は黄褐色泥砂やオリーブ褐色砂泥で、上層北に瓦と炭が偏って出土し、南半下層では炭が約0.05mの厚さで堆積していた。遺物は、染付磁器蓋・椀・皿、施釉陶器椀・皿・急須・徳利、硯、ガラス瓶などが出土した。時期は明治時代である。

**整地1**（図18） 1区中央北半及び3区中央で検出した。1区中央部分は土坑25及び石敷面22で壊されていた。東西約4m、南北約4mの範囲に広がっており、厚さは深いところで約0.1mである。1区北側の3区では中央の既存配管などによる攪乱を受けなかった中央部に残存していた。東・南・北は攪乱によって削平されていたが、西側は既存建物の基礎が浅いため、良好に残存しているとみられる。東西2.5m以上、南北約1.4mの範囲で検出した。厚さは0.2m弱で、上面はほぼ平らにならされていた。整地土は焼土を多量に含むにぶい黄褐色砂質土である。瓦や焼土、スサ入りの焼けた壁土が多く混ざっていた。瓦は10～20cm内外の大きさにすべて割れており、二次的な焼けによって橙色に変化した瓦が3分の2を占める。壁土は橙色から赤色・黒赤褐色の破片になっていた。出土遺物には、棧瓦、丸瓦、平瓦、焼けた壁土を主体とし、土師器皿、染付磁器片、施釉陶器片、鉄釘などがある。時期は江戸時代末から明治時代初頭とみられ、三秀院が禁門の変で

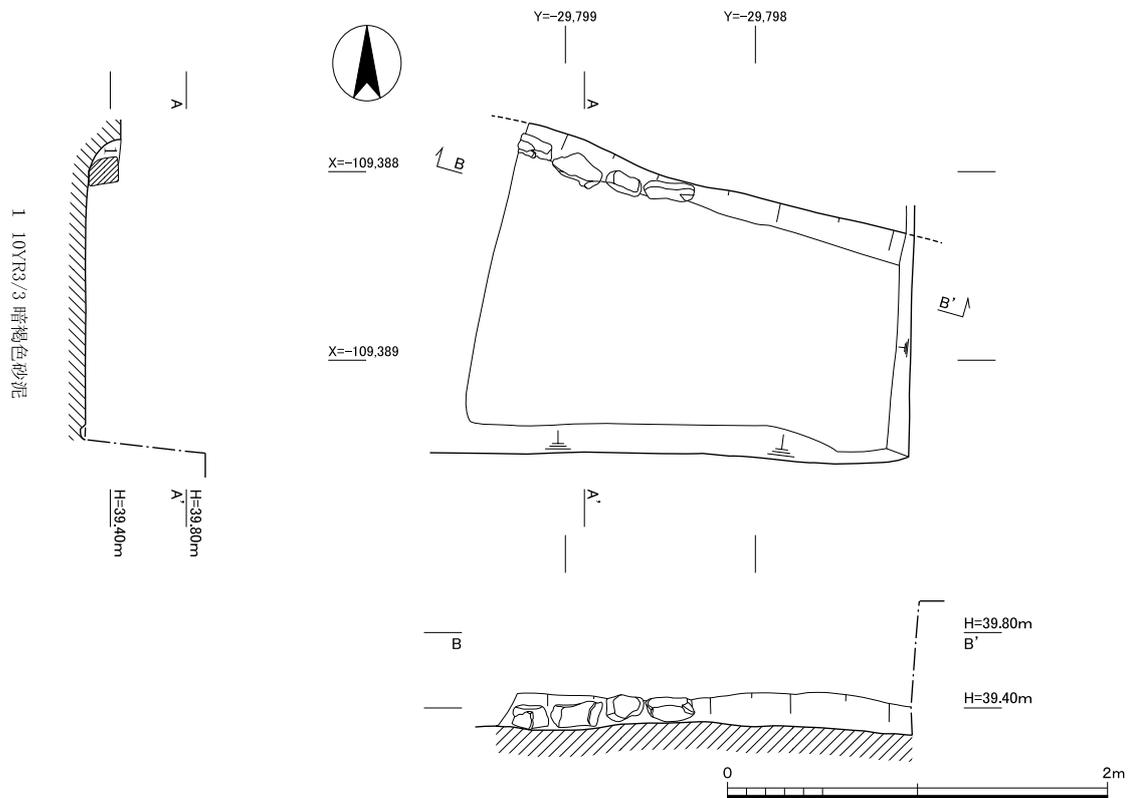
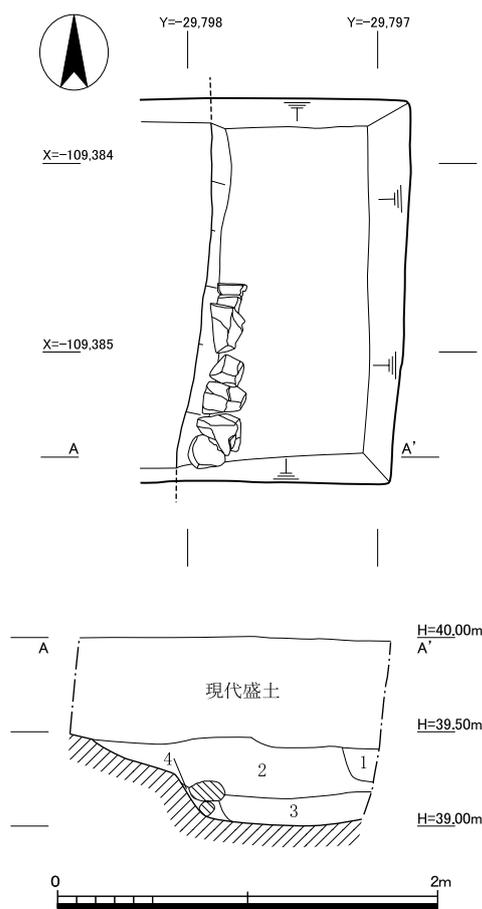


図19 1区溝状遺構27実測図（1：40）

焼失し、その後の整地に相当する。

**石敷面22**(図18) 1区中央北半で検出した。西半は土坑25、東側は配管攪乱によって壊されていた。南は整地1の一部上面に載るが、同時期に敷設されたとみられる。東西約1m、南北約2m、厚さ約0.1mを測る。暗褐色砂質土に、径5～10cmの礫を敷き詰めていた。一部焼土が混ざっていた。遺物は染付磁器椀、施釉陶器片、道具瓦が出土した。時期は江戸時代末から明治時代初頭とみられる。

**溝状遺構27**(図18・19、図版7-1) 1区南東で検出した東西方向の遺構である。長さ2m以上、最大幅1.7m、深さ約0.2mを測る。南側は4区で確認したところ、攪乱された部分より南でも検出できなかった。よって、幅1.8m以内に収まるとみられる。東は調査区外へと延びる。西側は現代配管及び現代攪乱により確認できなかった。北肩直下の溝底に、長さ20～30cmの石を溝肩に並行させて一列に4石並べていた。石設置後に入れた裏込め埋土は暗褐色砂泥、溝埋土は褐灰色粘質土である。溝底は平坦であった。南側に築山状の集石2が造られていたことも含めると、通路や園路の縁石とも考えられることから、溝状遺構とした。棧瓦、道具瓦、平瓦が出土した。時期は江戸時代後期とみられる。



- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 径0.5～1cmの礫含[江戸時代後期:溝]
- 2 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂
- 3 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥[江戸時代中期:溝32]
- 4 10YR3/3 暗褐色砂泥[江戸時代中期:溝32石積掘形]

図20 1区溝32実測図(1:40)

**土坑21**(図18) 1区中央南半の整地1直下で検出した。西半は現代の景石、東には配管が残存していたため、それらの直下は掘り下げていない。平面形態は、一辺2.1～2.3mの隅丸方形を呈する。深さは約0.8mを測る。北側が2段になっており、また埋土の炭化物の有無がその段差を境に変化することから、掘り直しが行われたとみられる。埋土はにぶい黄褐色砂泥などで、中程に約0.05mの厚さで炭化物が堆積していた。最上面には10～20cmの角礫が東側に偏って堆積していた。遺物は、土師器皿、染付磁器椀、青磁染付椀、白磁椀、施釉陶器鍋・火鉢・花入れ・灯明皿、瓦質土器火鉢、焼締陶器播鉢、硯、棧瓦、平瓦、道具瓦、煙管などが出土した。時期は江戸時代後期で、1700年代末から1800年代初頭に収まる。

**溝32**(図18・20、図版7-2) 1区北東で検出した南北方向の遺構で、北・東側は調査区外である。南へ続くものとみられるが、1区南東角付近で検出できていないことから、南へは2m以内に収まる。現状では南北1.8m以上、幅1m

以上、深さ約0.2mを測る。西肩直下の溝底では、面を東にそろえた状態の石列を検出した。石の大きさは10～25cmであった。石の積み方に規則性は認められず、1段積みの部分と2段積みの部分が併存していた。北半に石列は残っていなかったが、その周辺には石が散乱していた。抜き取った石を廃棄した可能性がある。下層埋土はオリーブ褐色泥砂の単一層であった。石積みの裏込め土は暗褐色砂泥である。遺物は出土していない。時期は層序から、江戸時代中期とみられる。

**集石2**（図18・21、図版7-7） 4区北東角で検出した。東及び南は調査区外である。1区で検出できなかったことから、北端を溝状遺構27や攪乱によって壊されたとみられる。また、溝状遺構27と併存していた可能性も考えられるが、詳細は不明である。東西1m以上、南北1.5m以上、高さ約0.25m

である。下層の溝38上面埋土を少し掘り下げ、黄褐色細砂（図21の2層）で整地し、径10～30cmの礫を多く入れたにぶい黄褐色砂質土（同1層）を蒲鉾状に盛り上げた遺構である。石を規則正しく並べたり、積み上げたりしたものではないが、意識的に入れたものであることから、地業の一種とみられ、形態から築山状の遺構であったとみられる。遺物は土師器皿や丸瓦・平瓦など中世の遺物が出土しているが、層序から江戸時代中期とみられる。

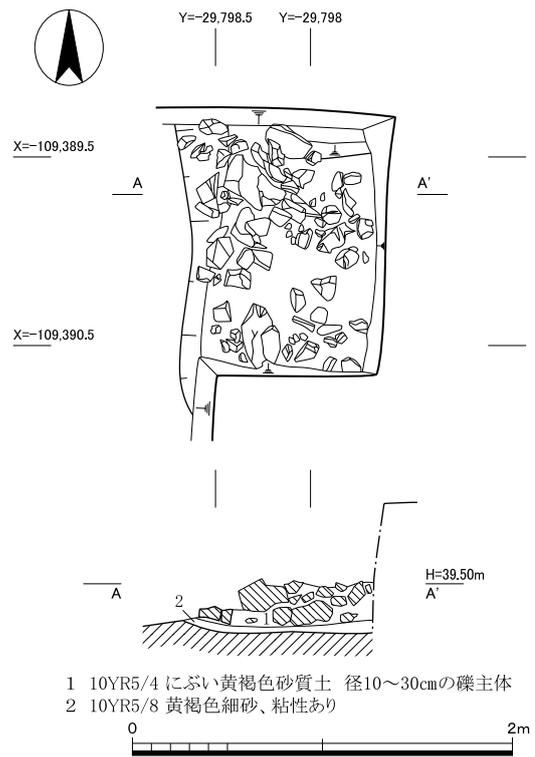


図21 4区集石2実測図（1：40）

### 3) 第2面（室町時代）の遺構（図22）

1・4・5区では、ほぼ東西方向に延びる溝（溝38）を検出した。1区北で柱穴や土坑（土坑30）を検出した。同区北西の土坑は、0.1～0.25mと浅く、不整形で遺構の輪郭も不明瞭であることから、木の根の痕跡とみられる。3区中央から北半で整地層を2箇所（整地8・9）、同中央で集石遺構（集石7）、同区南半で土坑（土坑6）を検出した。4区南では、地山相当層の確認に留まり、建物跡などの遺構は全く検出することができなかった。

**整地8**（図22） 調査区中央で検出した。南北約2.4m、東西2.7m以上に広がるとみられる。厚さは0.1～0.2mを測る。埋土はにぶい黄褐色砂質土である。径3～20cmの瓦や塼の破片を含む。窪地であった部分を平らにするために、礫や瓦などを混ぜて整地したとみられる。遺物包含の粗密から、整地の単位が認められた。出土遺物は土師器皿、平瓦、塼などである。時期は14世紀前半である。

**整地9**（図22） 3区北半で検出した。北及び西はコンクリート建物、東は配管掘形で攪乱されていた。東西約0.7m、南北約6mを検出した。掘り下げを行っていないが、攪乱坑の壁面で確認

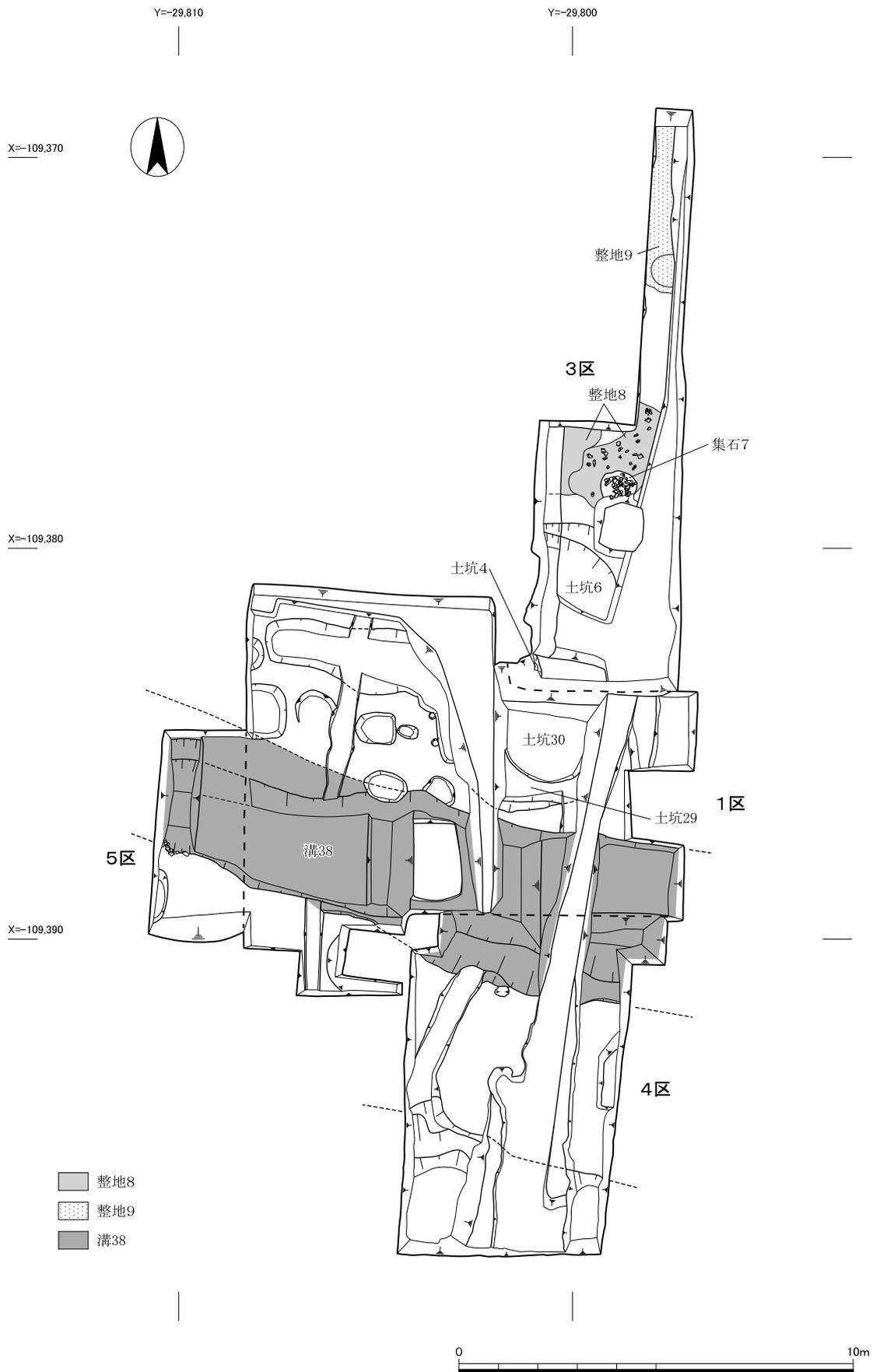


图22 1·3~5区第2面平面图 (1:150)

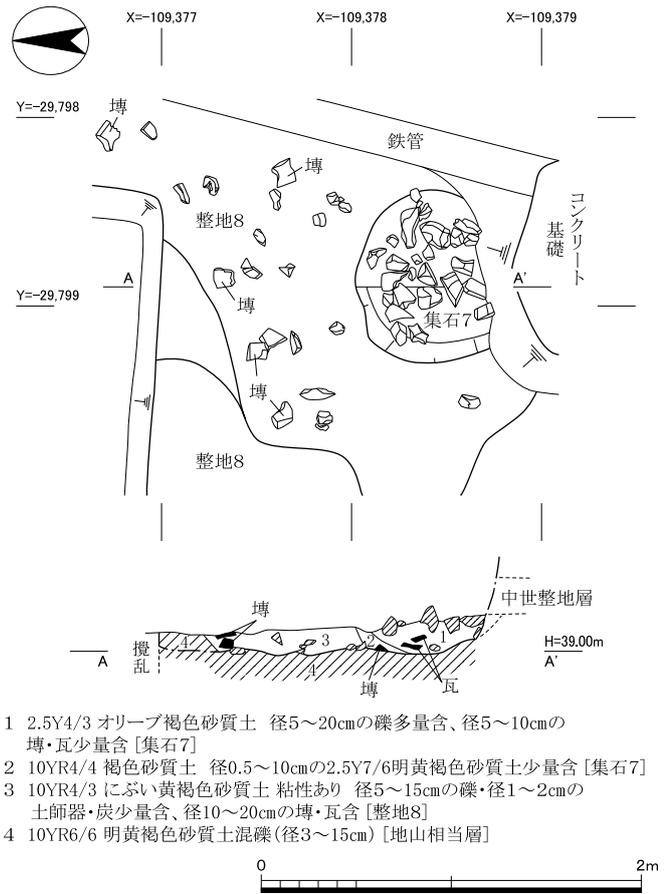
したところ、少なくとも0.1mの深さがあった。検出時に遺物の包含量が異なる箇所を確認しており、整地の単位とみられる。埋土は暗褐色砂質土やにぶい黄褐色砂質土で、土師器皿片や炭を少量包含する。時期を特定できる遺物はなかったが、整地8と似た埋土をもっていることから、14世紀前半またはそれ以降とみられる。

**集石7** (図22・23、図版4-3) 3区中央のコンクリート基礎北側で検出した。南側が基礎の下であったため、全体の大きさは不明であるが、直径0.9m程度の円形になるとみられる。深さは約0.2m、埋土はオリーブ褐色砂質土や褐色砂質土である。径5~20cmの礫を主体に、瓦片や塼が少量混じる。整地8を掘り窪めて造られていた。対になるような遺構を周辺で検出できなかったが、礫の大きさや密度から、礎石の根固石の可能性もある。遺物は土師器片、平瓦、塼が出土した。時期は室町時代であるが、整地8よりも新しいことから、14世紀前半以降とみられる。

**土坑6** (図22) 3区南半で検出した。西は調査区外、東は配管直下で調査ができていない。1区土坑30と同じ遺構の可能性もある。東西1.8m以上、南北4m以上の土坑になるとみられる。断割を約1.3mまで行ったが、底部を確認することができなかった。上層埋土の5~7層(図14)は、暗オリーブ褐色砂質土などに径1~15cmの礫が含まれる程度であるが、下層の8層は径5~20cmの礫が主体の層であった。礫は亀山の岩盤由来の角礫である。土坑北肩口から8層下にかけて、土師器片を少量含む褐色微砂層(同9層)が堆積していた。肩口の崩落土とみられる。遺物は主に礫層である8層から出土しており、土師器皿、須恵器鉢、焼締陶器鉢、瓦質土器火鉢・風炉、丸瓦、平瓦、塼などがある。時期は15世紀中頃から後半である。礫の集積廃棄のための土坑とみられる。

**土坑30** (図22、図版2-1・7-3) 1区中央北端の土坑29下層で検出した。直径1m以上の円形土坑になるとみられる。ただし、北側の3区西壁断割で確認した土坑6が、検出した標高や出土遺物などから同じ遺構であった可能性も考えられる。土坑30は開発の掘削深度が及ばないため、約0.1m掘り下げたのみで調査を終えた。遺物は土師器皿、熨斗瓦が出土し、15世紀中頃から後半とみられる。

**土坑29** (図22、図版7-3) 1区中央北半で検出した。東西は配管の下、北側は調査区外であ



- 1 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質土 径5~20cmの礫多量含、径5~10cmの塼・瓦少量含 [集石7]
- 2 10YR4/4 褐色砂質土 径0.5~10cmの2.5Y7/6明黄褐色砂質土少量含 [集石7]
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土 粘性あり 径5~15cmの礫・径1~2cmの土師器・炭少量含、径10~20cmの塼・瓦含 [整地8]
- 4 10YR6/6 明黄褐色砂質土混礫(径3~15cm) [地山相当層]

図23 3区集石7実測図(1:40)

る。北側の3区では、この遺構を検出できなかったことから、直径2.5m以内の円形土坑になるとみられる。深さは約0.6mを測る。埋土は瓦や塼を多量に包含した黄褐色砂泥などである。遺物は土師器皿、丸瓦、塼などが出土した。時期は室町時代で、15世紀後半とみられる。

**土坑4** (図22) 3区南西角で確認した土坑である。西側が調査区外で、南側は江戸時代後期の土坑21によって壊されていた。直径0.5m以上の円形を呈していたとみられる。深さは0.4mを測る。埋土は褐色砂質土である。土師器皿、施釉陶器碗(天目碗)、平瓦、鉄釘などが出土した。室町時代後期とみられる。

**溝38** (図22、図版2-2・5-3・6-3) 1区南半及び4区北側全域、5区のほぼ全域を占める形で検出した。西から東方向の溝で、西で北へ19~20°振れている。この振れは、大堰川旧北岸の振れと同じであることから、この溝は旧地形に倣って造られたと考えられる。今回の開発深度が及ばないため、部分的に断割を入れて下部構造の確認を行った。規模は長さ12m以上、幅3~4m、深さ1.1~1.5mを測る。溝断面の形状は逆台形で、底幅は約2mである。底の勾配は西から東へ低くなっており、窪みによって所々0.1m程度深くなっていた。埋土は褐色微砂やにぶい黄褐色粘質土などで、層によっては礫が多量に包含していた。5区では、溝上面を江戸時代末から明治時代初頭の整地層によって覆われていた。断面観察から、一度に埋め戻されたものではなく、徐々に埋まっていったとみられる。1区中央付近の北側壁・5区の南側壁はほぼまっすぐに立ち上がるが、4区北端の南側壁については緩やかに立ち上がっていた。この溝側壁の立ち上がり方の違いは、地山相当層の強度差によるものとみられる。5区で検出した南肩口はオリーブ褐色砂質土に角礫が含まれた固く締まった地山相当層であった。一方、4区の南肩口は粘性のある砂質土であったが、それ程締まりもない堆積土であったことから、肩口の壊れやすかったとみられる。遺物は、土師器皿、須恵器片、丸瓦、平瓦、雁振瓦、熨斗瓦、塼などが出土した。特に、塼は図13の24・27層中から多量に出土したため、一部を地中に現地保存している。この塼を多量に包含する層は、4・5区では検出できなかった。土師器皿の時期が14世紀末から15世紀初頭であることから、溝が埋まったのは室町時代後期とみられる。

### (3) 2区の遺構 (図24~32、図版3・7)

#### 1) 基本層序 (図24)

基本層序は、現地表から0.8mまでが近代から現代盛土、1.1mまでが中世整地層(9~11層)、これより下が地山相当層(14層)である。室町時代の土坑5は、中世の整地4を切り込んで造られていた。北壁の地山相当層を観察すると、中央の7層が高く、東西に低くなり、東西の地山相当層はすべて斜めに堆積していた。亀山の岩盤の礫を多く包含していることから、山から崩落してきた土が堆積したものとみられる。南壁の地山検出値は39.25m、北壁の地山検出値は39.98mと約0.7mの差で北が高い。一方、調査区北側で検出した中世の整地3上面の標高値は39.60m、調査区南で検出した整地4上面の標高値は39.50mで差がない。地山相当層は北から南へ傾斜し、高低差が著しいが、中世の整地層上面は平坦であることから、中世の段階で北の高い部分を削り、その土を南

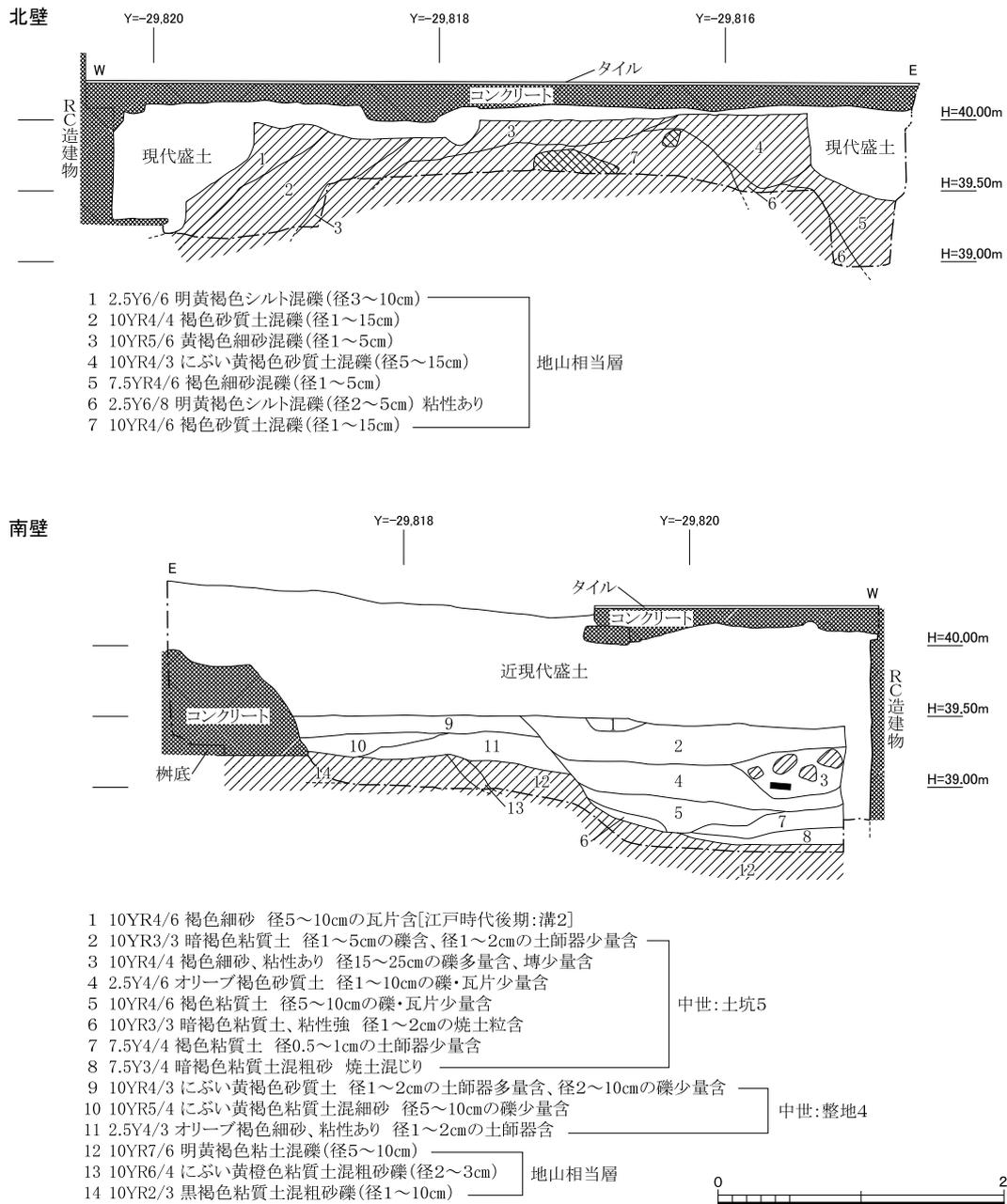


図24 2区北壁・南壁断面図(1:50)

の低い部分や窪地に入れて平坦地に造り変える大規模造成を行ったとみられる。

遺構面は攪乱を除去した段階で、鎌倉時代から江戸時代までの遺構を同一面(南壁1・2・9層上面)で検出した。江戸時代後期の遺構を第1面、鎌倉時代末から江戸時代前期の遺構を第2面とした。また、中世の整地3直下から13世紀後半の溝6を検出したことから、溝6と同時期にあたる遺構を含めて第3面(地山相当層、同12~14層上面)とした。

## 2) 第1面(江戸時代後期)の遺構(図25)

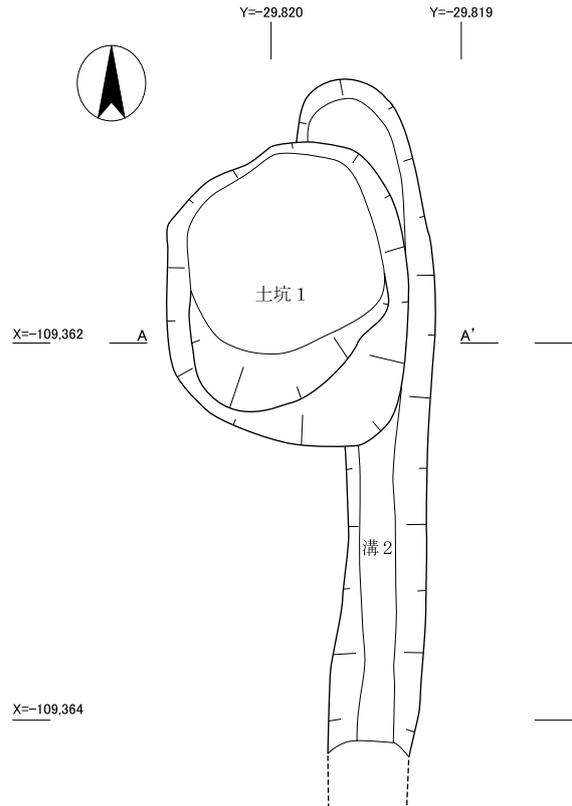
調査区南西で土坑及び溝を検出した。その他では、削平が著しく、この時期の遺構は確認することができなかった。



図25 2区第1面平面図 (1 : 100)

土坑1 (図25・26、図版7-4) 調査区南西で検出した。東西約1.3m、南北約1.6mの楕円形を呈する。深さは0.25mを測る。断面形状は皿状で、南肩から2段に落ちる。埋土はにぶい黄褐色砂質土などで、部分的に棧瓦を多量に包含する。遺物は染付磁器片、棧瓦、平瓦などが出土した。時期は江戸時代後期である。

溝2 (図25・26、図版7-4) 調査区南西で検出した南北方向の溝である。南は調査区外へ延びる。北西半を土坑1によって壊されていたが、北端は土坑1の北側で収束していた。長さ3.5m以上、幅0.4~0.6m、深さ約0.2mを測る。埋土は褐色細砂で、瓦片を少量含む。明確に時期を決定できる遺物は出土していない。江戸時代後期とみられる。



### 3) 第2面 (鎌倉時代末から江戸時代前期) の遺構 (図27)

調査区北で鎌倉時代末の整地、調査区北及び南端で室町時代の整地、調査区南西で江戸時代前期の土坑を検出した。調査区北端及び中央西半では、地山相当層で遺構は検出できなかった。

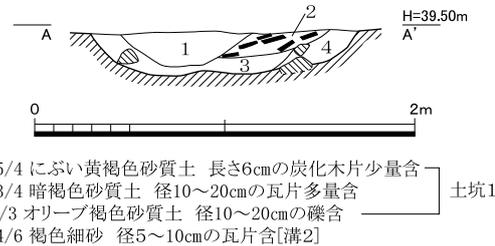
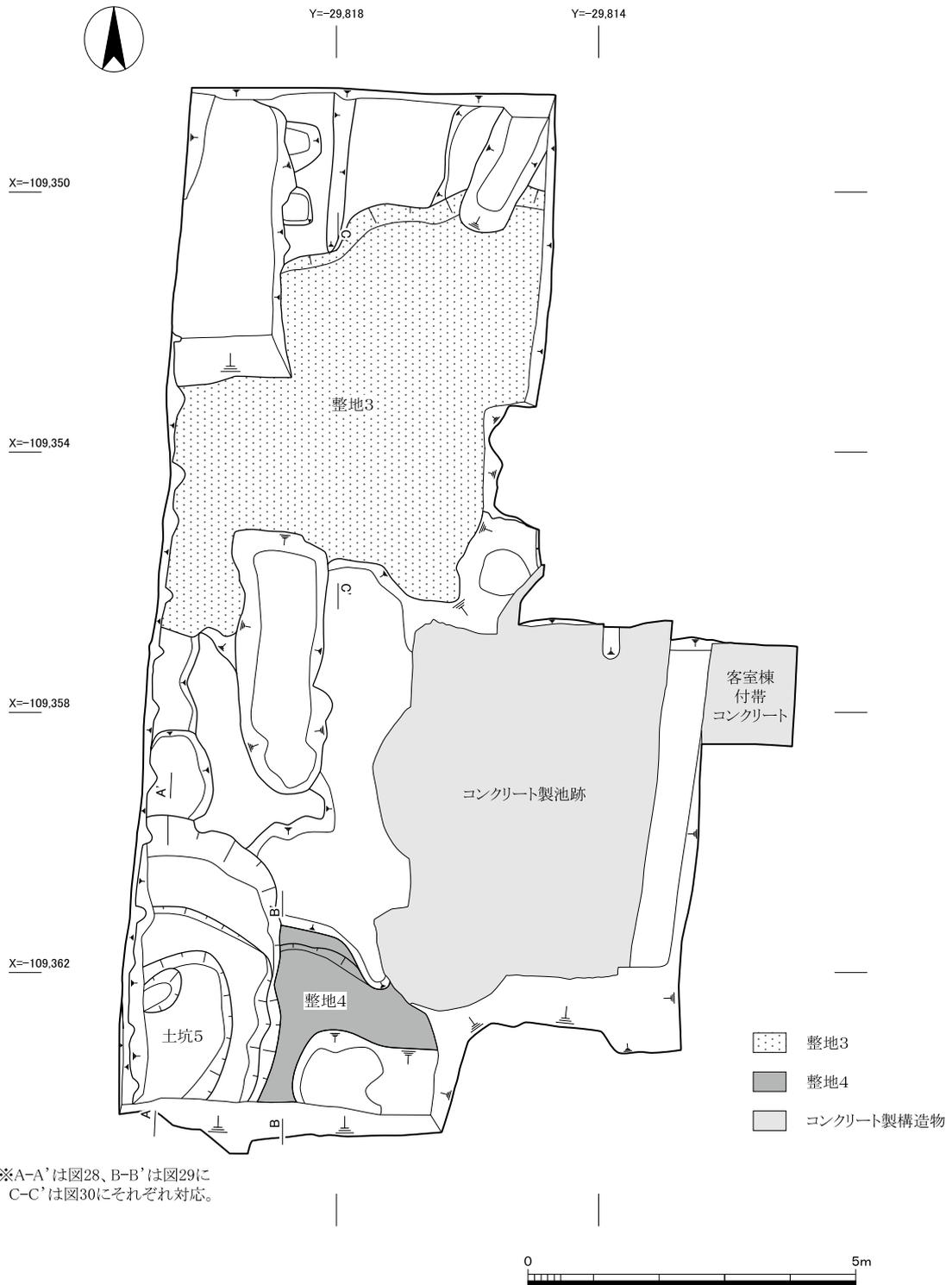


図26 2区土坑1・溝2実測図 (1:40)

土坑5 (図27・28、図版7-6) 調査区南

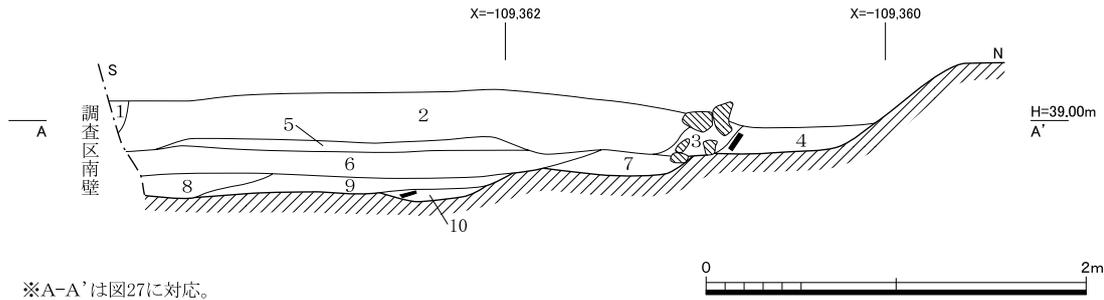
西で検出した不定形な土坑である。西側と南側は調査区外で、東西2.3m以上、南北4.4m以上、深さ約0.8mを測る。底面は平らではなく、段差を持つ。埋土はオリーブ褐色砂質土や暗褐色粘質土などで、所々に焼土粒や炭が混じり、特にそれらは下層に堆積していた (図24の南壁6・8層、図28の8~10層)。また礫が集石している層 (図24の南壁3層、図28の1層) も確認した。遺物は土師器皿、施釉陶器椀、焼締陶器片、丸瓦、平瓦、塼、鉄釘などが出土した。下層では14世紀末から15世紀初頭の土師器皿が出土しているが、上層からは17世紀中頃の天目茶椀が出土した。

整地4 (図27・29) 調査区南端で検出した。西側は土坑5に壊され、東・南側は調査区外へと延びる。検出した範囲は東西約2.7m、南北約2.8m、深さ約0.35mである。最上面は平行堆積の1層で覆われていたが、下層は土坑状の窪地に北から南へと土を小分けに入れていた。埋土はにぶい黄褐色粘質土などである。図29の第2・3層からは土器片はあまり出土しなかったが、それらの上下に堆積していた層 (同1・4・5層) には大量に土師器小片が含まれていた。整地の単位によ



※A-A'は図28、B-B'は図29に  
C-C'は図30にそれぞれ対応。

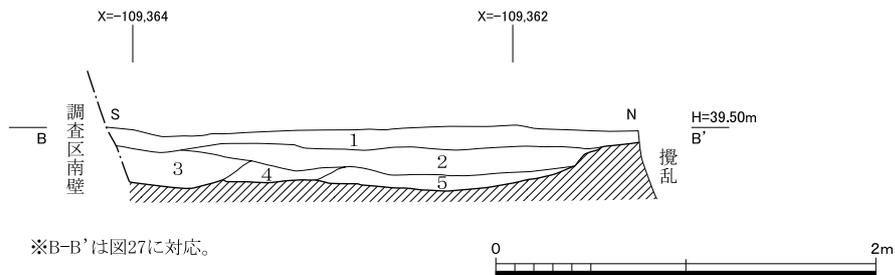
図27 2区第2面平面図 (1 : 100)



※A-A'は図27に対応。

- 1 10YR4/4 褐色細砂、粘性あり 径15~25cmの礫多量含、埴少量含(図24の3層)
- 2 2.5Y4/6 オリーブ褐色砂質土 径1~10cmの礫・瓦片少量含(図24の4層)
- 3 10YR3/4 暗褐色砂質土 径10~25cmの礫含、径0.5cmの土師器少量含
- 4 10YR3/3 暗褐色粘質土 径1~2cmの焼土粒・炭含
- 5 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質土混礫(径1~3cm) 径0.5cmの炭少量含
- 6 7.5Y4/4 褐色粘質土 径0.5~1cmの土師器少量含(図24の7層)
- 7 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂、粘性あり 径0.5cm以下の土師器少量含
- 8 7.5Y3/4 暗褐色粘質土混粗砂 焼土混じり(図24の8層)
- 9 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂、粘性あり 径0.5~2cmの焼土粒少量含
- 10 10YR3/2 黒褐色粘質土混微砂 径10cmの瓦片・径0.5cmの焼土粒少量含

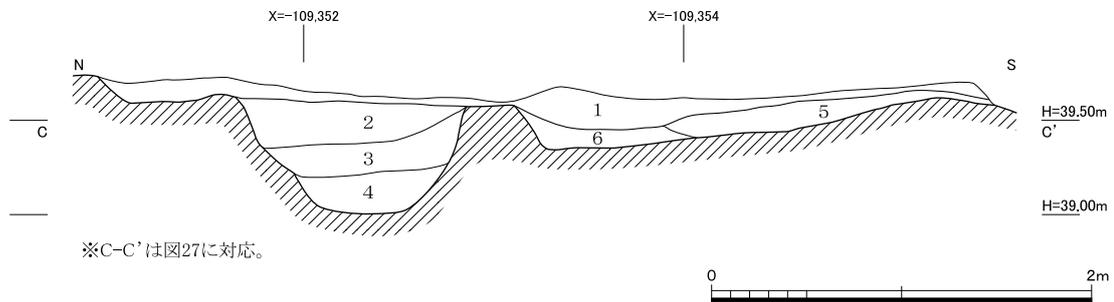
図28 2区土坑5断面図(1:40)



※B-B'は図27に対応。

- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土 径1~2cmの土師器多量含、径2~10cmの礫少量含
- 2 10YR4/6 褐色砂質土 径1~3cmの土師器・礫少量含
- 3 2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂、粘性あり 径1~2cmの土師器含
- 4 2.5Y5/4 黄褐色微砂、粘性あり 径1~2cmの土師器多量含、径1~2cmの礫少量含
- 5 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂 径1~3cmの土師器多量含、径5~10cmの礫含

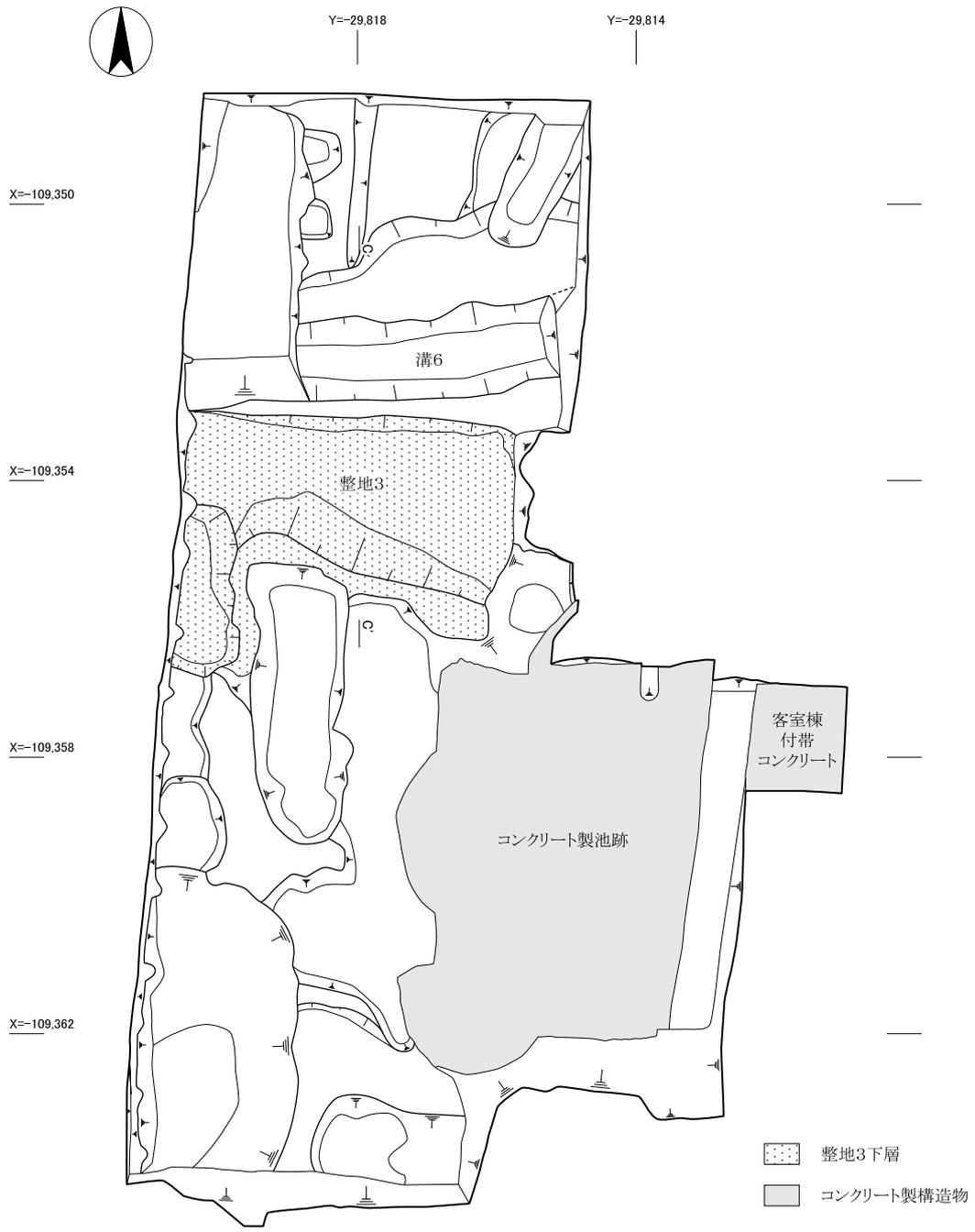
図29 2区整地4断面図(1:40)



※C-C'は図27に対応。

- 1 2.5Y3/2 黒褐色砂質土混細砂 径2~3cmの土師器多量含、径1~10cmの礫・瓦片含[整地3上層]
- 2 2.5Y4/6 オリーブ褐色砂質土 径2~5cmの土師器多量含、径5~10cmの礫含
- 3 10YR3/3 暗褐色砂質土 径2~5cmの土師器・径10~40cmの礫含
- 4 10YR4/4 褐色砂質土 径1~2cmの土師器・径1~3cmの礫少量含
- 5 10YR4/4 褐色粘質土 径1~2cmの土師器少量含、径5~10cmの礫含
- 6 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土 径1~2cmの土師器少量含、径5~10cmの礫多量含

図30 2区整地3・溝6断面図(1:40)



※C-C'は第2面と同じもので、図30に対応。



図31 2区第3面平面図 (1 : 100)

る違いとみられる。土師器皿、瓦質土器鍋、丸瓦、平瓦などが出土した。時期は14世紀後半である。

**整地3上層**（図27・30、図版7-5） 調査区北半で、東西5.3m以上、南北7m以上の範囲に広がった整地層を検出した。断面観察の結果、上下2層に分かれており、上層は溝6を覆っており、下層は溝6を造った際に溝6南側にあった窪地を埋め立てたとみられる。整地3上層埋土



図32 2区溝6断面（西から）

は黒褐色砂質土混細砂で、厚さ約0.2mであった。この上層埋土は溝6北側にある地山相当層の段差（約0.1m）も同時に埋めていた。この辺り一帯を平坦にすることが目的の整地であったとみられる。整地3上層からは、土師器皿、輸入陶器皿、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、熨斗瓦、塼、銭貨、鉄釘などが出土した。特に土師器皿が大量に出土しており、近辺に生活空間を想定できよう。出土した軒丸瓦や軒平瓦は小振りなものであったことから、塀に使用されていた可能性がある。時期は13世紀末から14世紀初頭とみられる。

#### 4) 第3面（鎌倉時代後期）の遺構（図31）

鎌倉時代後期の溝を調査区北半で検出した。また、整地3下層を整地3上層直下の溝南側一帯で確認した。調査区北端及び中央より南半では、遺構を検出していない。

**溝6**（図30～32、図版3-2） 調査区北で検出した。東西方向の溝で、軸は東で北へ約7°振れている。長さ4m以上、幅1.2～1.4m、深さ約0.6mである。断面形状は逆台形を呈する。埋土はオリブ褐色砂質土などで、上層の第2層（図30）に土師器皿が多量に投棄されていた。下層の3・4層には土師器皿はほとんど入っていなかった。埋土に流水痕跡が認められなかったことから、空堀状であったとみられる。溝は短期間に埋められたようである。遺物に時期差が認められることから、大量の土師器皿を包含した整地3上層埋土で、溝及び整地3下層の上面を覆って整地するまでには、時間差があるとみられる。出土遺物は土師器皿、瓦器椀、丸瓦、平瓦、熨斗瓦、鉄釘などである。時期は13世紀後半とみられる。

**整地3下層**（図30～32、図版3-2） 調査区北の溝6南側で検出した。埋土は褐色粘質土などで、厚さ約0.1mである。遺物は土師器皿などがあるが、ほとんど出土していない。南西端では深さ約0.5mの窪地があり、整地3下層埋土と同じ褐色粘質土で埋められていた。この窪地の埋め立てから、周辺を平坦にならした整地であったと考えられる。時期は溝6掘削と同時期の13世紀後半とみられる。

註

1) 小川 功「嵯峨・嵐山の観光先駆者」『跡見学園女子マネジメント学部紀要』第10号、2010年

## (4) 立会調査 (図33～36)

### 1) 立会調査の概要

汚水管探索や配管工事に伴って、4箇所で立会を行った。No.1～3地点は2013年7月12日、No.4地点は2013年12月17日から12月19日にそれぞれ施工会社の重機掘削設定日に対応した。

### 2) No.1～3地点

汚水管を捜すことを目的に、延命閣南から八賞軒北東までの通路上で、立会調査を行った。立会は3箇所で行い、延命閣南を立会No.1、八賞軒北を立会No.2、八賞軒北東を立会No.3とした。いずれの調査地点でも、地表下約0.6mまでを掘削し、配管やマンホールを確認した。すべて近代から現代盛土中であった。遺物は出土していない。

### 3) No.4地点

汚水管の配管に伴い立会調査を実施した。配管工事は、おおむね幅約0.6m、深さ約1mの規模で掘削され、大門付近より八賞軒北側までの総長約37mの範囲で行われた。配管位置は既存管埋設部分に計画されたため、現代盛土の確認に留まり、遺構面には到達しなかった。地表下約0.7mで検出したにぶい黄褐色砂質土は、発掘調査(4区)の際に確認した近代盛土とみられる。遺物は出土していない。



図33 立会No.1地点確認の榦全景(南東から)



図34 立会No.2地点の立会風景(南西から)



図35 立会No.4地点の配管作業風景(東から)

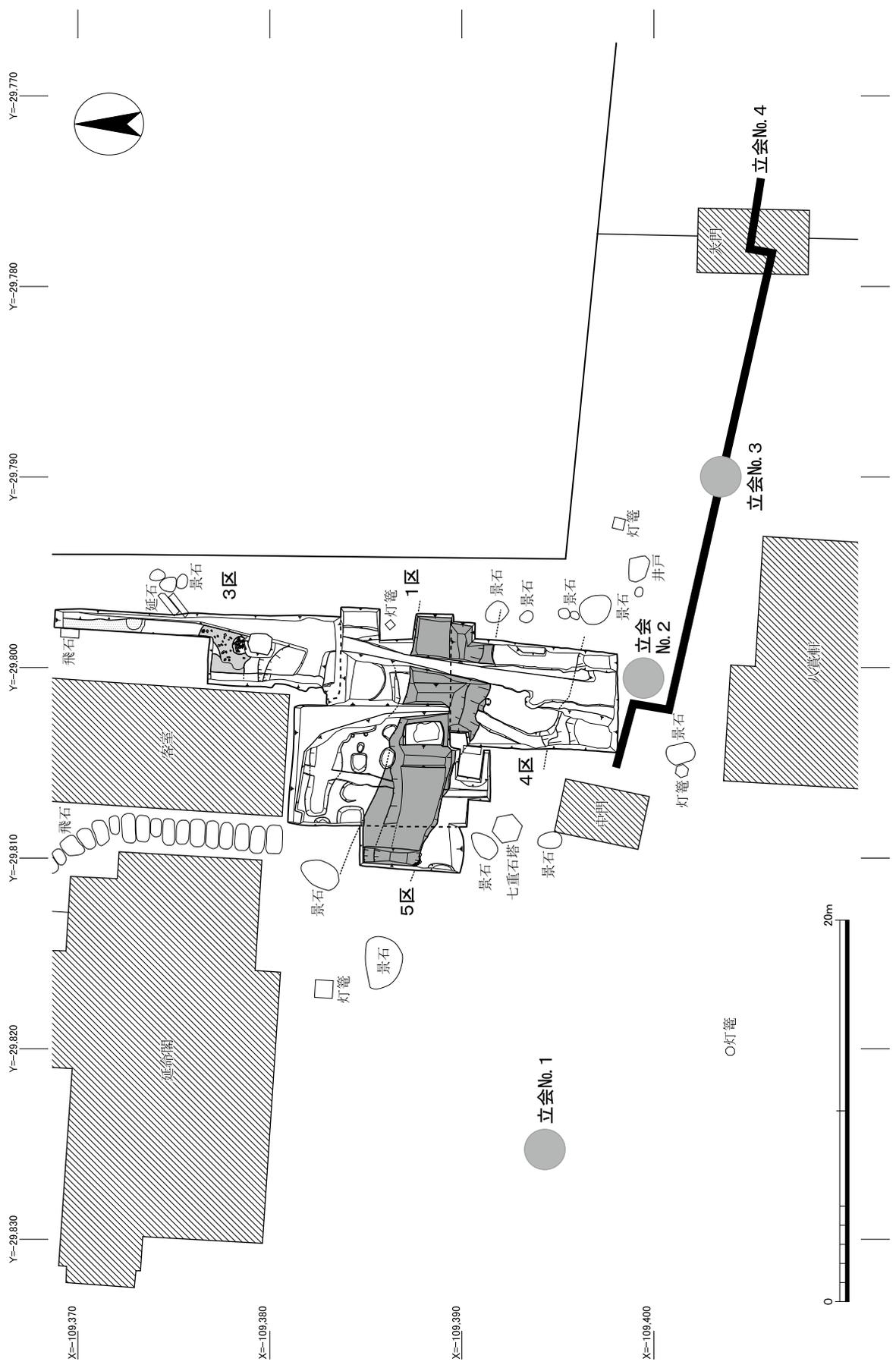


图36 立会地点位置图 (1 : 300)

## 5. 遺 物

### (1) 遺物の概要 (表4)

1～5区までの遺物を合わせて、遺物整理箱に43箱出土した。遺物の大半は江戸時代の棧瓦や中世の埴であり、その他の土器類では中世の土師器皿がまとまっていた。

平安時代の遺物は、1～5区の中世の遺構から少量であるが出土している。その内容は、土師器皿・甕、須恵器杯・壺・甕・瓶子、緑釉陶器椀、軒平瓦などがある。土師器皿は小片であったため掲載していないが、11～13世紀のものが出土しており、近辺にこの時期の遺構の存在を示唆する遺物といえよう。鎌倉時代から室町時代の遺物は、土師器皿や埴を中心として、須恵器鉢、焼締陶器鉢・甕、瓦質土器椀・火鉢・風炉、輸入陶器皿・壺、軒丸瓦・軒平瓦・道具瓦・丸瓦・平瓦、銭貨などが出土している。土師器皿は2区整地3・4、埴は1区溝38や3区土坑6から多く出土し、瓦質土器火鉢・風炉は3区土坑6からまとまって出土した。江戸時代中期以降の遺物は、1区土坑21・25で確認した。土師器皿、染付磁器椀・皿、施釉陶器蓋・椀・皿・德利・急須・灯明皿・花入れ、瓦質土器火鉢、硯、棧瓦などがある。1・3区整地1埋土には、焼けた瓦類や壁土が多く含まれていた。その他、1区にある江戸時代の土坑21から縄文時代の磨石、2区溝6からは巻貝、1区土坑25からはガラス瓶も出土した。

なお、土師器の年代観については、平安京Ⅰ～Ⅵ期・京都Ⅶ～ⅩⅣ期という時期区分を使用する<sup>1)</sup>。

表4 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
縄文時代	石製品		石製品1点		
平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、黒色土器、輸入磁器、瓦など		須恵器4点、緑釉陶器1点、瓦1点		
鎌倉時代	土師器、瓦質土器、輸入磁器、瓦、銭貨など		土師器27点、輸入磁器2点、瓦質土器2点、瓦18点、銭貨4点、鉄製品1点、動物遺体2点		
室町時代	土師器、須恵器、施釉陶器、瓦器土器、焼締陶器、瓦など		土師器3点、須恵器2点、施釉陶器1点、瓦質土器5点、焼締陶器2点、瓦2点、石製品1点		
江戸時代	土師器、施釉陶器、磁器、瓦、壁土など		土師器2点、施釉陶器6点、瓦質土器1点、磁器12点、焼締陶器1点、瓦14点、銭貨1点、石製品2点、鉄製品1点、壁土6点		
明治時代以降	磁器、施釉陶器、ガラス製品など		磁器3点、ガラス製品1点		
合 計		50箱	129点 (7箱)	43箱	0箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より7箱多くなっている。

## (2) 土器類 (図37～41、図版8、付表1)

### 1) 平安時代の土器 (図37)

1は緑釉陶器碗である。高台接地面部分の釉薬が剥離していたが、全面に緑釉を掛けていたとみられる。高台は貼り付け高台で、ナデで丁寧に調整する。器形は外方へ膨らみながら立ち上がる。2は須恵器杯底部である。全面をナデ調整する。高台を貼り付け時に強くなでたため、底面に指跡が残る。3は須恵器壺底部で、高台を貼り付ける。接地面の外面側には、単子葉植物の穂や茎とみられる圧痕が認められる。全面ナデ調整であるが、底面はヘラケズリ調整である。外面の一部が焼締陶器のように赤褐色化し、自然釉が発生している。4・5は須恵器瓶子の口縁部及び胴部上半である。4は口縁部を外反させて、端部を上方につまみ上げる。5はナデ調整、底部は糸で切り離れたままの状態であった。

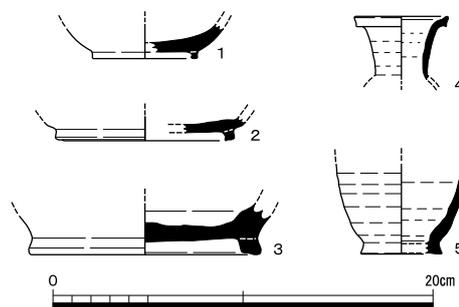


図37 平安時代の土器実測図 (1:4)

出土地点は、1・5が2区南半、2・3が1区土坑21、4が3区土坑6である。土器の時期は、1が平安京Ⅱ期古段階、2が平安京Ⅰ期新段階～Ⅱ期古段階、3は平安京Ⅰ期新段階、4・5は平安京Ⅱ期中段階頃とみられる。

出土地点は、1・5が2区南半、2・3が1区土坑21、4が3区土坑6である。土器の時期は、1が平安京Ⅱ期古段階、2が平安京Ⅰ期新段階～Ⅱ期古段階、3は平安京Ⅰ期新段階、4・5は平安京Ⅱ期中段階頃とみられる。

### 2) 鎌倉時代の土器

2区溝6出土土器 (図38、図版8) 6～21は土師器皿で、6～16が小型、17～21が中型である。器面の色調は、7・8・14・17・18がいわゆる赤色系、11が黄褐色系を呈し、その他の土器は白色系である。6～8は底部が平らで、口縁が直角に立ち上がり、7・8については端部が内側につまみ上げられている。口径4.1～6.9cmのコースター形の小型化した皿である。9～13は器高が1.0～1.8cmまでに収まる浅い皿である。外面の底部との境目に明瞭にナデによる段が残るもの(9)とそれ程明瞭ではないもの(10～13)がある。口径は7.2～8.9cmである。14～16は器高1.8～3.2cm、口径7cm前後の深い皿である。口縁部をなでる。17は口径11.2cm、器高1.7cmを測る。口縁端部をつまみ上げ、外面を強くなでる。器厚は分厚く、歪んでいる。18は口縁部外面を強くナデ調整する。19～21は器高が3.1～3.4cmと深い。口縁直下を強くナデ、口縁端部をわずかに内湾させる。口径は11.6～13.2cmである。19は内面口縁端部から約0.5cmのところに色調の変わり目がある。口縁部周辺は灰白色、底部付近は灰色を呈しており、重ね焼の痕跡とみられる。22・23は瓦質土器碗である。22は口縁部から体部にかけて残存していた。口縁端部をつまみ上げ、外面を強くなでる。摩耗が著しいが、内面には並行するミガキ調整が確認できた。23は底部の破片である。高台は貼り付けで、丁寧になでている。内外面ともに磨滅しているが、内面はミガキ調整、外面はナデ調整とみられる。土師器皿の時期は京都Ⅶ期古段階に収まり、瓦質土器碗も同じ時期とみられる。

2区整地3上層出土土器 (図38、図版8) 24～34は土師器皿、35は輸入磁器壺である。24～

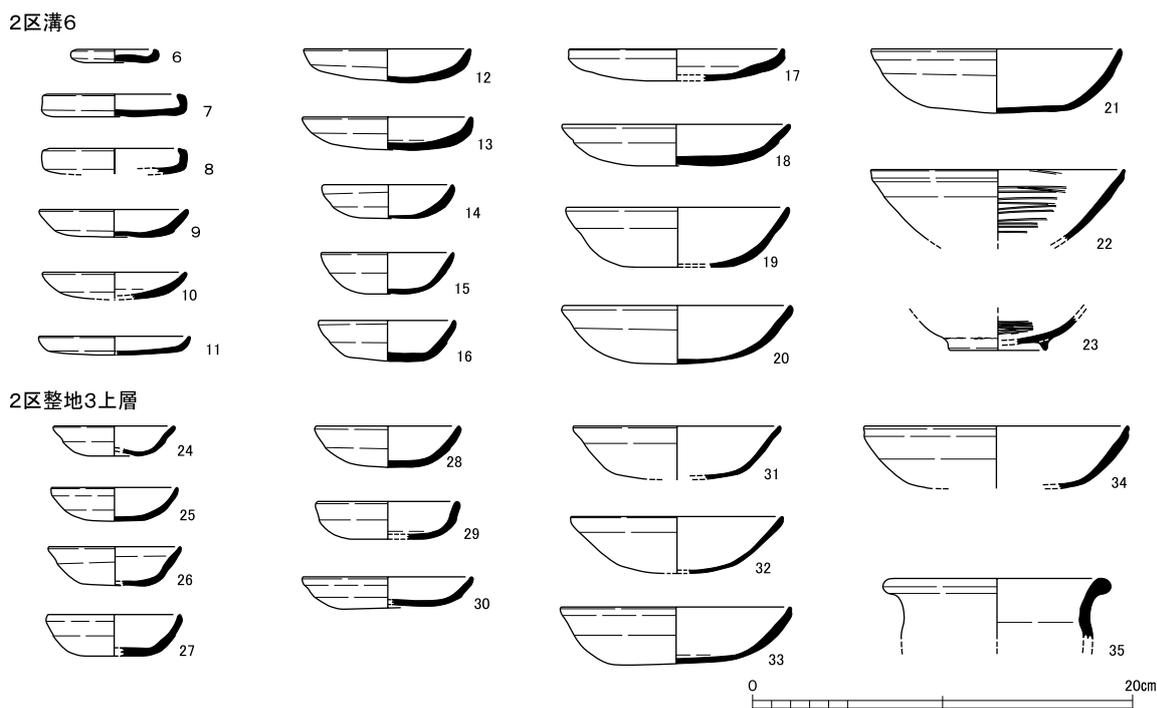


図38 2区溝6・整地3上層出土土器実測図（1：4）

28は小型で、白色を呈する。口縁部が外反するもの（24・26）、内湾気味に立ち上がるもの（25・27・28）がある。また、前者でも26の口縁端部は内湾する。いずれの土器も口縁部外面を強くナデ調整する。24の底部中央は少し窪む。29は口径7.2cm、器高は2.0cmの赤色系小型皿である。底部からほぼまっすぐに口縁部が立ち上がる。口縁部外面を強くナデ調整するため、段差が生じている。30は口縁部外面を強くナデ、端部をつまみ上げる。底部がわずかに窪む。器高は低い。31～34は口径10.9～13.8cm、器高3cm内外を測る。いずれも口縁部外面をなでるが、31は口縁端部をわずかに内湾させ、そのほかのものは断面三角形状につまみ上げる。また、32～34の口縁部の器厚は、底部の倍の厚みを持つ。35は龍泉窯系青磁壺の口縁とみられる。口縁部は頸部から緩やかに外反する。口縁端部は面取りしているが、釉薬が厚く掛かり、端部は丸味を帯びている。釉薬は青灰色を呈する。土師器皿の時期は京都Ⅶ期中段階の13世紀末から14世紀初頭、35は14世紀頃である。

### 3) 室町時代の土器

2区整地4出土土器（図39） 36は白色を呈する土師器皿である。口径10.4cm、器高3.0cmを測る。口縁部内外面を強くなでる。時期は京都Ⅷ期古段階の14世紀後半である。

3区土坑6出土土器（図39、図版8） 37・38は土師器皿、39・40は須恵器鉢、41・42は焼締陶器鉢・播鉢、43～46は瓦質土器火鉢または風炉である。37・38は口縁部が大きく外反し、口縁端部をわずかにつまみ上げる。どちらもにおい橙色を呈する。39・40は東播系鉢の口縁部片である。底部から口縁にかけて大きく外反する。内外面をナデ調整し、口縁端部内面を特に強くなでるため、端部が立ち上がる。また、玉縁状に外面に出っ張る。41は備前産とみられ、42は常滑産の口

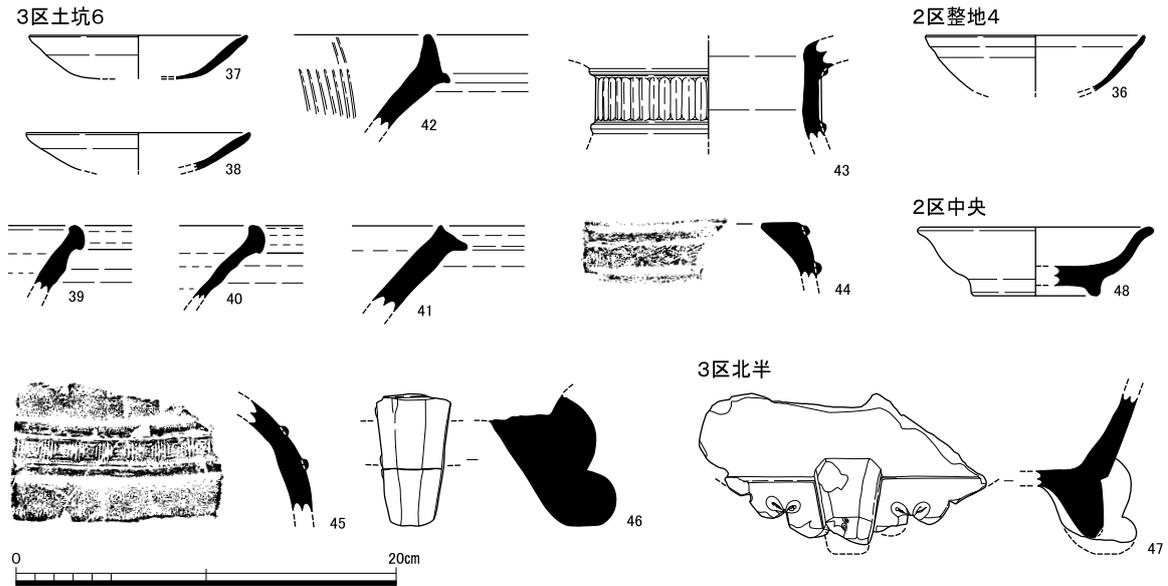


図39 2区整地4・中央、3区土坑6・北半出土土器実測図（1：4）

縁部片である。41には挿目は確認できなかったが、42には7本を一単位とする櫛描きが認められた。底部から頸部に向かって引いたものとみられ、口縁部内面に2本分の櫛描痕が残る。41は体部を大きく外反させ、口縁端部内面をわずかにつまみ上げ、同外面を下方へつまみ出す。42の器形は、体部を大きく外反させ、口縁端部を上方に高くつまみ上げる。頸部外面を少しつまみ出す。残存している部分の内面下部は、使用のため磨滅している。43は体部下半が筒型で、体部上半が丸く膨らみ、口縁部はまっすぐ立ち上がる器形の風炉体部片とみられる。上下が欠損し、突帯と体部が一体に作られていないことから、体部中央のくびれた部分に相当する。外面に2条の突帯を貼り付け、その間に縦方向の刻みを入れて、棒状の装飾を作る。棒状装飾の高い部分は弧を描いている部分もあるが、角を持っている部分もあり、先が丸から角のある彫刻刀のような工具を使用して施文したようである。内面には粘土積み上げ時の指頭圧痕が残る。44は奈良火鉢の浅鉢口縁部である。体部が大きく内湾し、口縁端部を内側へ丸く収める器形で、口縁端部は水平に成形されている。口縁外面直下に2本の貼り付け突帯をめぐらし、その間に花菱文やこれを半截した文様を隙間なく並べたスタンプを押す。45は体部が内湾する火鉢の浅鉢体部上半部片である。2条の貼り付け突帯間に、3つの異なる大きさの四角を入子にして上に×を重ねた文様を押捺する。破片にある7つの文様のうち、右3つと左3つが同文様であることから、4つで一単位のスタンプ文とみられる。2次的に焼けており、灰白色から橙色を呈する。調整が明瞭に確認できないが、外面は丁寧にミガキ調整されていたようで、器面が平滑である。46は脚付火鉢の脚部である。側面から見ると、底部側は平坦に成形されているが、外側は半円を2段に積んだ形状を呈する。外面側は3面に面取り加工し、丁寧にミガキ調整されている。脚の両脇に懸魚文に似た出っ張り部分の剥離痕跡が残る。本体の鉢底部と接合させる際に、脚部の粘土にカキメを入れる。時期は37～41・44が14世紀から15世紀初頭（京都Ⅶ期中段階～Ⅷ期新段階）、それ以外が15世紀中頃から後半（京都Ⅺ期古段階～新段階）である。

3区北半出土土器（図39、図版8） 47は瓦質土器火鉢の底部から脚部にかけての破片である。平底の鉢に脚部及び両脇の懸魚文に似た装飾を施す。いずれも貼り付けで、底面は丁寧にナデ調整し、外面ははみ出た粘土を工具で切り取るなどして、接合部を丁寧に磨く。脚部正面は丁寧に5面に面取りされ、つま先の上下から刺突を施す。両脇の装飾は下面に曲線を出すため、半円形に成形し、一番深く切り取った部分の器面に、粘土を刮り抜いて双葉文様を施す。時期は15世紀中頃から15世紀後半とみられる。現代盛土からの出土であるが、天龍寺に関する時期の資料として掲載した。

2区中央出土土器（図39） 48は青磁皿である。底部から緩やかに外反しながら立ち上げ、端部でさらに外方へつまみ出す。器厚は全体的に分厚く、特に底部は1.0cmの厚みを持つ。底面以外に青緑色の釉薬をかける。中国龍泉窯産である。時期は15世紀末頃である。現代盛土から出土した。

#### 4) 江戸時代前期の土器

2区土坑5出土土器（図40、図版8） 49は施釉陶器碗である。器形から天目茶碗と呼ばれている。器形は底部から外反しながら立ち上がり、頸部で緩やかに屈曲し、口縁端部で外方に引き出される。端部は丸い。口径9.8cm、底径3.6cm、器高6.0cmを測る。底部及び高台はケズリ調整、その他はナデ調整である。灰白色の胎土に、黒色の釉薬を底面まで掛ける。美濃産の17世紀中頃とみられる。

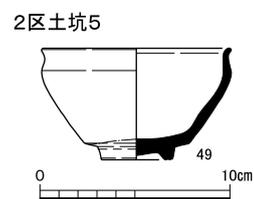


図40 2区土坑5出土土器  
実測図（1：4）

#### 5) 江戸時代中期以降の土器

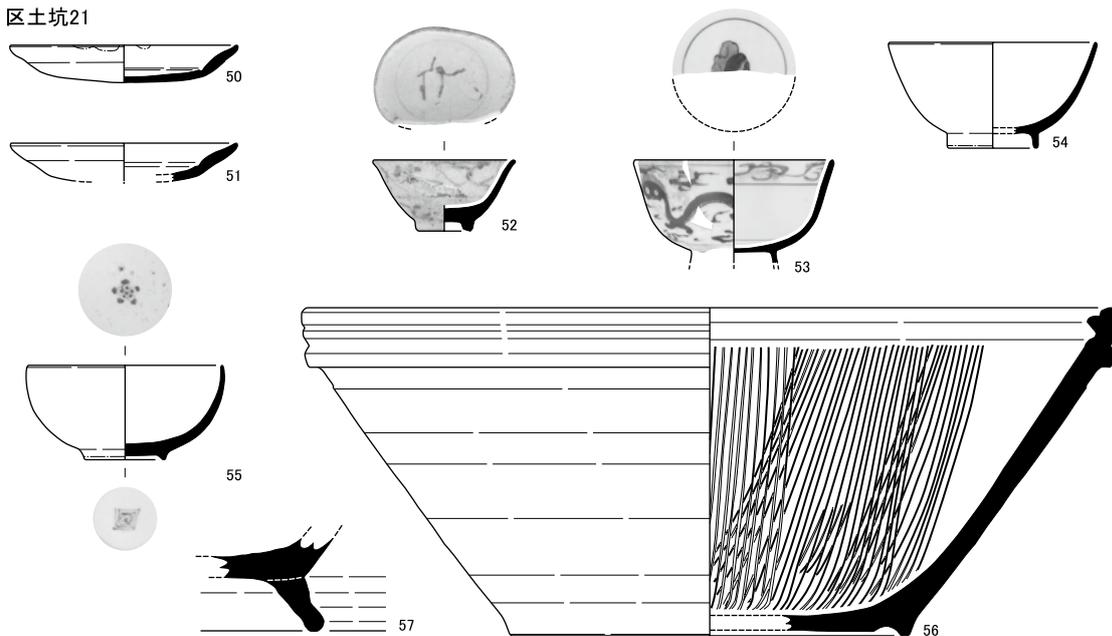
1区土坑21出土土器（図41） 50・51は土師器皿である。内外面をナデ調整、外面底面から底部にかけては、指頭圧痕で未調整である。口縁端部を強く、わずかに上方へ立ち上げる。見込みに圈線を引く。50は口縁端部に油煙痕が残る。52～55は染付磁器碗である。52は小杯である。底面から緩やかに外反しながら立ち上がり、口縁端部でさらに強く外反する。外面中央に線を引く、上下2段に分割して、各々霊芝文を、見込みには圈線と霊芝文を描く。口縁端部を呉須で着色する。器形が変形し、釉薬も泡だった痕跡や溶けて別のものに付着していた痕跡が認められることから、火災などによる二次焼成を受けたようである。肥前産または中国産とみられる。53は外面に簡略化された龍文や飛雲文、内面口縁部に区画線を引いて唐草文、見込みに圈線と宝珠文を描く。呉須は濃い藍色を呈する。高台はハの字に開く。図柄から中国製の可能性がある。54は白磁碗である。接地面は釉剥、その他は透明釉を掛ける。内外面に0.5mm以下の小さい褐色点を所々で確認した。中国徳化窯製の可能性がある。55は肥前系の青磁染付碗である。丸い器形に低い高台が付く。外面に緑釉を塗り、見込みに梅花文、高台見込みに二重方形の中に福の字を書く「角福」の文字が簡略化したものを描く。56は堺・明石系焼締陶器播鉢である。外面及び底面はケズリ調整、接地面周辺及び口縁部外面から内面にかけてはナデ調整を行う。内面に12本1単位の播目が、右から左へ櫛描きされている。口縁部内面直下の櫛痕は、ユビナデで丁寧に消されていた。見込み周辺は使

用痕が確認でき、磨滅のため平滑になっていた。57は瓦質土器火鉢底部片である。内面及び高台内側を丁寧にナデ調整する。外面はミガキに近いナデ、底面はケズリを施す。高台は平底の鉢に貼り付けられていた。

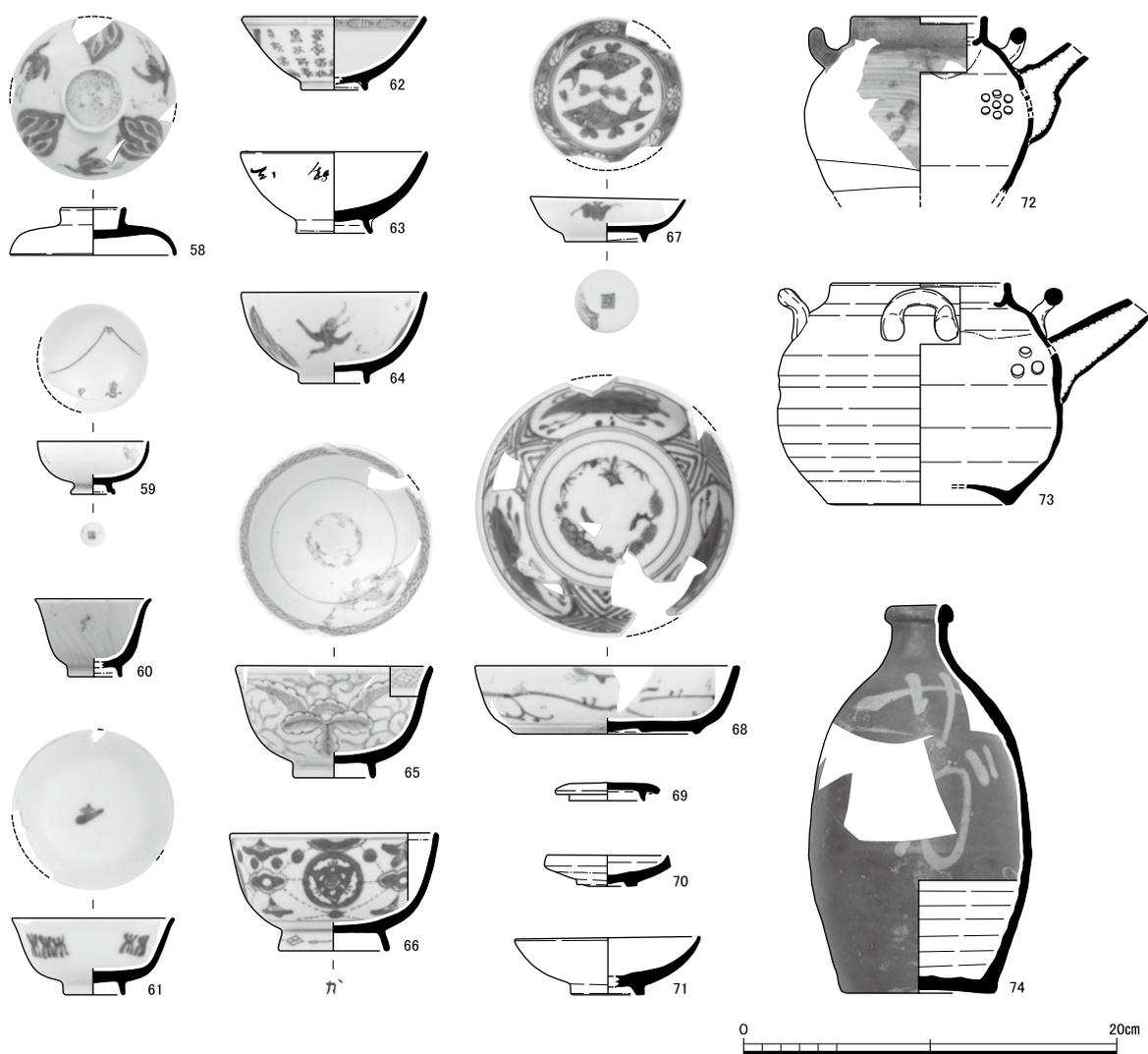
50・51は京都XIV期古段階、52・53は19世紀初頭、54は18世紀末、55は18世紀中頃、56・57は18世紀末である。

1区土坑25出土土器(図41) 58・59・61・62・64～68は染付磁器碗・皿、60は青磁小杯、63は青磁碗である。58は逆ハの字状に広がるつまみをもつ蓋である。外面に鳥及び木々を描いたとみられる文様を交互に配する。64の碗とセットである。59は狭い高台を持つ薄手酒杯である。体部の厚みは2mmと薄い。器形は底部から体部下半にかけて丸身を帯びる。高台内外面に段が付く。見込みの文様は富士山に帆掛け舟2艘が描かれており、そのうちの1艘は「恵」と掛けたものである。これらはコバルトを混ぜた焼継ぎ材のフリットで線描きされている。高台には櫛歯、高台見込みには一重の方形内に何らかの文字を呉須で描く。文字は「寿」が簡略化されたものようである。販売促進用の品である。60は青磁の小杯である。口縁端部が外反する。外面に花卉状の沈線を、底面から口縁部にかけて斜めに刻む。内面・高台見込みは透明釉、外面は緑色釉である。61は器高にたいして口径が広い。口縁端部がわずかに外反し、口紅の錆釉を塗る。外面に2単位と3単位の手描き染色体文が交互に配される。見込みには文様が描かれているが、図柄は不明である。この土坑からは同じ器が他に3点出土しており、組物とみられる。美濃産である。62は底面から大きく外反する碗である。高台は低い。外面は上下に圏線を引き、その間に楼閣を簡略化した文様と右から左へ漢字を縦方向に書きならべて漢詩風文様としている。焼継ぎ痕がある。口縁部内面には連続した雷文を施す。63は外面に緑釉を塗る青磁碗である。口縁部外面にイッチン掛けをして、「…和玉○并…」と黒文字を描く。64は58に組み合う蓋物の碗である。中心付近で割れたものを、焼継ぎした痕跡が認められる。外面に鳥文と木々の集合文を交互に配する。もう1点同じものが出土していることから、組物とみられる。肥前産である。65は文様をペンシルタッチで描く碗である。一部に焼継ぎ痕があり、その欠損部分に粘土状のものを詰めて、染付で線をつなぎ、その上に釉薬の代わりとしてフリットを塗った部分を確認した。外面文様は芭蕉文、口縁端部内面は四方禳文、見込みは圏線を大きく引いた中央に松竹梅繫文を配する。66はハの字状高台の碗である。口縁端部から内面にかけての部分に釉剥ぎする。丸文の中に花文を描いたものと、横から見た花卉をつなげたものとを交互に配置し、文様同士を破線で繋ぐ。高台外面には四目菱と波線を交互に描く。高台見込みにフリットで「か」と書く。焼継ぎ痕があることから、依頼者を特定できるようにする目印として書いたとみられる。67は瀬戸・美濃系の皿である。見込みに魚文、口縁部内面に花文と笹文、外面に草花文、外面見込みに四角の中に記号を描く。同文・同形の皿がもう1枚出土した。68は蛇の目凹形高台の皿である。内面は中央に松竹梅繫文、圏線、口縁部内面に四方禳文の間に窓を設け、中に隠れ蓑文を描く。外面は梅樹繫文である。69～74は京・信楽系施釉陶器である。69は蓋物の蓋である。外面に透明釉を掛ける。口縁端部が外反する。70は行皿で、輪高台である。口縁端部をつまみ上げる。内面から外面上半部まで透明釉を掛ける。71は平碗である。口縁端部は薄

1区土坑21



1区土坑25



0 20cm

图41 1区土坑21·25出土土器实测图(1:4)

く、内湾する。高台見込みはケズリ調整によって、渦巻きになっている。灰釉掛けであるが、見込み部分が橙色を呈する。見込みに藁灰の痕とみられる傷が付く。72・73は急須である。72は体部上半の口両脇に白釉を刷毛で塗る。耳は粘土紐を貼り付けている。口と胴の境目には、7箇所穴があけられている。口縁部端部から外面に透明釉をかけ、内面に褐色釉を掛ける。底近くの外面に癒着痕が残る。73は口横の高さに白釉を一周塗っている。口と粘土紐の耳を貼りつけていた。口縁端部から底面近くまで透明釉を掛ける。内面には褐色釉を塗る。口と胴の境目には穴を3箇所に開ける。74は丹波産徳利である。正面縦に「サガ」、裏面に「○長」とイッチン盛で書かれている。

59・60・67は明治時代、61・62は幕末、65は19世紀、68は18世紀後半、72・73は幕末から明治時代である。

### (3) 瓦類 (図42～45、図版9・10、附表2)

中世の瓦は2区整地3上層、江戸時代の瓦は1・3区整地1や2区土坑1などから出土した。中世の塼は調査区全域で出土したが、特に3区土坑6、1区溝38から多く出土している。また、火災による二次焼成を受けた瓦や塼が、多量に出土している。掲載した瓦では、85・109が全面、96が裏面下部、97が表面下部から裏面、105は表面、108は裏面が橙色化している。その他、火災で焼けたのかどうかについての判断はできなかったが、76～78は全面橙色、80は全面白色といった瓦も出土した。

なお、瓦の調整方向は、瓦当面に直交する場合は縦、平行する場合は横と記述する。

**軒丸瓦** (図42、図版9) 75・77～79は右巻きの三巴文、76は左巻きの三巴文である。いずれも頭が扁平で尾を長く引く。また、小型であるため、塼など小振りな建築物に使用され、剣頭文軒平瓦がセットで葺かれていたとみられる。75は巴の頭が最も小さい。尾の中程が抑えつけられて潰れているところや、周縁との間に粘土が詰まったような状態になっているところ(2箇所)がある。後者は範面の一部が欠けた範傷である。この傷から79と同範であることがわかった。磨滅が著しく、調整不明瞭である。76は周縁に指頭圧痕が残る。顎部は丁寧なナデ調整、凸部は縦ケズリ調整、瓦当裏面は指頭圧痕とナデ調整である。77は周縁の端に範を抜く際にできた粘土隆帯や皺が確認できた。側面は丁寧なナデ調整、瓦当裏面は指頭圧痕である。丸部との接合部分がソケットのような形状を呈する。78は周縁の粘土の詰め方が悪く皺ができています。顎部は丁寧なナデ調整、瓦当裏面は指頭圧痕及びナデ調整である。丸部剥離の際に、周縁上部が欠損したとみられる。79は75と同範の瓦当下面下部破片である。2箇所の範傷がある。巴の頭は潰れてほとんど形を留めていない。顎部はナデ調整、瓦当裏面は磨滅のため不明である。2区整地3上層から出土し、亀山殿造営時の瓦とみられることから、製作時期は建長七年(1255)前後とみられる。

80・81は巴文の廻りに珠文を巡らす。80は三巴文に、10個以上の珠文が配置され、その周囲を圏線で囲む。巴文の尾同士はくっつく。文様は明瞭ではなく、瓦当面に粘土塊の単位がわかる皺が残る。周縁が範面から約1.5cmの高さがある。顎部及び瓦当裏面は横ナデ調整を施す。81は巴の尾のみであり、珠文は5個以上付く。珠文右から2個目と3個目の間に、木片が押捺された痕跡が残



图42 出土瓦拓影及び実測図（1：4）

る。全体に磨滅しているが、瓦当裏面はナデ調整、丸部側面はケズリ調整、凹部は鉄線切り痕が認められた。82・83は右巻きの三巴文である。82は頭が丸く、尾を長く引く。巴の頭は断面形状台形であり、成形時に押さえつけられたようである。範面には木型の木目が付く。周縁を含めて、少量のキラコが付着する。顎部及び丸部は横ナデ調整、瓦当裏面は指頭圧痕と横ナデ調整である。83は82とは異なる範で造られている。範面に木型痕が残る。周縁を含めて、キラコが少量付き、型が周縁を含めるものであったことがわかる。顎部は横ナデ調整、凸部は縦ミガキ調整、瓦当裏面は横ナデ及び上下方向のナデである。丸部接合の際のカキメが、瓦当裏面の剥離部分に認められた。80～83は1区土坑21から出土した。80は14世紀前半、81は16世紀末から17世紀、82・83は18世紀中頃である。

**軒棧瓦** (図42、図版9) 84は軒平部分が欠損している。右巻きの三巴文である。巴の頭は丸く、尾を長く引く。顎面を横ナデ及び横ケズリ調整する。瓦当裏面下部に釘穴が、上から斜め下に開けられていた。周縁を含めて、キラコが付着していた。1区土坑21から出土した。85は丸部に巴文、平部に雲形唐草文が2転する。軒丸と軒平は別々に造られており、後に軒丸瓦当面を接合している。軒丸・軒平瓦当面は周縁を含めて、キラコが付着する。顎部から平瓦部にかけて横ナデ調整、平瓦凸面は横ケズリ、同凹面はミガキ状の横ナデ調整である。焼けて淡橙色を呈する。1区南半から出土した。84・85の時期は18世紀中頃から19世紀初頭とみられる。

**軒平瓦** (図42、図版9) 86は唐草文の上部に圈線と珠文が付く文様で、東隣接地の2004年度調査地(図12-29地点)から出土した軒平瓦と同文とみられる<sup>1)</sup>。顎部から平瓦部にかけて横ナデ調整、凹部瓦当面側は横ケズリ調整、凹部は布目圧痕が残る。凹部調整の境目に布端圧痕が線状になっていた。3区土坑6から出土した。平安時代後期とみられる。

87・88は剣頭文の小型瓦である。87は右端の文様が半分で切られている。全面ナデ調整である。88右端の文様は、87とは異なり、幅が狭く、上下の形が文様の呈をなしていないことから、足されたものである可能性がある。顎部から平瓦部にかけては横ナデ調整、側面は縦ケズリ調整、凹面は布目圧痕である。2区整地3上層から、軒丸瓦75～79と共に出土していることから、セット関係にあるとみられる。時期は13世紀中頃である。

89は軒平瓦としたが、瓦当面端が直線であることから、板塀瓦などの可能性がある。雲形の唐草文を持つ。凹面右端に沈線が縦方向に刻まれている。凸部のみケズリ調整、その他はナデ調整である。範面にキラコが付着している。90は蓮とみられる中心飾りに2転以上展開する唐草のある文様である。唐草の一部に範傷が認められる。顎部及び瓦当裏面は横ナデ調整、凸部は横ケズリ調整、凹部は磨滅のため不明である。91・92は宝珠を中心として、両方に2転する雲形唐草文を持つ。91には左側掛ける部分が付く、92には右端の瓦当面が斜めに切り取られていることから、角瓦とみられる。顎部から凸部まで横ナデ、凸部は横ケズリ、凹部は横ナデ調整である。89・92は1区土坑21、90・91は1区溝状遺構27から出土した。時期は18世紀中頃から19世紀初頭である。

**道具瓦** (図42・43、図版10) 93・94は1区土坑21から出土した棟込瓦である。93は巴文に珠文が5個以上巡るもので、下部は欠損していた。凸部は縦ケズリ、凹部は縦ナデ調整を行う。周縁

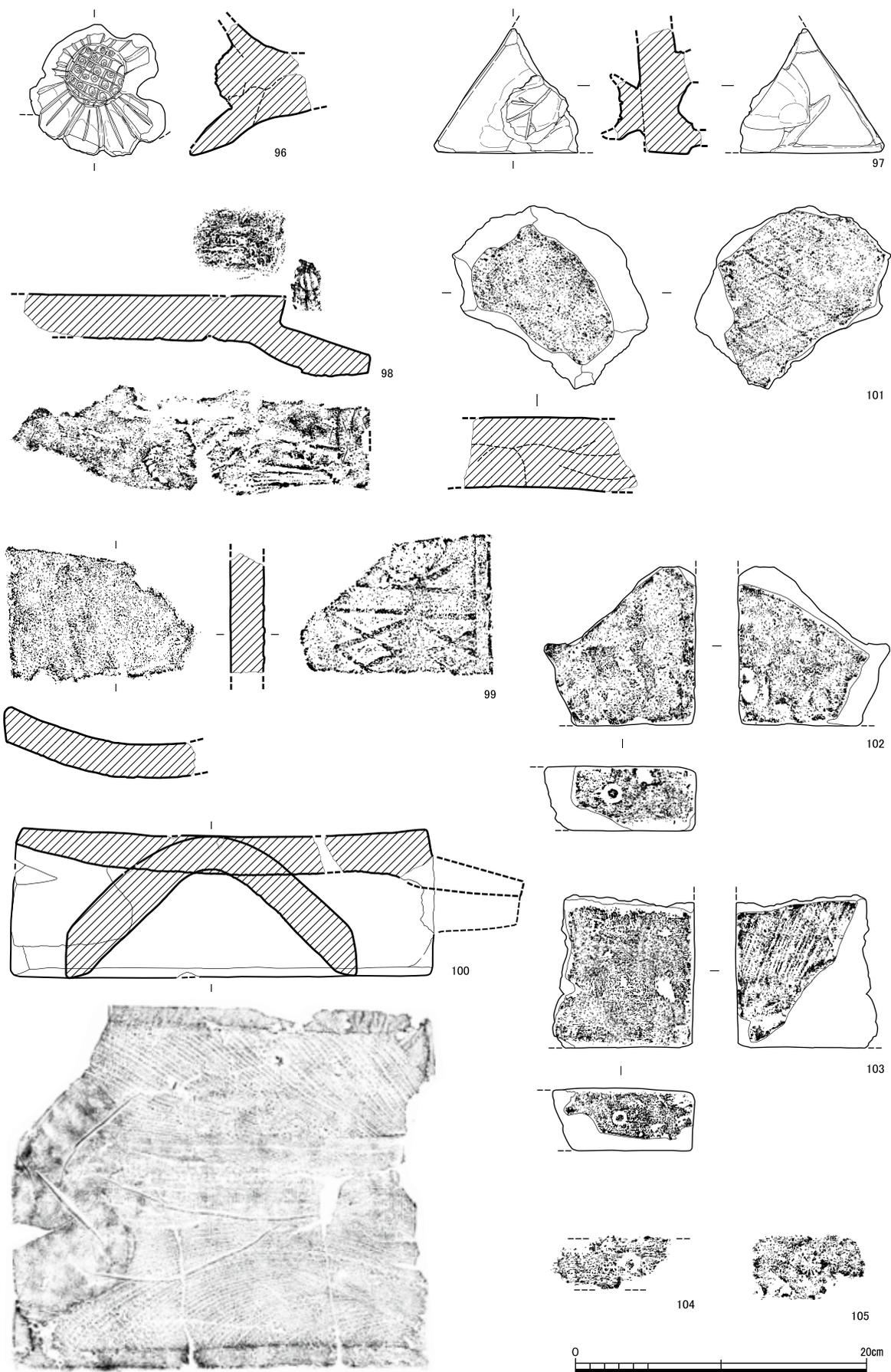


图43 出土瓦・埴拓影及び実測図（1：4）

も含めて瓦当面には、キラコが付着していた。94は8弁の菊花文である。花卉中央がわずかに窪むところもある。凸面及び凹面は縦ナデ、顎部は横ナデである。キラコが周縁及び瓦当面に付着している。花卉が二重にずれている部分があることから、箆を押すまたは外す際にずれたようである。95は瓦当面が平坦な道具瓦であることから、棟の端部に使用する伏間止瓦とみられる。瓦当面の形から猫型とよばれるものである。瓦当面を面に対して右上から左下へ丁寧にナデ調整する。その後、先端の丸い棒状工具を使用して、瓦当面の端に、その形に沿った沈線を施す。凸面及び凹面は縦ケズリ、側面は横ケズリである。1区溝状遺構27から出土した。96は菊付留蓋瓦の菊花の部分である。周辺を花卉の形に成形し、花卉間と中心に沈線を引く。花卉の数は12とみられる。中心部は縦・横に沈線を引いて格子状にし、その間に竹管で刺突を施して花芯を表す。下部の

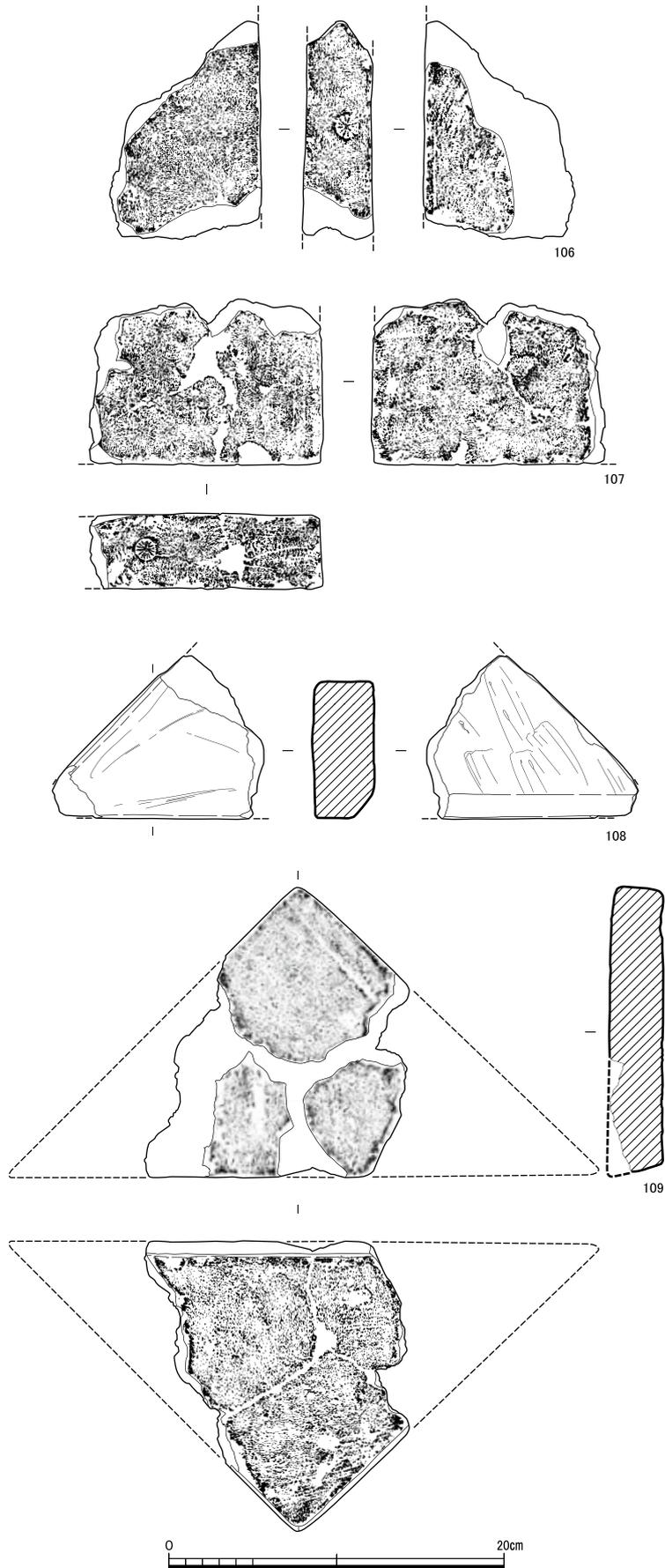


図44 出土埴拓影及び実測図（1：4）

粘土塊の上に、さらに粘土を足して作っていた。正面は丁寧にナデ調整し、裏面は指頭圧痕や爪圧痕のようなもの、工具痕が認められる。下部が火を受けて橙色に変色している。1区土坑21から出土した。97は三角形の埴状瓦に、立体の葉が付く瓦である。嵌め込み式の鬼瓦または棟込瓦の一種であろう。葉には葉脈が沈線で表現されている。表面や側面は丁寧にナデ調整する。裏面は下部と上部に段差があり、また中央に深さ1cm程度の窪みを作る。下から斜め上方向に釘穴が開けられていた。焼けて橙色化している部分がある。3区南半から出土した。93～97は江戸時代中期以降から江戸時代後期までの時期に収まる。

100は雁振瓦である。玉縁部は欠損している。凹面に布目圧痕及び糸切り痕、凸面及び側面はミガキに近い縦ナデ、端面は横ケズリである。凹面の布目圧痕は中央が明瞭に付いていることから、成形台に乗せられてから加重がかかったのは、ほぼこの部分だけであったようである。両脇の糸切り痕は、図面の拓本でみると右上から切り始め、右を中心軸にして左を回して中央まで来た時点で、下に向かって両側から切り取った、という手順を表している。5区溝38上層で出土した。時期は室町時代とみられる。

丸瓦(図43) 98は凹面に紐吊りのある布袋圧痕、玉縁凹面・端面は横ケズリ、凸面は縄目タタキ後横ナデ調整である。凸面に平行沈線でヘラ記号を描き、丸瓦と玉縁との接合部分に「○」の中に「二」が彫り込まれた刻印を押捺する。3区土坑6から出土した。同じ刻印をもつ埴が図12-29・39地点から出土している。時期は鎌倉時代から室町時代とみられる。

平瓦(図43、図版10) 99は凹面に布目圧痕、凸面に格子目タタキ、側面は縦ケズリ調整を施す。火災にあったとみられ、半分が橙色化している。3区土坑6から出土した。時期は鎌倉時代とみられる。

埴(図43・44、図版10) 101は厚さ5.0cmで、出土した埴の中でも一番厚みがある。表面はナデ調整、裏面は格子目タタキである。断面観察の結果、粘土塊を型に詰めて作成したことがわかった。その後、裏面をタタキ板で2回は確実に叩いていた。3区整地8から出土した。鎌倉時代とみられる。102～104は側面に「○」の刻印を持つ。102は表面・側面をナデ調整する。磨滅しているが、裏面はケズリ調整で、所々に指頭圧痕が残る。103は表面・側面をナデ調整、裏面は糸切り痕のちナデ調整である。104は全面磨滅が著しく、調整は不明である。105～107は側面に菊花の刻印を押捺する。105と106の刻印は花卉が12で同じとみられるが、107のものは16弁で異なっている。



図45 胎土に混ぜ込まれた土器片

105は表面及び側面はナデ調整、裏面は磨滅のため不明である。胎土中に土器片(白色土器、2.2cm)が混入していた(図45)。胎土中に同じ白色の筋が入っている部分があることから、土器片を混和材として使用したとみられる。106は表面・側面はナデ調整、裏面は糸切り痕が残る。107は表面・側面が板ケズリ調整、裏面は不明である。裏面に砂が付着していた。須恵器の様に硬

質化していた。108・109は二等辺三角形を呈する。108は角部分で、裏面下部角を面取りしている。表面及び側面はナデ調整、裏面は板ケズリ調整である。109は2つの角を欠損しているが、一辺25cmの方形磚を半分にしたものであることがわかる。表面はナデ調整、側面及び裏面はケズリ調整、裏面には指頭圧痕が残る。102は1区土坑29、103は3区南半、104は1区土坑21、105は2区整地3上層、106は3区土坑6、107は4区集石2、108は1区江戸時代末土坑、109は5区溝38上層から出土した。時期は105が鎌倉時代、その他が鎌倉時代から室町時代とみられる。これら2種類の刻印が押された丸瓦や磚が、東隣接地の29地点の室町時代土坑などや、臨川寺境内53地点から十数点出土している。

出土したすべての磚の厚みを計測したところ、2.6～5.0cmの間で1mm刻みの厚さがあることを確認したが、焼成具合などからは時期分類できなかった。また、遺構ごとに厚みを検討したが、1～2cmの差が認められ、この厚みの差が時期によるものであるのか、使用された建物の違いによるものであるのかまでは、明らかにすることができなかった。しかし、刻印を参考にすると、4.0～4.5cmに収まるものは室町時代と比定できる。磚の一辺の長さが正確にわかる遺物は出土していないが、109の計測値から一辺25cm程度（約8寸）になるとみられる。その他、熨斗瓦が2区整地3上層などの鎌倉時代後期から室町時代後期に属する遺構から少量出土しており、厚みを計測したところ（10点分）、0.9～1.6cm内に収まった。1.3cmの厚さのものが最も多いことから、0.4寸を目安に作られていたとみられる。

#### (4) 石製品 (図46、図版10、付表3)

**磨石 (110)** 中央に窪む部分があるので、凹石の可能性はある。全面が研磨されて平滑になっている。明確な磨りの使用痕は認められなかった。砂岩とみられる。長さ10.1cm、幅7.4cm、最大厚6.6cm、重さ732gである。1区土坑21下層から出土した。

**砥石 (111)** 表裏両面とも使用のため窪む。特に表面は工具痕が顕著で、研磨のため面は平滑になっていた。側面は平らに成形されている。上部の欠損は使用後のものとみられ、下部の欠損は使用前または使用時とみられる。石材は砂岩である。残存長9.3cm、最大幅7.0cm、最大厚3.9cm、重さ397gである。3区土坑6から出土した。

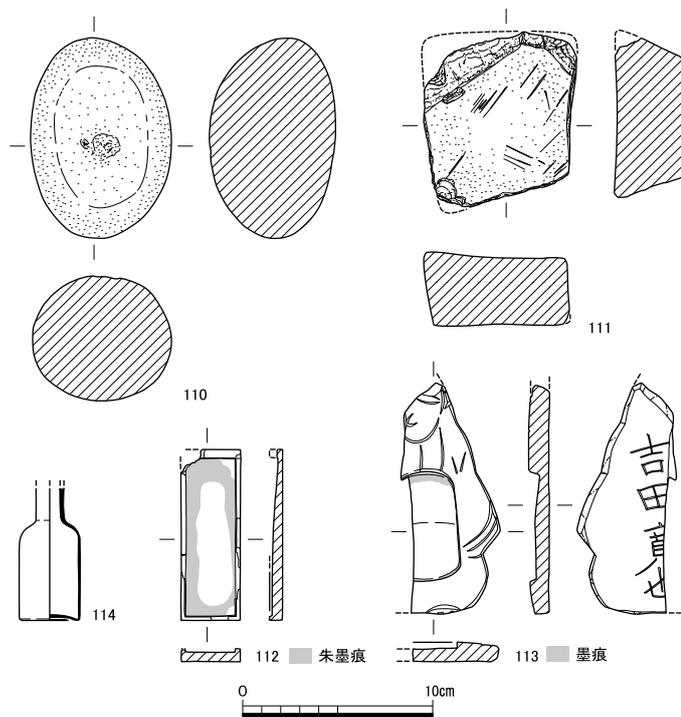


図46 出土石製品・ガラス製品実測図 (1 : 4)

硯（112・113） 112は携帯用とみられる硯である。石材は黒色の斑点が所々に入る灰色を呈した粘板岩系である。側面や裏面を丁寧に研磨して成形する。部分的に面に対して斜め方向の研磨痕が認められる。墨堂から硯池にかけての傾斜部に縦方向の使用痕が残る。表面の周縁際を中心として、朱墨が付着していた。

113は粘板岩または頁岩製の硯である。水干らしき衣装をまとった人形に成形されている。目、鼻、顔の輪郭、着物の皺、靴が線刻で表現されている。腹部分に硯池があり、側縁に墨がわずかに残存していた。側面などには成形時の切り込み痕や研磨痕などが残る。裏面中央には「吉田寛也」と線刻されていた。

### （5）ガラス製品（図46、付表3）

ガラス瓶（114） 口縁部は欠損していた。頸部から底まで、型成形の筋が縦方向に残る。器面は気泡が入り、歪みが生じ、厚みが均一ではない。青緑色を呈する。明治前半とみられる。

### （6）金属製品（図47、付表3）

銭貨（115～119） 115は熱を受けて一部が曲がっている。大半が欠損しているため、判別できる文字は「寶」のみである。116などより2回りほど大きな銭とみられる。中世の銭である。重さは1.9 gを測る。2区整地3上層から出土した。116・117は北宋の1078年に鑄られた「元豊通寶」である。116は行書体、117は篆書体である。重さは116が3.3 g、117が3.1 gである。いずれも1区土坑21から出土した。118は「政和通寶」の篆書体である。北宋の1111年に鑄造された。重さは1.6 gである。3区土坑6肩口から出土した。119は「寛永通寶」である。寶の下が見にくい、「ハ貝寶」であろう。寛文八年（1668）以降に造られたものである。重さ2.2 gで、1区中央南半から出土した。

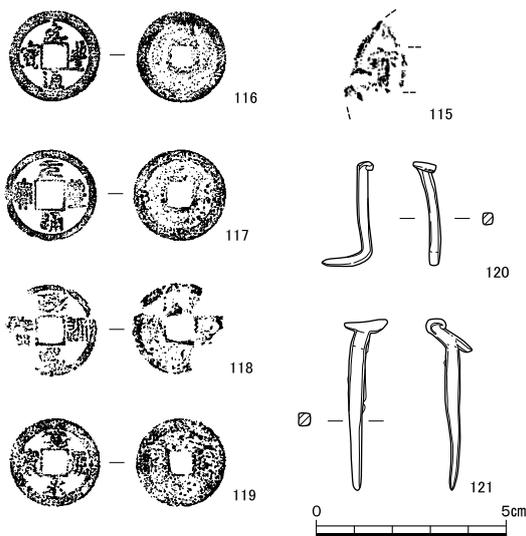


図47 出土銭貨拓影・金属製品実測図（1：2）

鉄釘（120・121） 120は先端がL字に曲がっている。断面は方形で、釘頭は楕円形で、片方の面から折り曲げられて、さらに内側に巻き込まれている。重さ1.2 gを測る。2区整地4から出土した。121は断面方形を呈する。釘頭は楕円形で、片側から内側に巻きながら折り返されている。釘頭から約1 cm下がったところで、T字に曲がる。用途に関するもので、わざわざ切り込みが入れられたようである。重さ2.7 gである。3区整地1から出土した。

### (7) 壁土 (図48、付表3)

壁土 (122～127) スサが平行に並んでいるもの (122) や、面を持つもの (123)、柱材の圧痕らしきものが確認できるもの (124) などがある。曲がった釘が付着した壁土 (125) も出土した。いずれも焼けて赤褐色から橙色を呈する。中には窯壁のごとく黒色に近いほど焼けているもの (126・127) もある。一辺3～6cmに碎けているものが多い。3区整地1から、焼け瓦とともに出土した。

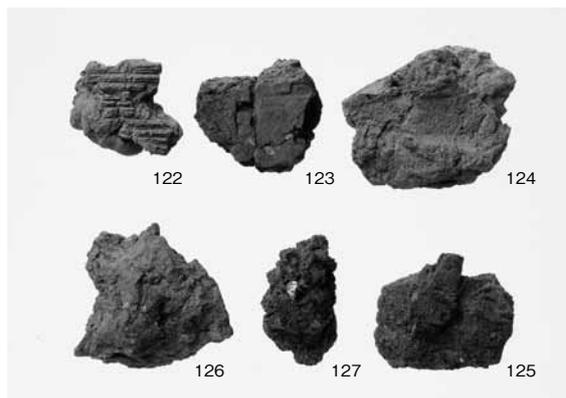


図48 3区整地1出土壁土

### (8) 動物遺体 (図49、付表3)

巻貝 (128・129) いずれも巻貝のアカニシ貝である。128は長さ約12.0cm、幅11.0cm、129は長さ約9.0cm、幅4.5cmを測る。128・129は2区整地3下層から出土した。食物残渣であろう。



図49 2区整地3下層出土巻貝

#### 註

- 1) 上村憲章・小森俊寛「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1996年
- 2) 内田好明『史跡・名勝 嵐山』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004-7 財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2004年の図16-119。

## 6. まとめ

1～5区のすべての調査区で、鎌倉時代から室町時代の遺構を検出したことにより、亀山殿期にはすでに亀山の裾部まで開発が及んでいたことがわかった。2区で検出した東西方向の溝6は、東で北へ約7°振れており、図12-39地点などで検出した亀山殿期の柵列や地業単位の軸の振れに合致する。このことから、その開発は地割に基づいて計画的に行われていたことが明らかとなった。今回の調査地の東隣接地で行った2004年度調査（図12-29地点、図50）では、2区の溝6と直交する振れを持つ溝224が検出されている。この溝は12世紀に造られて亀山殿造営時に埋められたとされており、この地割は平安時代後期に遡る可能性がある。また、鎌倉時代の遺構面では、亀山殿の庭園に付属すると考えられている建物跡（建物3）や景石（景石1・2）などを検出しており、この一帯には庭園施設が営まれていたとみられる。本調査の集石7や整地8・9もこの庭園施設に伴っていたとみられることから、天龍寺造営直前の14世紀前半頃までに庭が幾度か改作されたことを示す遺構として注目できよう。2区溝6を覆う整地3上層からは、塀に使用されていたような小振りな軒丸瓦・軒平瓦が出土しており、溝に平行して塀などの遮蔽施設が造られていたとみられる。

大堰川旧北岸は明治時代に埋め立てられており、現在の岸辺が埋め立てられて南へ拡張されていたことを改めて確認することができた。2004年度の調査（図12-29地点）でも、旧河岸に伴う段差を確認している。図12-39・41地点では、現地表にその段差が現れており、前者では旧地形であったことが確認されている。また、調査区の南では、中世の溝38が造られていたことが明らかになった。この溝は幅約4mの濠状遺構であるが、石積みなどの護岸施設はなく、素掘りであった。遺構は旧大堰川北岸に並行していることから、敷地境の区画溝として造られたと考えられる。また、2区の溝6同様に、庭園という空間を創り出すための亀山殿期の施設であった可能性があり、亀山裾部との取りつきの形状などについては今後の調査に委ねたい。

当地には、江戸時代中期に天龍寺塔頭の三秀院が移転してきており、禁門の変で焼失したが、その後の江戸時代末から明治時代初頭に整地された痕跡が1・3区で確認できた。焼瓦や焼けた壁土などが多く出土していることから、この周辺に瓦葺建物があつたことを窺わせる。東隣接地の2004年度調査（図12-29地点）で、三秀院に関わる建物跡を検出しており、庫裏と想定されている。そのことから、今回の調査地には本堂など寺の中心施設があつたとみられる。ただし、1区南の4区では焼土を含む整地層が確認できなかったことから、1・3区がその南限であつたと考えられる。また、瓦の大半は江戸時代後期のものであることから、三秀院の建物はこの時期に建て替えまたは瓦の葺き替えが行われた可能性がある。

その他、1・3～5区に江戸時代末期から明治時代初頭の遺構が多いのは、三秀院廃絶後に建てられた旅館や別荘の玄関口であつたためとみられる。近代の地図では建物の入口がこの付近に造られており、現存している中門の位置からも推測が可能である。

平安時代前期の遺物は、現渡月橋北西部分を中心に分布しており（図12、表2）、桓武天皇の大

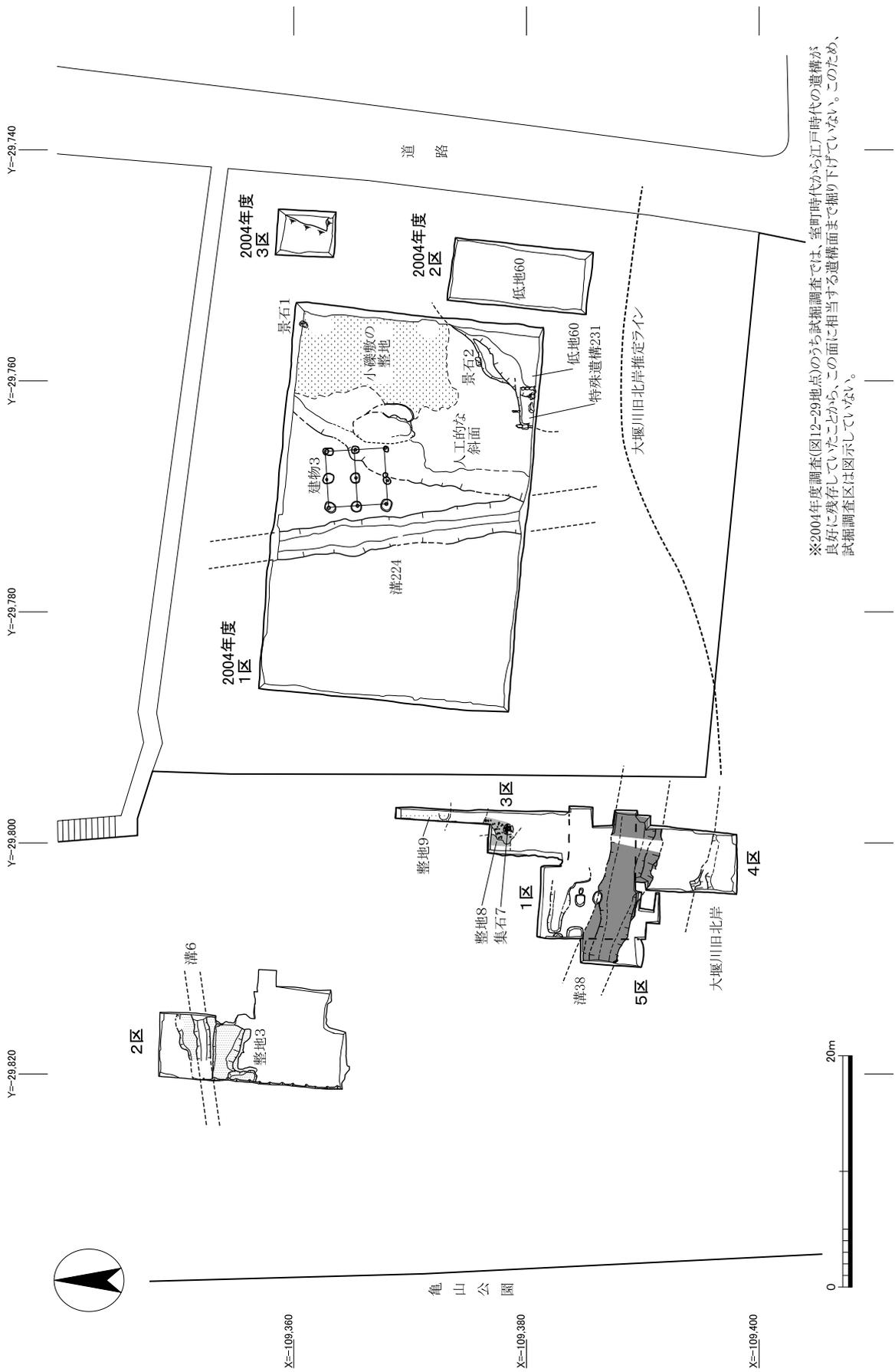


図50 12世紀から14世紀前半遺構配置図 (1 : 500)

堰離宮推定地の根拠とされている。今回出土の平安時代前期の遺物は、直接的に離宮とは結びつかないが、図12-30地点の池跡や29地点の溝に関連するものとみられる。また、11～13世紀の遺物が出土していることから、平安時代中期から亀山殿造立までの期間についても、周辺の土地利用があったことが窺える。室町時代の土坑から出土した遺物の中には、瓦質土器火鉢や風炉がまとまって出土し、寺院に特有の様相を呈している。寺院関係の施設が建てられていたことは、埴が多量に出土していることから傍証できる。埴は古代寺院の床材として使用されたが、禅宗寺院建築においても、四半敷きの床を造る際に使用する。2区中央から大堰川までの敷地には、天龍寺造営当初に多寶院や龍門亭があったとされる。茶亭といわれている龍門亭は中国風の埴敷きであった可能性もある。延文三年（1358）に龍門亭は火災で焼失しており、埴の中に焼けて橙色化したものが含まれていることからその可能性が想定できよう。

今回の調査では、嵯峨嵐山地域の西端を部分的にはあるが、明らかにすることができた。しかし、面的な調査としては不十分で、個々の遺構が何に属し、どのような意味合いを持つのかまで検討することは難しい。全様を明らかにするために、今後も調査を継続して行う必要がある。

#### 註

- 1) 内田好明『史跡・名勝 嵐山』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004-7 財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2004年 図16-119

付表1 土器類観察表

No.	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	胎土	調整、その他
1	緑釉陶器	椀	2区南半	—	(1.8)	(5.5)	10YR8/2灰白色	精良	内外面：緑釉施釉、高台：貼り付け、 接地面：釉剥離
2	須恵器	杯	1区土坑21	—	(1.3)	(8.4)	N5/灰色	精良	内外面：回転ナデ、底部：ケズリ？、 高台：貼り付け
3	須恵器	壺	1区土坑21	—	(2.7)	(12.0)	5Y7/2灰白色	精良	内外面：回転ナデ、底面：回転ケズリ、 高台：貼り付け、接地面に単子葉植物 の穂・茎圧痕、外面に自然釉発生
4	須恵器	瓶子	3区土坑6	(4.9)	(3.4)	—	N4/灰色	精良	内外面：回転ナデ
5	須恵器	瓶子	2区南半	—	(4.8)	(4.2)	N5/灰色	精良	内外面：回転ナデ、底部：糸切り
6	土師器	皿	2区整地3 下層	4.1	0.7	—	2.5Y8/2灰白色	精良	内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、 外面下部：オサエ
7	土師器	皿	2区整地3 下層	6.8	1.2	—	7.5YR8/4浅黄橙色	精良	内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、 外面下部：オサエ
8	土師器	皿	2区整地3 下層	(6.8)	1.4	—	7.5YR8/4浅黄橙色	精良	内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、 外面下部：オサエ
9	土師器	皿	2区整地3 下層	7.8	1.5	—	2.5Y8/2灰白色	精良	内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、 外面下部：オサエ
10	土師器	皿	2区整地3 下層	(7.5)	1.4	—	5Y8/1灰白色	精良	内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、 外面下部：オサエ
11	土師器	皿	2区整地3 下層	(7.9)	1.0	—	10YR8/4浅黄橙色	精良	内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、 外面下部：オサエ
12	土師器	皿	2区整地3 下層	8.7	1.8	—	2.5Y8/2灰白色	精良	内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、 外面下部：オサエ
13	土師器	皿	2区整地3 下層	8.8	1.8	—	2.5Y8/2灰白色	精良	内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、 外面下部：オサエ
14	土師器	皿	2区整地3 下層	6.8	1.8	—	10YR7/1灰白色	良	内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、 外面下部：オサエ
15	土師器	皿	2区整地3 下層	(6.9)	2.2	—	5Y8/1灰白色	精良	内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、 外面下部：オサエ
16	土師器	皿	2区整地3 下層	7.1	2.2	—	2.5Y8/1灰白色	良	内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、 外面下部：オサエ
17	土師器	皿	2区整地3 下層	(11.2)	1.7	—	7.5YR7/4にぶい 橙色	精良	内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、 外面下部：オサエ
18	土師器	皿	2区整地3 下層	(11.9)	2.2	—	5YR7/6橙色	精良	内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、 外面下部：オサエ
19	土師器	皿	2区整地3 下層	(11.6)	3.2	—	2.5Y8/2灰白色	精良	内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、 外面下部：オサエ、内面は灰色で重ね 焼き痕跡とみられる
20	土師器	皿	2区整地3 下層	12.0	3.1	—	10YR8/2灰白色	精良	内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、 外面下部：オサエ
21	土師器	皿	2区整地3 下層	(13.1)	3.4	—	2.5Y8/2灰白色	良	内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、 外面下部：オサエ
22	瓦質土器	椀	2区整地3 下層	(13.3)	(3.8)	—	N3/暗灰色	精良	内外面：ユビナデ・ミガキ、 外面下部：オサエ
23	瓦質土器	椀	2区整地3 下層	—	(1.8)	(5.0)	N3/暗灰色	精良	内面：ミガキ、外面：オサエ、 高台：貼り付け
24	土師器	皿	2区整地3 下層	(6.2)	1.6	—	5Y8/1灰白色	精良	内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、 外面下部：オサエ
25	土師器	皿	2区整地3 下層	6.6	1.8	—	5Y8/1灰白色	精良	内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、 外面下部：オサエ
26	土師器	皿	2区整地3 下層	6.9	2.1	—	10YR8/2灰白色	精良	内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、 外面下部：オサエ
27	土師器	皿	2区整地3 下層	(6.9)	2.2	—	5Y8/1灰白色	精良	内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、 外面下部：オサエ
28	土師器	皿	2区整地3 下層	7.6	2.2	—	5Y8/1灰白色	精良	内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、 外面下部：オサエ

No.	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	胎土	調整、その他
29	土師器	皿	2区整地3 下層	(7.3)	2.0	—	7.5YR7/4にぶい 橙色	良	内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、 外面下部：オサエ
30	土師器	皿	2区整地3 下層	8.8	1.7	—	2.5YR7/6橙色	精良	内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、 外面下部：オサエ
31	土師器	皿	2区整地3 下層	(10.9)	2.8	—	2.5Y8/2灰白色	精良	内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、 外面下部：オサエ
32	土師器	皿	2区整地3 下層	(11.2)	3.0	—	2.5Y8/2灰白色	良	内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、 外面下部：オサエ
33	土師器	皿	2区整地3 下層	12.0	3.1	—	2.5Y8/2灰白色	精良	内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、 外面下部：オサエ
34	土師器	皿	2区整地3 下層	(13.8)	3.4	—	2.5Y8/2灰白色	精良	内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、 外面下部：オサエ
35	青磁	壺	2区整地3 下層	(10.8)	(3.2)	—	10Y8/1灰白色	精良	内外面：青灰色釉
36	土師器	皿	2区整地4	11.4	(3.0)	—	5Y8/1灰白色	精良	内面～口縁外面：ナデ、 外面下部：オサエ
37	土師器	皿	3区土坑6	(11.4)	(2.4)	—	10YR8/2灰白色	やや 粗	内面～口縁外面：ナデ、 外面下部：オサエ
38	土師器	皿	3区土坑6	(11.7)	(2.0)	—	10YR8/4浅黄橙色	精良	内面～口縁外面：ナデ、 外面下部：オサエ
39	須恵器	鉢	3区土坑6	—	(3.5)	—	N5/灰色	やや 粗	内外面：回転ナデ
40	須恵器	鉢	3区土坑6	—	(3.8)	—	N6/灰色	やや 粗	内外面：回転ナデ
41	焼締陶器	鉢	3区土坑6	—	(4.5)	—	10R4/4赤褐色	良	内外面：回転ナデ、常滑産？
42	焼締陶器	播鉢	3区土坑6	—	(5.0)	—	10R4/4赤褐色	やや 粗	内外面：回転ナデ、播目：7本/単位、 内面下部に使用痕、備前産
43	瓦質土器	火鉢	3区土坑6	—	(3.1)	—	N4/灰色	良	内外面：ナデ、突帯：貼り付け、突帯 間に花菱文スタンプ押捺
44	瓦質土器	風炉	3区土坑6	—	(5.3)	—	N3/暗灰色	良	内外面：ナデ、突帯：貼り付け、突帯 間に刻みを入れて棒状文を作る
45	瓦質土器	火鉢	3区土坑6	—	(5.9)	—	10YR8/4浅黄橙色	良	内外面：ナデ、突帯：貼り付け、突帯 間に雷文スタンプ押捺、二次焼成で橙 色化
46	瓦質土器	火鉢	3区土坑6	—	(7.0)	—	N3/暗灰色	良	内面：ナデ、外面：ミガキ・面取り、 接合時の工具痕、接合面にカキメ、両 側面に剥離痕
47	瓦質土器	火鉢	3区北半 現代盛土	—	(7.9)	—	N3/暗灰色	やや 粗	内外面：ナデ、脚部および両脇の懸魚 風装飾は貼り付け、脚部面取り、装飾 に双葉文の彫り込み
48	青磁	皿	2区中央 現代盛土	(12.0)	3.6	(6.4)	2.5Y8/1灰白色	精良	底面：ケズリ、底面以外：緑釉
49	施釉陶器	椀	2区土坑5	9.8	5.9	3.6	5Y8/2灰白色	精良	天目椀、内外面：黒釉、外面下部：回 転ケズリ、高台：削り出し
50	土師器	皿	1区土坑21	11.9	2.0	—	5YR7/6橙色	精良	内面～口縁外面：ナデ、外面下部：オ サエ、内面に圏線、口縁端部外面に油 煙痕
51	土師器	皿	1区土坑21	(11.9)	(2.0)	—	7.5YR8/6浅黄橙色	精良	内面～口縁外面：ナデ、外面下部：オ サエ、内面に圏線
52	染付磁器	杯	1区土坑21	(7.3)	3.8	2.7	N8/灰白色	精良	接地面～底部：釉剥ぎ、内外面文様： 靈芝、二次焼成により釉が泡立ち、全 体が歪む、中国産？
53	染付磁器	椀	1区土坑21	10.4	(5.5)	—	N8/灰白色	精良	内面文様：雲・不明、外面文様：龍・ 飛雲
54	白磁	椀	1区土坑21	(10.8)	5.6	(4.7)	N8/灰白色	精良	接地面：釉剥ぎ、徳化窯製品？

No.	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	胎土	調整、その他
55	青磁染付	椀	1区土坑21	10.2	5.0	4.1	N8/灰白色	精良	接地面：釉剥ぎ、外面：緑釉、見込み文様：梅花、底部外面：二重角福
56	焼締陶器	播鉢	1区土坑21	42.3	17.4	20.8	2.5YR4/3にぶい赤褐色	良	内面～口縁外面：ナデ、外面：回転ケズリ、底部：ケズリ後周辺をユビナデ、播目：12本/単位、内面中央に使用痕
57	瓦質土器	火鉢	1区土坑21	—	(4.9)	—	N3/暗灰色	やや粗	内外面：回転ナデ、底部：ケズリ、高台：貼り付け
58	染付磁器	蓋	1区土坑25	8.8	2.6	径3.4	N8/灰白色	精良	つまみ端部：釉剥ぎ、外面文様：鳥・樹木？、64の蓋
59	染付磁器	杯	1区土坑25	5.9	2.9	2.3	N8/灰白色	精良	接地面：釉剥ぎ、内面文様：フリットで富士・帆掛け船、外面文様：楡歯、四角内簡略文字
60	青磁	杯	1区土坑25	6.1	4.2	2.8	N8/灰白色	精良	接地面：釉剥ぎ、外面：線刻で花卉表現、外面のみ緑釉
61	染付磁器	椀	1区土坑25	8.7	4.2	3.1	N8/灰白色	精良	接地面：釉剥ぎ、口縁端部：口紅、見込み文様：不明、外面文様：染色体
62	染付磁器	椀	1区土坑25	9.7	4.0	3.3	N8/灰白色	精良	接地面：釉剥ぎ、内面文様：雷、外面文様：楼閣・漢詩
63	青磁	椀	1区土坑25	9.0	4.4	3.9	N8/灰白色	精良	接地面：釉剥ぎ、外面：緑釉のちイッチン盛で漢字を描く
64	染付磁器	椀	1区土坑25	9.8	4.9	3.5	N8/灰白色	精良	接地面：釉剥ぎ、外面文様：鳥・樹木？、58の身
65	染付磁器	椀	1区土坑25	10.3	6.1	4.2	N8/灰白色	精良	接地面：釉剥ぎ、内面文様：四方襷・松竹梅繋ぎ、外面文様：芭蕉？・唐草
66	染付磁器	椀	1区土坑25	10.9	6.4	5.7	N8/灰白色	精良	接地面・口縁端部：釉剥ぎ、外面文様：丸・花・花菱、底部外面：フリットで「か」の文字
67	染付磁器	皿	1区土坑25	8.3	2.4	4.2	N8/灰白色	精良	接地面：釉剥ぎ、内面文様：魚・花、外面文様：草花？・二重角内簡略文字
68	染付磁器	皿	1区土坑25	14.0	3.7	9.5	N8/灰白色	精良	高台：蛇の目凹型、内面文様：窓枠内に隠れ蓑・松竹梅繋ぎ、外面文様：梅樹繋ぎ
69	施釉陶器	蓋	1区土坑25	4.0	1.0	体部5.6	5Y7/2灰白色	精良	内外面：回転ナデ、天面：透明釉
70	施釉陶器	行皿	1区土坑25	6.5	1.7	2.1	5Y8/1灰白色	精良	内外面：透明釉、高台：削り出し
71	施釉陶器	平椀	1区土坑25	9.8	3.2	3.8	2.5Y6/4にぶい黄色	精良	内外面：透明釉、高台：削り出し
72	施釉陶器	急須	1区土坑25	7.0	(9.5)	—	2.5Y7/2黄灰色	精良	内外面：回転ナデ、外面下部：回転ケズリ、口縁内面：釉剥ぎ、外面中程：白化粧、耳・口は貼り付け、穴は約0.4cmを7つ開ける
73	施釉陶器	急須	1区土坑25	9.0	11.9	9.4	2.5Y7/3浅黄色	やや粗	内外面：回転ナデ、外面下部：回転ケズリ、口縁内面：釉剥ぎ、外面中程：白化粧、耳・口は貼り付け、穴は約0.7cmを3つ開ける
74	施釉陶器	徳利	1区土坑25	3.0	21.0	7.8	2.5Y5/1黄灰色	精良	内外面：回転ナデ、底部：糸切り後ナデ、外面：施釉後イッチン盛で「サガ」「○長」

付表2 瓦類観察表

No.	種類	文様	遺構名	高さ (cm)	幅 (cm)	長さ (cm)	色調	胎土	調整、その他
75	軒丸瓦	三巴文	2区整地3 上層	(10.1)	10.9	(3.7)	5Y4/1灰色	やや 粗	瓦当側面：横ケズリ、瓦当裏面：ナデ
76	軒丸瓦	三巴文	2区整地3 上層	(10.4)	(10.8)	(4.1)	2.5Y7/4浅黄色	やや 粗	凸・凹面：縦ケズリ、瓦当側面：横ケ ズリ、瓦当裏面：ナデ・オサエ
77	軒丸瓦	三巴文	2区整地3 上層	(8.1)	(8.6)	(2.8)	2.5Y5/2暗灰黄 色7.5YR6/4にぶ い橙色	良	瓦当側面：横ナデ、瓦当裏面：ナデ、 側縁：ユビナデ
78	軒丸瓦	三巴文	2区整地3 上層	(8.8)	10.8	(2.2)	10YR6/2にぶい 黄橙色2.5Y5/3 黄褐色	やや 粗	瓦当側面：横ナデ、瓦当裏面：ナデ、 側縁：縦ケズリ
79	軒丸瓦	三巴文	2区整地3 上層	(5.5)	10.9	(1.9)	5Y4/1灰色	やや 粗	瓦当側面：横ケズリ、瓦当裏面：ナデ
80	軒丸瓦	三巴文	1区土坑21	(9.6)	(12.5)	(3.7)	2.5Y8/1灰白色	やや 粗	瓦当側面：横ナデ、瓦当裏面：ナデ
81	軒丸瓦	巴文	1区土坑21	(8.6)	(11.0)	(9.9)	2.5Y2/1黒色	良	凸面：縦ケズリ、凹面：鉄線コビキ、 瓦当裏面：ナデ、側縁：縦ケズリ
82	軒丸瓦	三巴文	1区土坑21	11.2	11.0	(2.8)	2.5Y2/1黒色	良	凸面：縦ケズリ、瓦当側面：横ケズリ、 瓦当裏面：ナデ・オサエ、側縁：縦ナ デ、瓦当面にキラコ付着
83	軒丸瓦	三巴文	1区土坑21	11.1	10.0	(3.9)	2.5Y2/1黒色	良	凸面：縦ケズリ、瓦当側面：横ケズリ、 瓦当裏面：ナデ、側縁：縦ケズリ、 瓦当面にキラコ付着
84	軒棧瓦	三巴文	1区土坑21	(5.2)	(9.3)	(4.2)	N4/灰色	やや 粗	瓦当側面：横ナデ、瓦当裏面：ナデ、 瓦当面にキラコ付着
85	軒棧瓦	三巴文 唐草文	1区南半	(7.3)	(11.3)	(7.9)	10YR8/4浅黄橙 色	やや 粗	凸面：横ケズリ・横ナデ、凹面：横ケ ズリ、顎部下部・瓦当裏面：横ナデ、 全体が二次焼成のため橙色化
86	軒平瓦	唐草文	3区土坑6	3.7	(11.4)	(7.3)	10YR7/4にぶい 黄橙色	やや 粗	凸面：縦ケズリ、凹面：横ケズリ・布 目、顎部下部・瓦当裏面：横ケズリ
87	軒平瓦	剣頭文	2区整地3 上層	2.8	8.2	1.9	2.5Y3/1黒褐色	良	凸面：横ケズリ・横ナデ、凹面：布目、 顎部下部：横ケズリ、瓦当裏面：横ケ ズリ
88	軒平瓦	剣頭文	2区整地3 上層	2.8	5.5	4.5	2.5Y2/1黒色	やや 粗	凹面：布目、顎部下部：横ナデ、 瓦当裏面：横ケズリ
89	軒平瓦	唐草文	1区土坑21	(4.5)	(9.9)	(4.9)	N3/暗灰色	良	凸面：縦ケズリ、凹面：縦ケズリのち 沈線、顎部下部：横ケズリ、瓦当裏面： 横ナデ、瓦当面にキラコ付着
90	軒平瓦	唐草文	1区溝状 遺構27	(5.4)	(7.4)	(6.4)	N3/暗灰色	良	凸面：縦ケズリ、凹面：横ケズリ、顎 部下部：横ケズリ、瓦当裏面：横ナデ
91	角瓦	唐草文	1区溝状 遺構27	(7.4)	(16.0)	(8.4)	N3/暗灰色	粗	凸面：横ケズリ、凹面：縦ケズリ、顎 部下部：横ケズリ、瓦当裏面：横ナデ、 瓦当面にキラコ付着、平部に掛ける部 分が付く
92	角瓦	唐草文	1区土坑21	(4.4)	(15.7)	(7.1)	N3/暗灰色	精良	凸・凹面：横ケズリ、顎部裏面：横ナ デ
93	小丸瓦	巴文	1区土坑21	(2.7)	(5.8)	(3.6)	N4/灰色	良	凸面：縦ケズリ、凹面：横ナデ、瓦当 面にキラコ付着
94	小丸瓦	菊花文	1区土坑21	5.7	5.6	(3.2)	N4/灰色	良	凸面：縦ナデ、凹面：横ナデ、瓦当側 面：横ナデ、瓦当裏面：ナデ、瓦当面 にキラコ付着
95	伏間 止瓦	沈線文	1区溝状 遺構27	13.3	(25.3)	(8.7)	N3/暗灰色	精良	凸・凹面：縦ケズリ、瓦当側面：横ケ ズリ、瓦当裏面：ナデ・ケズリ
96	菊付留 蓋瓦	菊花文	1区土坑21	縦 (8.1)	横 (8.3)	(9.3)	N3/暗灰色	やや 粗	表・裏面：ナデ、表面：沈線、裏面： 接合部に指頭圧痕・工具痕、裏面下部 二次焼成のため橙色化

No.	種類	文様	遺構名	高さ (cm)	幅 (cm)	長さ (cm)	色調	胎土	調整、その他
97	棟込瓦 か	葉文	3区南半	縦 (8.7)	横 (9.9)	最大 厚3.9	N2/黒色	良	表面・側面：ミガキ、表面：沈線、裏面：ナデ・釘穴、表面下部から裏面が二次焼成のため橙色化
98	丸瓦	—	3区土坑6	5.7	(9.5)	(23.8)	N2/黒色	やや粗	凸面：縄タタキ後ヨコナデ・ヘラ記号、凹面：布袋(縄目あり)、玉縁端部：横ケズリ、玉縁接合部に○に「二」の刻印押捺
99	平瓦	—	3区土坑6	厚さ 2.3	(13.1)	(10.2)	N5/灰色	やや粗	凸面：格子目タタキ、凹面：糸切り後布目・縦ケズリ、側縁：縦ケズリ
100	雁振瓦	—	5区溝38	10.4	20.0	(29.1)	5Y7/1灰白色	良	凸面：縦ミガキ、凹面：糸切り・ナデ・布目、側縁：縦ケズリ、丸部端部：横ケズリ
101	塼	—	3区整地8	縦 (12.7)	横 (13.4)	厚さ 5.0	7.5Y7/1灰白色	粗	表面：ナデ、裏面：格子目タタキ(少なくとも2回)・砂付着
102	塼	—	1区土坑29	縦 (11.0)	横 (10.5)	厚さ 4.5	7.5Y5/1	やや粗	表・側面：ナデ、裏面：ケズリ?・指頭圧痕、側面に○文の刻印押捺
103	塼	—	3区南半	縦 (10.5)	横 (9.7)	厚さ 4.3	2.5Y7/1灰白色	粗	表面：ナデ・砂付着、裏面：糸切り後ナデ、側面：ナデ、○文の刻印押捺
104	塼	—	1区溝38	縦 (11.9)	横 (15.4)	厚さ 4.0	5Y7/1灰白色	粗	表・裏面：磨滅、側面：ナデ、側面に○文の刻印押捺
105	塼	—	2区整地3 上層	縦 (10.5)	横 (7.0)	厚さ 4.8	(表)7.5YR8/4 浅黄橙色 (裏)N4/灰色	粗	表・側面：ナデ、裏面：糸切り、側面に菊花文の刻印押捺、胎土に土器片が混じる、表面二次焼成のため橙色化
106	塼	—	3区土坑6	縦 (13.1)	横 (9.1)	厚さ 4.2	2.5Y6/2灰黄色	粗	表・側面：ナデ、裏面：糸切り、側面に菊花文の刻印押捺
107	塼	—	4区集石2	縦 (10.0)	横 (14.0)	厚さ 4.6	N5/灰色	粗	表・側面：板ケズリ、裏面：ケズリのちナデか?・砂付着、側面に菊花文の刻印押捺
108	塼 (三角形)	—	1区土坑25	縦 (9.3)	横 (12.7)	厚さ 3.7	2.5Y6/1黄灰色	粗	表面：板ナデ、裏面：ケズリ、側面：板ナデ、裏面角を面取り、裏面が二次焼成のため橙色化
109	塼 (三角形)	—	5区溝38	縦 (17.5)	横 (15.8)	厚さ 3.2	2.5Y8/4浅黄色 5YR7/6橙色	粗	表面：ナデ、裏面：糸切り後ナデ、側面：ケズリ、表裏面が二次焼成のため橙色化

付表3 その他の遺物観察表

No.	種類	遺構名	材質	寸法(cm)	重さ(g)	備考
110	磨石または凹石	1区土坑21	砂岩	長さ10.1、幅7.4、厚さ6.6	732	中央に凹み、全面に研磨痕
111	砥石	3区土坑6	砂岩	長さ8.4、幅7.5、厚さ3.9	397	表裏面に使用痕、欠損部以外整形痕
112	硯	1区土坑21	粘板岩系	長さ9.1、幅3.1、厚さ0.7	33.794	朱墨残存
113	硯	1区土坑25	粘板岩または頁岩	長さ12.2、幅5.2、厚さ1.0	81.953	人形、墨残存、裏面に「吉田寛也」の線刻
114	瓶	1区土坑25	ガラス	器高7.1、直径3.1、厚さ0.1	—	青緑色、型枠成形
115	銭貨	2区整地3上層	銅	直径2.3、幅1.7、厚さ0.15	1.942	中世銭、大半欠損、「寶」のみ残存
116	銭貨	1区土坑21	銅	直径2.4、厚さ0.12	3.315	「元豊通寶」、行書
117	銭貨	1区土坑21	銅	直径2.45、厚さ0.11	3.149	「元豊通寶」、篆書
118	銭貨	3区土坑6	銅	直径2.5、厚さ0.12	1.620	「政和通寶」、篆書、一部欠損
119	銭貨	1区中央南半	銅	直径2.4、厚さ0.11	2.152	「寛永通寶」、ハ貝寶
120	釘	2区整地4	鉄	長さ2.75、幅1.3、厚さ0.3	1.236	断面方形、L字に曲がる
121	釘	3区整地1	鉄	長さ4.5、幅1.1、厚さ0.3	2.742	頭部が強く巻き込む、切れ込みで屈曲
122	壁土	3区整地1	土	長さ4.0、幅3.2、厚さ3.5	—	スサが平行に入る
123	壁土	3区整地1	土	長さ4.0、幅4.0、厚さ2.4	—	面を持つ
124	壁土	3区整地1	土	長さ5.8、幅6.4、厚さ4.2	—	建築資材が当たっていた痕跡が残る
125	壁土	3区整地1	土	長さ5.1、幅5.5、厚さ2.8	—	鉄釘(長さ1.5cm、幅1.2cm、厚さ0.2cm、頭部が巻き込む)が付着、断面四角
126	壁土	3区整地1	土	長さ4.5、幅2.4、厚さ2.4	—	窯体状に黒色化
127	壁土	3区整地1	土	長さ4.8、幅4.1、厚さ2.4	—	窯体状に黒色化
128	巻貝	2区整地3下層	—	長さ12.0、幅11.0、厚さ6.5	—	
129	巻貝	2区整地3下層	—	長さ9.0、幅4.5、厚さ4.8	—	破片数点あり

# 圖 版





1 1区第1面全景（西から）



2 1区第2面全景（西から）



1 1区土坑30 (西から)



2 1区溝38 (西から)



1 2区第2面全景（南東から）



2 2区第3面北半 溝6・整地3下層（南西から）



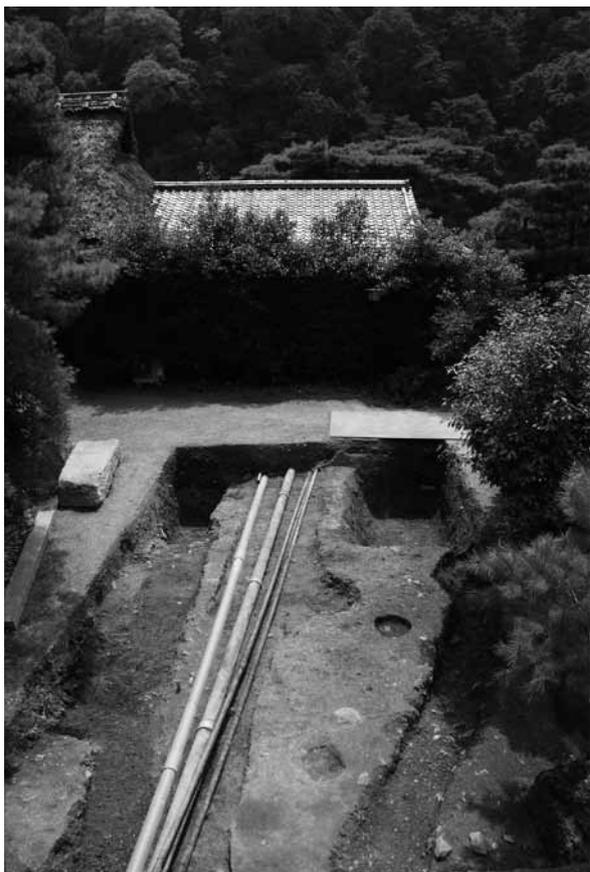
1 3区第1面全景（南から）



2 3区第2面南半全景（南東から）



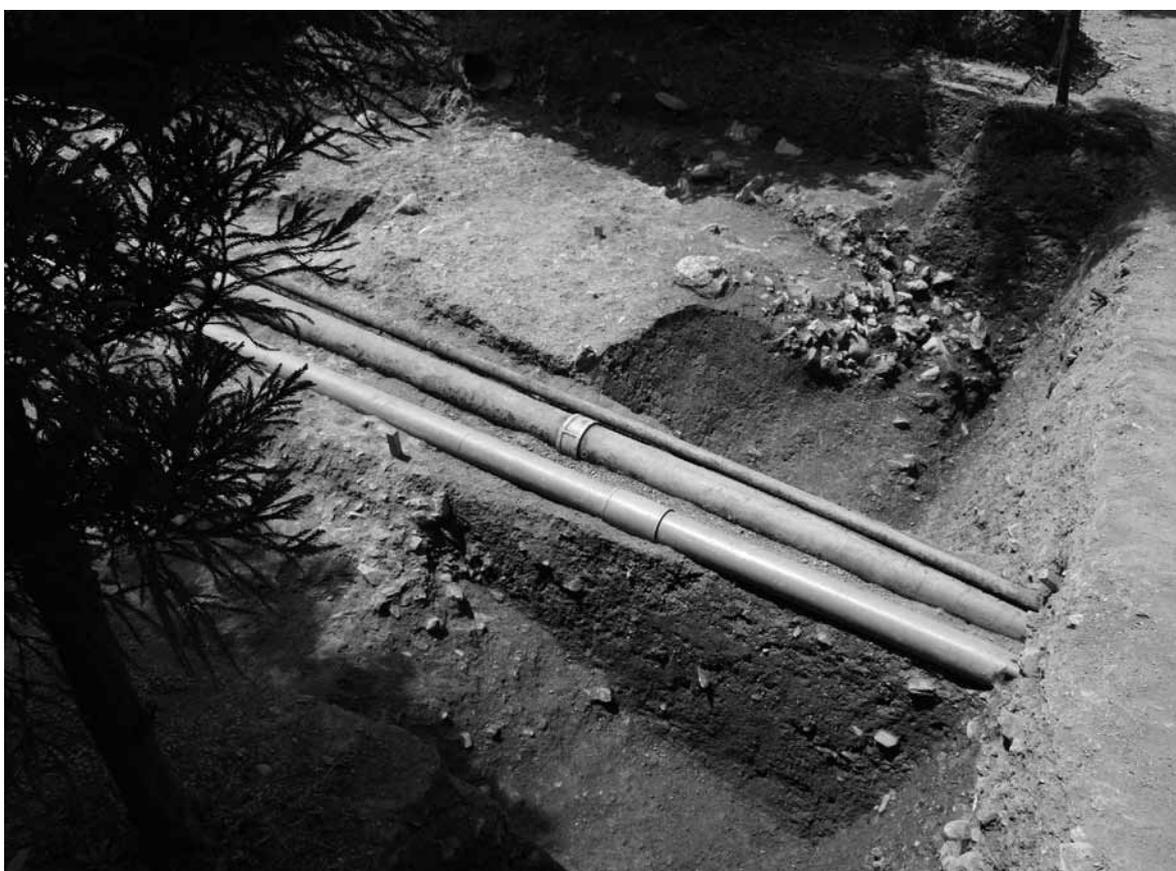
3 3区集石7（北から）



1 4区第1面全景（北から）



2 4区第2面全景（北から）



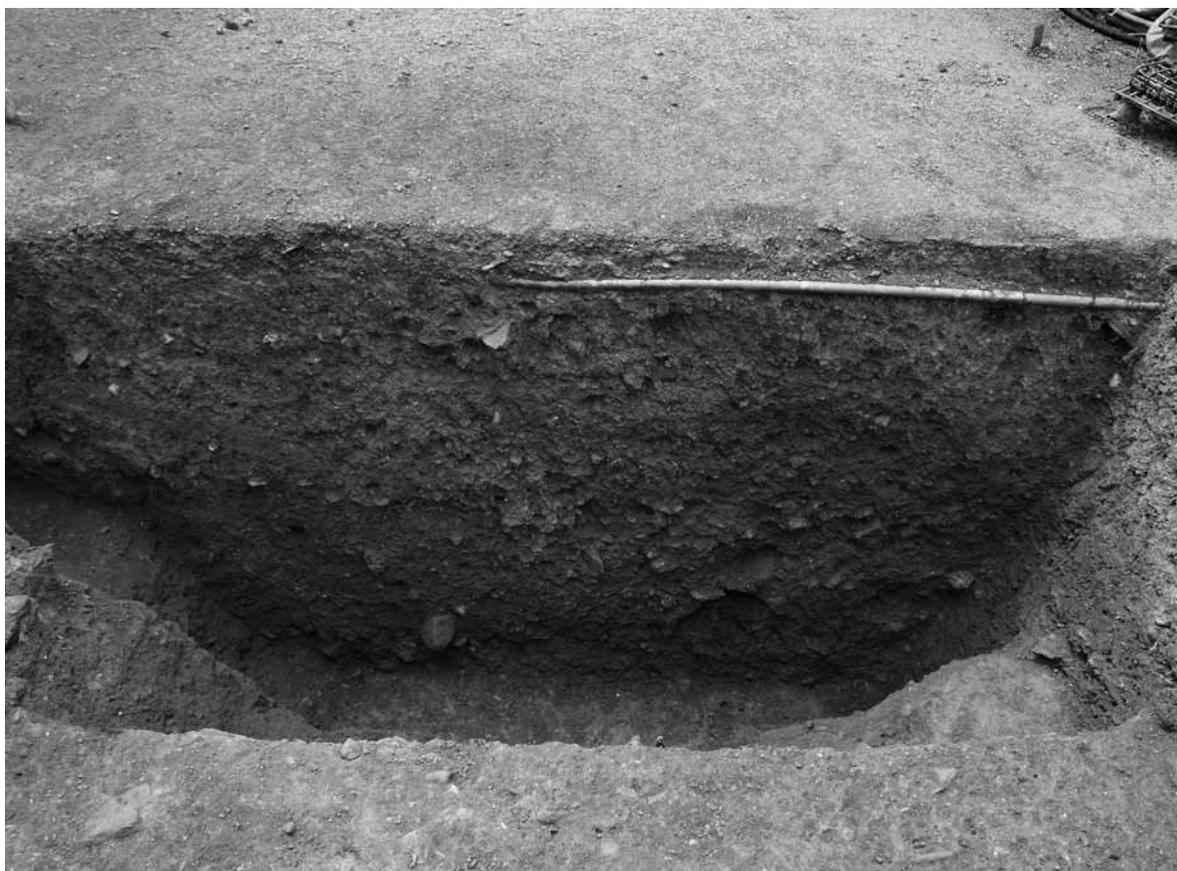
3 4区溝38全景（北東から）



1 5区第1面全景（北から）



2 5区第2面全景（北から）



3 5区溝38断面（東から）



1 1区溝状遺構27(西から)



2 1区溝32(東から)



3 1区土坑25・29・30断面(東から)



4 2区土坑1・溝2(南から)



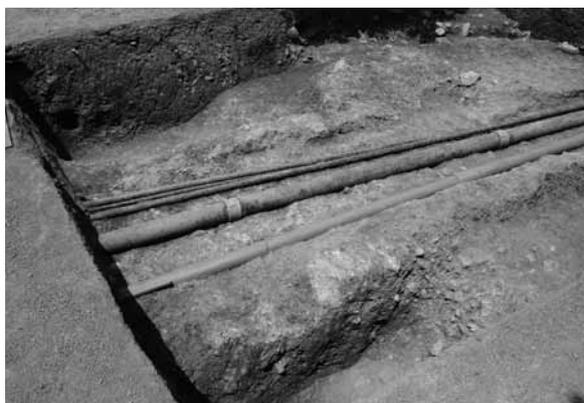
5 2区整地3上層遺物出土状況(北西から)



6 2区土坑5(北東から)



7 4区集石2(南西から)



8 4区大堰川旧北岸(南東から)





75



87



76



88



77



89



90



78



91



82



85



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	しせき・めいしょう あらしやま							
書名	史跡・名勝 嵐山							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2013-17							
編著者名	近藤奈央							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2015年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせき・めいしょう 史跡・名勝 あらしやま 嵐山	きょうとしうきょうく 京都市右京区 さがてんりゅうじ 嵯峨天龍寺 すすきのばばちよう 芒ノ馬場町  12番地の1  ほか	26100	A809	35度 01分 36秒	135度 67分 33秒	2012年12月 10日～2013 年1月24日  2013年6月 21日～2013 年8月20日  2013年12月 17日～2013 年12月19日	288.6㎡	建物改修 及び新築 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
史跡・名勝 嵐山	史跡 名勝	縄文時代		石製品		亀山殿期の東西溝 を検出したことにより、 亀山裾部まで計画的な開発が 及んでいたことが判明。 天龍寺塔頭三秀院の焼失後 整地層や、大堰川旧北岸を 確認。		
		平安時代		土師器、須恵器、黒色 土器、輸入磁器、緑釉 陶器、瓦など				
		鎌倉時代	溝、整地層	土師器、輸入磁器、瓦 質土器、瓦、銭貨など				
		室町時代	溝、整地層、集石、 土坑	土師器、須恵器、施釉 陶器、瓦質土器、焼締 陶器、瓦、石製品など				
		江戸時代	溝、整地層、集石 石敷面、土坑など	土師器、施釉陶器、瓦 質土器、磁器、瓦、石 製品、銭貨、鉄製品など				
		明治時代以降	土坑	磁器、ガラスなど				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2013-17

## 史跡・名勝 嵐山

発行日 2015年3月31日

編集  
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1  
〒602-8435 TEL 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地  
〒604-0093 TEL 075-256-0961